

目 次

年 度 記 録

1954 年度 (45)

- | | |
|------------------|-------------------|
| 同好会結成祝賀登山 御在所岳 | 秋山合宿B 白馬岳— 針ノ木岳縦走 |
| 夏山合宿 南アルプス縦走 | 冬山スキー合宿 |
| 秋山合宿A 唐松岳— 鹿島槍縦走 | 春山合宿 針ノ木岳 |

1958 年度 (48)

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 5月山行 八ヶ岳 | 穂高岳溜沢 |
| 第一回募集登山 白馬岳 | 鹿島槍ヶ岳偵察山行 |
| 夏山合宿A 南アルプス南部縦走 | 鹿島槍ヶ岳山行 |
| 穂高岳岳沢岩登り | 冬山合宿 遠見尾根 |
| 夏山合宿B 南アルプス縦走 | 春山合宿 五竜岳— 鹿島槍ヶ岳 |

1959 年度 (52)

- | | |
|------------------------|-------------------|
| 穂高岳強化合宿 | 弥陀ヶ原荷上げ 立山・剣岳 |
| 募集登山 剣岳・立山 | 白馬岳偵察 |
| 夏山合宿 剣岳定着 | 鹿島槍ダイレクト尾根 (事故報告) |
| 夏山合宿 縦走A 剣岳— 針ノ木岳— 白馬岳 | 富士山 |
| 夏山合宿 縦走B 剣岳— 槍ヶ岳 | 冬山合宿 白馬岳梅池 |
| 穂高岳屏風岩第一ルンゼ | 五竜岳 |
| 前穂東壁岩登り | 春山合宿 立山・剣岳 |
| 剣岳山行 | スキー合宿 立山 |

1960 年度 (61)

- | | |
|------------------|----------------|
| 北岳・鳳凰三山 | 朝日岳— 白馬岳縦走 |
| 剣岳・小窓尾根— 早月尾根 | 穂高岳溜沢 |
| 穂高岳滝谷第四尾根 | 槍・穂高山行 |
| 募集登山 穂高岳 | 剣岳— 仙人池 |
| 夏山新人縦走合宿 双六岳— 剣岳 | 11月合宿 穂高岳 |
| 夏山合宿 剣岳真砂平定着 | 冬山合宿 穂高岳 |
| 池ノ谷・東大谷 | 春山合宿 横尾尾根— 槍ヶ岳 |
| 槍ヶ岳— 立山温泉縦走 | |

1961年度 (68)

夏山新人合宿 南アルプス縦走
夏山合宿 剣岳二股
立山雷鳥沢スキー行

焼山偵察山行
冬山合宿 焼山

1962年度 (69)

5月山行 後立山縦走(五竜—鹿島槍)
大峰行
残雪の穂高岳
夏山合宿 剣岳二股定着
夏山合宿 後立山縦走(唐松—種池)

新雪の裏銀縦走
御岳山行
11月五竜偵察山行
厳冬の遠見・五竜

1963年度 (79)

5月合宿 表銀座縦走
夏山合宿 剣岳二股定着
夏山合宿 縦走

秋山合宿 笠ヶ岳
冬山合宿 焼山

1964年度 (80)

5月合宿 後立山縦走
早月尾根—剣岳—室堂
追悼山行
杓子岳双子尾根偵察及びOB会結成準備会

杓子岳双子尾根偵察及びOB会結成準備 登山
杓子岳双子尾根冬期山行
五竜岳春山山行

1965年度 (83)

5月合宿 白馬岳・遠見尾根
夏山合宿 剣岳二股
夏山縦走

11月山行
冬山合宿 中央アルプス駒ヶ岳

1966年度 (85)

5月合宿 表銀座縦走
夏山合宿 剣岳真砂
夏山縦走 剣岳—薬師岳—穂高岳
遭難碑建立山行

鹿島槍ヶ岳偵察山行
冬山合宿 鹿島槍ヶ岳
春山合宿 鹿島槍ヶ岳

1967年度 (92)

穂高岳残雪山山行
夏山合宿 剣岳真砂
夏山縦走 剣岳—ババ谷—白馬岳—針ノ木岳

北鎌尾根
冬山合宿 爺ヶ岳東尾根
春山合宿 烏帽子岳—槍ヶ岳

槍ヶ岳北鎌尾根

1968 年度 (98)

5 月合宿 白馬岳—針ノ木岳縦走
夏山合宿 剣沢二股
御在所岳藤内壁

冬山合宿 白馬岳主稜
春山合宿 南岳—北穂

1969 年度 (102)

夏山合宿 剣岳定着
秋山合宿 裏銀座

冬山合宿 爺ヶ岳
春山合宿 前穂高岳北尾根

1970 年度 (105)

5 月山行 穂高岳涸沢
屏風岩東壁雲稜会ルート
大峰奥駈 吉野—前鬼
夏山合宿 剣岳—槍ヶ岳縦走
池ノ谷 二峰南壁—中央壁
槍ヶ岳北鎌尾根
谷川岳—ノ倉沢 衝立岩正面壁

穂高滝谷・奥又白登攀
北岳バットレス
前穂北尾根—北穂
北鎌尾根—奥穂
O B 山行 鹿島槍ダイレクト尾根
冬山合宿 鹿島槍ヶ岳天狗尾根
春山合宿 遠見尾根—五竜岳

1971 年度 (126)

屏風岩・涸沢—西穂
夏山合宿 剣岳定着
夏山合宿 後立山縦走
荒沢尾根より鹿島槍北壁主稜

秋山合宿 横尾尾根—槍ヶ岳
冬山合宿 中崎尾根—槍ヶ岳
小太郎岩ライオンルート
御在所岳東内壁

1972 年度 (上半期概略) (134)

5 月合宿 穂高岳涸沢定着
北鎌尾根—西穂高岳
穂高岳滝谷

夏山合宿 剣岳定着
夏山合宿 縦走

事 故 報 告

—— 1970 年度冬山合宿 (137)

O B 山 行

I. マイナーピーク八ッ峰 (145)

II. 鹿島槍北壁主稜 (147)

1957 年度

同好会結成祝賀登山 御在所岳

期 間 5月
メンバー 村上 西川 加藤 西前 加地

夏山合宿 南アルプス縦走

期 間 7月14日—23日
メンバー CL高橋 SL山本 中村 伊瀬知 村上 西川 加藤 加地 大藤 奥田 吉見 横関 田村 中村 坂田

7月14日 食料購入のため、伊那北で幕営。

7月15日 伊那北(6:15) — 戸台(8:00 — 8:50) — 赤河原(15:15)
伊那北から戸台までバスにゆられ、戸台から戸台川に沿ってカンカン照りの河原を歩く。入山初日で荷が重く、ノロノロと牛の様に歩む。みんなバテ気味で、赤河原でドスン。

7月16日 快晴。 赤河原(5:30) — 六合目小屋(8:45) — 甲斐駒ヶ岳(11:00 — 12:35) — 小松峰(14:00) — 北沢峠(15:05) — 赤河原(16:30)

赤河原、丹溪山荘のうらの沢のつめの尾根を急登して六合目小屋を通り、甲斐駒山頂に達する。帰りは東南のガレを一気に下り、小松峰を通して北沢峠に出て、八丁坂を赤河原へ。テント場には2日遅れて大阪を発った伊瀬知、村上、西川が来ていた。

7月17日 晴後曇。 赤河原(6:30) — 北沢峠(8:55 — 9:10) — ヤブ沢小屋(11:25 — 12:20) — 馬の背(14:15 — 14:30) — 仙丈小屋(15:15)

今日は全員調子よく、八丁坂の登りも2時間で北沢峠に達し、尾根をまき、ヤブ沢をつめ、小屋に行く。途中、ちょっとしたお花畑には名も知らない黄色い花が一面に咲いていた。馬の背をすぎる頃からガスがかかりはじめ、展望はきかず、唯黙々と歩く。仙丈のカール直下、仙丈小屋の近くにテントを張る。

7月18日 曇。 仙丈小屋(10:00) — 仙丈岳(10:25) — 伊那荒倉岳(14:45) — 両俣小屋(18:30)

今日も天気はあまりよくなくガスっており風は強い。出発してから30分で仙丈頂上。頂上から馬鹿になる程長いという馬鹿尾根にかかる。大仙丈をすぎる迄はヤセ尾根で、なかなかス

リルに富んでいる。葎の平近くになる頃から樹林帯に入り、高望池をすぎ、野呂川乗越より縦走路と別れ両俣への急坂を下る。左俣の砂地にテントを張る。夜半から雨になる。

7月19日 雨降ったりやんだり。 久し振りの休養日にトランプをしたり、歌をうたったり、あるものは岩魚をとりに行ったが、獲物は二匹だけ、

7月20日 曇後風雨強し。 両俣小屋（4：30）—北岳（11：30—12：20）

左俣をケルンを頼りに溯行を続けていくと高く細い水流を落している第一の滝—左俣の大滝に出会う。その左手前から沢を離れて高捲き道に入り、そのまま急登して尾根に出る頃からハイ松帯となり、やがてそれをぬけると、そこは小太郎尾根で露岩の道となり、北岳に立つ。小太郎尾根に立った時、風強くガスっていて何も見えない。北岳から農鳥まで時間的にかなりあるので二手にわける。南峰をこえる頃より、風ますます強く雨も降りだしてくる。今日の早立ちと北岳直登の相当なアルバイトで間ノ岳までの遠いこと。尾根が広く、しばしルートを見極めるのに慎重になる。長い下りを終り、稜線から30分程おりた所にある農鳥小屋に6時すぎに着く。小屋は満員、テントを張る場所もい所なく、その上、夜半から土砂降り。

7月21日 晴後曇後雨。 豪雨もウソの様に快晴となり、大門沢に下るものと塩見へ縦走するものと2パーティに分れる。

大門沢パーティ：L山本 中村 伊瀬知 加地 大藤 横関 坂田 田村 中村 吉見
農鳥小屋（11：45）—農鳥岳（14：00）—大門沢小屋（17：40）

縦走パーティ：L高橋 村上 西川 加藤 奥田 停滞。

7月22日 農鳥岳より、この沢の下流地点が強雨のため判別せず、大門沢に下る。

7月23日 大門沢小屋より西山を経て身延へ。

秋山合宿A 唐松岳—鹿島槍縦走

期 間 9月29日—10月3日

メンバー L高橋 奥田 坂田 大藤

9月29日 大町—細野—黒菱小屋

9月30日 黒菱小屋—唐松岳

10月1日 唐松小屋—五竜小屋

10月2日 五竜小屋—五竜岳—鹿島槍—冷池小屋

10月3日 冷池小屋—赤岩尾根—大町

秋山合宿B 白馬岳—針ノ木岳縦走

期 間 9月28日—10月3日

メンバー L村上 加藤 加地 伊瀬知 中村

- 9月28日 四谷—白馬岳
9月29日 白馬岳—不帰岳—五竜小屋（加地、八方尾根より下山）
9月30日 五竜—鹿島槍—冷池（中村、遠見尾根より下山）
10月1日 停滞。
10月2日 冷池—爺岳—種池—針ノ木岳—針ノ木峠
10月3日 針ノ木峠—大沢小屋—大町

冬山スキー合宿

期 間 1月2日—9日
メンバー L高橋 村上 西川 加藤 伊瀬知 奥田 田村 坂田

大町の高橋宅をBHとして、大町スキー場と細野スキー場で指導員の指導のもとにスキー技術の習得に努めた。

春山合宿 針ノ木岳

期 間 3月5日—11日
メンバー L高橋 SL西前 SL村上 加藤 伊瀬知 田村 奥田 大藤

- 3月4日 BH高橋宅に全員集結。
3月5日 営林署小屋を中継地として荷上げを開始。
3月8日 全物資を大沢小屋に上げ終った。
3月9日 アタックに出発したが、地吹雪が烈しく退却。終日スキーで遊ぶ。
3月10日 絶好のアタック日和。大沢小屋（7：30）—針ノ木岳（13：20）—
大沢小屋（15：30）
3月11日 下山。

登山同好会といえども、登山に十分な経験を持っている者はほとんどないと言ってもよい状態であった。それにもかかわらず、この年、雪の針ノ木に登頂し得たのは、アルプスの麓大町で育ち、高校時代山岳部のリーダーを務めた高橋があったからだ。西前はこの年、関西登高会の会員となり、その合宿にも参加していた。岩登りはまだ合宿に取り入れられるまでには至らなかったが、西前、加藤、村上、西川、奥田等が近郊のゲレンデで技術の習得に励んでいた。

1958 年度

5 月山行 八ヶ岳

期 間 4月29日—5月2日
メンバー L加藤 伊瀬地 奥田

4月29日 茅野(6:50)—農場(7:50)—行者小屋100m下にテント設営(13:05) 2,200m 辺りより雪あり。

4月30日 権現岳往復。 テント場(5:50)—権現着(11:10)—テント場着(16:00)

5月1日 午前中雨のため停滞。

5月2日 天狗岳往復。 テント場(6:30)—夏沢峠(11:00)—天狗岳往復—峠発(14:30)—松原湖(17:30) 湖畔にテント。

5月は他に、村上の中央アルプス縦走、西前の鈴鹿御在所がある。又、西前、奥田は、6月末より8月初旬まで、遠見尾根で小屋のバイトをしていた。

第1回募集登山 白馬岳

7月中旬

これは部外者で登山を希望する者が多数いることを考えて、山岳部の奉仕活動の一つとして計画された。この時30名もの参加者があり好評であった。

夏山合宿A 南アルプス南部縦走

期 間 7月12日—22日
メンバー L村上 加藤 西川 田村 大藤 橋本

7月12日 伊那大島—広河原

7月13日 広河原—三伏峠。重荷を背負って互いにバテ合いながら歩いた。

7月14日 三伏峠から塩見岳往復。

7月15日 三伏峠—高山裏露营地。

7月16日 高山裏露营地—荒川中岳—荒川東岳往復—荒川小屋。

7月17日 荒川小屋—大聖寺平—赤石岳—百間洞。連日快晴にめぐまれて?の稜線散歩。

- 7月18日 百間洞—大沢岳—兎岳—聖岳—奥聖岳往復—聖平小屋。今日は距離が長く、聖平小屋に着いたときには真暗になっていた。
- 7月19日 聖平小屋—上河内岳—仁田池。
- 7月20日 仁田池—易老岳—光岳—芝沢小屋。食糧が少くなったので猛烈にとばした。
- 7月21日 芝沢小屋—千頭ダム営林署小屋。軌道の廃道を雨の中をひるにつかれながら。
- 7月22日 営林署小屋—千頭—金谷。

穂高岳沢岩登り

期 間 8月19日—22日
メンバー 西前 奥田

- 8月20日 トリコニーを経て奥穂、T1フェースを登り切ってピヴァーク。
- 8月21日 豪雨の中を天狗沢を下って帰幕した。完全に晴れたのは1日だけだった。

夏山合宿B 南アルプス縦走

期 間 8月24日—9月5日
メンバー CL高橋 SL西前 奥田 坂田 中村 菅生 神崎 竹岡

- 8月24日 伊那大島
- 8月25日 飯田へ食料購入。夜半より雨。
- 8月26日 快晴。昨夜来の雨の土砂くずれとかで鹿塩までどころか上峠までしかバスはいかない。上峠からノロノロ歩いて桶谷部落の河原で幕営。
- 8月27日 快晴。落合(8:10)—塩川(10:55—15:10)—キャンプ地(16:10)
バスを乗りつき塩川手前の材木集積までバス。塩川までノロノロと歩き、塩川でドスンと4時間もの大休止をとり、キャンプ地までいく。
- 8月28日 曇り一時雨。塩川キャンプ地(7:20)—三伏峠(14:50—15:00)—テント場(3:30)
はじめ右岸ぞいに行き、途中で二股となり、左近道と書いてあるので左を行き、エライ時間をくう。途中で倒木のため道がはっきりしなくなり、急斜面をガムジャラに登り、ようやく本道と出合い、本道を少し行くと三伏峠だった。
- 8月29日 快晴。三伏小屋(7:50)—本谷山(8:50)—塩見岳(12:20—13:50)—本谷山(3:30)—三伏小屋(16:05)
竹岡をキーパーに塩見往復、サブザックでハイキングだった。
- 8月30日 風雨強し。停滞。

8月31日 曇のち晴。 三伏小屋（6：40）— 烏帽子岳（7：30）— 小河内岳（9：00—9：20）— 高山ウラ（15：10）

テント場から稜線までの急登にはアゴを出しかけたが、尾根に出ると起伏もそう大したことなく、樹林帯のまき道となり、ピークが判然とせず、現在地の判定にケンケンガクガク。うす暗い林からガレ場に出て高山ウラはすぐと分り昼寝をきめこむ。

9月1日 風雨強し。 停滞。食料係奥田のオジャ説強行さる。反対派ブツブツ言うもハンスとする勇氣はもちあわせていない。

9月2日 晴。 高山ウラ（9：40）— 三叉分岐点（14：10—15：40）— 中岳往復— 荒川小屋（16：25）

テント場から小西俣側の山腹のうっそうとしげる木々の間を通る。木の枝、木の根が行きか、じめじめしたいやな所で、これぞ南アルプスかと思う。暗いまき道をぬけるとパッと明るくなり主稜線まで一息の登り。荒川小屋まではすぐなのでシュラフを出して一眠りとシャレた奴もいた。

9月3日 快晴。 荒川小屋（7：55）— 大聖寺平（8：20）— 赤石岳（10：25—12：00）— 百間平（13：30—14：25）— 百間洞テント場（15：25）

大聖寺平までは草原の散歩気分。天気もよく全員快調。赤石のテッペンで1時間半の大休止。一等三角点のヤグラに登り、北ア、中アをみる。十分休憩して、南面のガレ場を一気に下り、その名の通り広い百間平を横切り、テント場につく。

9月4日 曇後風雨。 テント場（7：55）— 中盛丸山（9：20）— 兎岳（11：50）— 聖岳（14：20）— 聖平（15：30）

朝のなま暖い風と雲足の早いのがいやな天気の前ぶれと思ったが、案の定、兎岳の取付きあたりから風を伴った横なぐりの強雨となってくる。聖岳までの急な稜線を休憩するのももどかしく、頂上からザラ場と泥んこになって下り、樹林帯に入ってから30分ほど、聖平の道標を見、林の中の聖平小屋に入った時にはホッとした気持になった。なおも縦走を続けるつもりであったが、食料の不足で明日下山と決定。夜、食料の残りをみんな腹一杯つめこむ。

9月5日 快晴。 聖平小屋（10：40）— アザミ畑（11：00—11：25）— 西沢渡（13：00）— 梨元— 平岡

昨日の雨もどこへやら上天気になり、今日下山するのも心残りである。うす暗い、苔むした道をたどって西沢渡に至り、これより林鉄で梨元へ。梨元からバスで平岡へ行き、神社で幕営。合宿解散のパーティをすき焼で行う。下界はまだまだ暑く寝苦しかった。

穂高岳 涸沢

期 間 9月28日—30日

メンバー 高橋 西前 田村 中村 坂田 橋本 西林 竹岡 東谷

西前、田村は北尾根二・三峰間ルンゼを登り、他はザイテンより奥穂に立った。

鹿島槍ヶ岳偵察山行

期 間 11月1日 — 6日

メンバー 西前 橋本

- 11月1日 築場 — 黒沢峠 — 大冷沢西俣出合
- 11月2日 停滞。
- 11月3日 ダイレクト尾根の取付きを間違え、南肩尾根を登る。
- 11月4日 冷池小屋 — 赤岩尾根 — テント
- 11月5日 橋本下山。 黒沢峠 — 築場
- 11月6日 西前下山。 黒沢峠 — 築場

鹿島槍ヶ岳山行

期 間 11月23日 — 30日

メンバー L高橋 西前 田村 奥田 垣内 竹岡 菅生 加藤 西川

- 11月23日 大冷沢西俣出合にベースキャンプ設営
- 11月24日 鎌尾根 (高橋 西前 田村 奥田)
赤岩尾根 (加藤 西川 竹岡 菅生 垣内)
- 11月26日 南肩尾根 (ダイレクト尾根の南隣りの尾根) (高橋 奥田) ビバークの後翌日帰幕。
- 11月28日 南肩尾根 (西前 田村 菅生) ビバークの後翌日帰幕。

冬山合宿 遠見尾根

期 間 12月27日 — 1月3日

メンバー L田村 中村 坂田 垣内 竹岡

春山合宿 五竜岳 — 鹿島槍ヶ岳

期 間 3月13日 — 26日

メンバー L高橋 田村 坂田 奥田 橋本 神崎 東谷

- 3月14日 神城 — 遠見 (小屋)
- 3月15日 A : 中遠見にテント場整理雪洞を掘る。 B : 神城往復。
- 3月16日 A : 中遠見にテント設営。 B : 神城往復。

- 3月17日 A：遠見、中遠見間ボッカ。 B：五竜アタック（失敗）。
3月18日 中遠見、五竜小屋間ボッカ。
3月19日 A：五竜登頂後、神崎・東谷下山。 B：中遠見、五竜小屋間ボッカ。
3月20日 停滞（風雪）。
3月21日 八峰キレットへの途中までボッカ。奥田、かぜで下山。
3月22日 停滞（風雪）。
3月23日 停滞（風雪）。
3月24日 坂田、かぜで下山。高橋、田村、橋本の三人で縦走に出発。五竜小屋——八峰キレット小屋。
3月25日 キレット小屋——鹿島槍——冷池。
3月26日 冷池、赤岩尾根より鹿島部落に下山。

食糧係の奥田が下山した後、食糧計画の詳細がわからず困った。それにボッカばかり多く、本番の縦走にかかる時、食糧を停滞で食い荒したので、足りなくなっていた様だ。

1959年度

穂高岳強化合宿

期 間 4月29日——5月4日

メンバー L西前 奥田 橋本 垣内 竹岡 神崎 尼元 宮崎 広瀬

4月29日 晴。 島々宿（7：20）——岩魚留小屋（14：05）——徳本峠（18：50——19：05）——明神白沢渡（21：25）

大町の高橋宅へ行った神崎と遅参の尼元、宮崎はバスで上高地に行き徳沢園に入る。他の6人は島々宿より徳本峠を越える。予想以上の時間を要した。

4月30日 曇のち晴。 明神（9：40）——徳沢（10：25——11：15）——横尾（12：50——14：10）——岩小屋（14：30）

明神より横尾岩小屋付近まで。徳沢で尼元、宮崎合流。テント設営後2人を残して本谷出合で雪上訓練。

5月1日 みぞれ降ったりやんだり。 テント（12：30）——本谷出合（13：50）——南岳尾根末端（14：10——15：20）——テント（16：05）

テントキーパー宮崎。午後横尾本谷南岳尾根末端付近で雪上訓練。

5月2日 晴。 テント（4：25）——本谷出合（5：25）——涸沢ヒュッテ北側（6：30）——ザイテン取付き（7：35——8：00）——穂高小屋（8：45——9：30）

—奥穂頂上(10:10—10:45)—ロバの耳手前のコル(11:30)—ジャンダルムの基部(13:20)—ロバの耳手前のコル(14:50—15:20)—奥穂頂上(15:50)—穂高小屋(16:40)—尻セード—本谷出合(17:55)—テント(18:50)

テントキーパー宮崎。ザイテングラードより穂高小屋へ。西前、奥田、橋本はさらに奥穂よりジャンダルム飛驒尾根をめざすも、ロバの耳手前のコルからの雪壁のトラバースに行きづまり、ジャンダルムの基部よりひき返す。他のメンバーは洞沢岳に登る。

5月3日 晴のち曇。 テント(4:30)—本谷出合(5:30)—右股出合(6:30)—キレット(9:30—10:00)—北穂頂上(13:00—14:00)—テント(17:30)

テントキーパー橋本、広瀬。北穂へ。キレットよりアイゼンをつけ、岩と雪のミックスした岩尾根。下りは北穂沢を尻セード。

5月4日 晴れたり曇ったり、一時小雨。 テント(3:30)—本谷出合(4:30)—洞沢ヒュッテ(5:30)—四・五峰のコル直下(7:00)—テント(9:00—11:40)—徳沢(13:05—13:40)—明神(14:30)—上高地カッパ橋(15:30)—松本。

テントキーパー奥田、宮崎。前穂四・五峰のコルで雪上訓練に向う。ひざまでもぐる軟雪で訓練不能。テントを1日早く撤収して上高地に下る。神崎のみ徳本峠を越える。(橋本記)

募集登山 剣岳・立山

期 間 7月17日—19日

ガイド 橋本 竹岡 西前

参加者約20名

夏山合宿 剣岳定着

期 間 7月21日—8月3日

メンバー CL西前 SL田村 SL橋本 SL奥田 中村 垣内 菅生 神崎 竹岡 笹木
宮崎 菅野 広瀬 穂積 鈴木 高畠 木原

7月22日 弥陀ヶ原—雷鳥荘。

7月23日 雷鳥荘—剣沢にベースキャンプを設営。

7月24日 長次郎谷より剣本峰、平蔵谷下降(2・3年部員)

7月25,26日 雪上訓練(半数ずつ)

7月26日 源次郎尾根縦走(田村、穂積、中村、菅生、広瀬、高畠)

- 7月27日 ハッ峰上半縦走（西前、橋本、田村、神崎、広瀬、笹木、穂積）、源次郎尾根縦走（奥田、垣内、竹岡）、別山尾根より剣本峰（中村、菅生、木原、鈴木、高島、宮崎）
- 7月28日 ハッ峰六峰 Aフェイス中大ルート（奥田、垣内、笹木）——退却。Aフェイス魚津高ルート（橋本、神崎）。CフェイスRCCルート（田村、広瀬）。Dフェイスベルニナルルート（西前、竹岡）。
- 7月29日 源次郎二峰平蔵谷側（田村、神崎）。
- 7月30日 チンネ左方ルンゼ——右上C Dクラック（奥田、橋本、広瀬）。源次郎二峰長次郎谷側（西前、田村、神崎、笹木、穂積）。
- 7月31日 源次郎二峰長次郎谷側（西前、奥田、橋本）。
- 8月1日 チンネ中央チムニー——AバンドBクラック（西前、田村、神崎）。
- 8月2日 チンネ日嶺ルート——Eクラック（西前、田村、神崎）。

夏山合宿 縦走A 剣岳—針ノ木岳—白馬岳

期 間 7月28日—8月3日
メンバー 中村 菅生 宮崎 高島 木原 菅野

- 7月28日 剣沢——立山——五色ヶ原。
- 7月29日 針ノ木南沢出合。
- 7月30日 針ノ木——種池（高島、菅野、木原、大町へ下山）。
- 7月31日 種池——鹿島槍吊尾根。
- 8月1日 鹿島槍——唐松岳（宮崎、八方尾根より下山）。
- 8月2日 唐松——白馬岳。
- 8月3日 白馬大雪渓より下山。

夏山合宿 縦走B 剣岳—槍ヶ岳

期 間 8月1日—8日
メンバー 奥田 橋本 垣内 笹木 広瀬

- 8月1日 剣沢——立山——五色ヶ原。
- 8月2日 五色ヶ原——スゴ（間山）。
- 8月4日 スゴ——薬師岳——太郎平。
- 8月5日 薬師沢を下り黒部川を渡渉して雲の平へ。
- 8月6日 雲の平——三俣蓮華小屋——硫黄乗越。

- 8月7日 槍ヶ岳を経て、上高地（垣内）、蒲田（笹木、広瀬）、南岳（奥田、橋本）。
8月8日 蒲田に下山。

夏山合宿 縦走C 剣岳—槍ヶ岳

期 間 8月3日—10日

メンバー 田村 竹岡 神崎

- 8月3日 剣沢—立山—五色ヶ原。
8月4日 五色ヶ原—スゴ小屋。
8月5日 スゴ—薬師岳—太郎平。
8月6日 太郎平—中の俣乗越。
8月7日 中の俣乗越—三俣蓮華と双六の間。
8月8日 三俣蓮華と双六の間—槍ヶ岳肩—肩小屋の西側にテントを張る。台風来る。
8月10日 下山。

穂高岳屏風岩第一ルンゼ

期 間 10月2日—4日

メンバー 西前 奥田

- 10月2日 台風後の混乱した交通機関に悩まされながら、夕方上高地着、横尾岩小屋泊り。
10月3日 屏風岩第一ルンゼを登って深夜帰幕した。
10月4日 下山。

前穂東壁岩登り

期 間 10月9日—13日

メンバー 西前 高橋 橋本 菅生 他2名

前穂高東壁（高橋、橋本、菅生）ルートを通り、ボロボロの岩を登って、第二テラス左上方でビバーク、あやうく遭難さわぎを起こすところであった。

（別項、田村記「初雪」参照。）

剣岳山行

期 間 11月9日—14日

メンバー 西前 高橋

11月11日 平蔵コル避難小屋。荷が重く疲労が目立つ。目算違い。

11月12日 チンネ左稜線下半を登り、ビバーク、雪のついた微妙な岩場は極度の忍耐とファイトを強いた。

11月13日 ニードル側へエスケイプした。

11月14日 立山の荷上げ隊に合流。

弥陀ヶ原荷上げ 立山・剣岳

期 間 11月10日—15日

メンバー L菅生 竹岡 尼元 穂積 広瀬 高島 木原 鈴木

11月11,12日 弥陀ヶ原から天狗平小屋へ春山用の食糧、燃料を荷上げ。

11月13日 立山に登った。

11月14日 分散して剣岳—早月尾根を下降（菅生）。大日縦走（西前、広瀬）。他は弥陀ヶ原より下山。

白馬岳偵察

期 間 11月11日—13日

メンバー 奥田 宮崎 笹木

11月11日 信濃森上より梅地

11月12日 白馬岳を往復して冬山の偵察を行った。

鹿島槍ヶ岳ダイレクト尾根（事故報告）

期 間 11月20日—30日

メンバー 高橋 田村 垣内

1. 行動記録

11月20日 大阪発。

11月21日 雨。 早朝大町着。大冷沢西俣出合に幕営。

11月22日 みぞれまじりの風雪。 ダイレクト尾根偵察。

11月23日 快晴。 3:30 出発。ダイレクト尾根取付9:00。第一岩峰基部(10:00)でザイルをつけ、高橋・田村40m登り、ラストの垣内が数m登った時、かなり大きな落石(径20cm程)が飛来し、高橋・田村はこれを認めてやりすごし、警戒の声を発した。(垣内はこれに気付かなかった。)と、田村の手元にいきなりショックがかかり、ザイルが1m程出た。田村は驚いて垣内を呼んだが返答がなく、上にいた高橋に急いで降りて貰った。(上からは垣内の処は見えない。)高橋は、アンザイレンしたもとの場所に垣内が頭部を血だらけにして失神したままぶら下がっているのを発見、マフラーや手拭で応急の手当てをした。(傷は落石による後頭部骨折と、墜落して岩にたたきつけられた際の右肩甲骨骨折、顔面擦過傷、前歯二本折損などであった。)その間に田村もおりてきて垣内も意識を回復したので、とりあえず取付点まで降ろすことにして、田村がザイルで垣内を確保し、高橋が背負うようにして草付きの急斜面を約500m下降。大冷沢北俣本谷へ13:30着。ここから田村は救援を求めに走り、高橋は垣内を背負ったが、ガラガラの沢筋に苦しみ、時折垣内の肩を支えるだけにして歩いて貰ったりした。18:00頃、中岩沢出合で、西俣出合から駆けつけて下さった岐阜登高会(3名)、名古屋YMCAやまびこ(3名)、東京鉢山山岳会(1名)の方々と出会い、急造の担架で垣内を運んだ。西俣出合24:00。一方田村は、さらに下流の大谷原から青木発電所を通じて大町警察署へ、医師と人夫の派遣を依頼する旨電話していた(大町警察署では遭難のニュースを天王寺警察と垣内の自宅に近い神戸市若松町派出所に電話して下さった)。大町警察のジープで医師が大谷原へ来、21時頃迄待った後一応引返した。

11月24日 午前3時頃、負傷者の一行と下から人夫の人達が出会い、7:00 大谷原着。ジープで大町へ急送され、大町市民病院に収容(8:00)。

Ⅱ. 垣内君の容態

出血多量の為、高橋・田村は大いに憂慮したが、幸いに収容が早く出来た為、病院に収容された時すぐ、生命に別条なしと発表された。

その後、脳膜炎などの併発症が心配されたが、4,5日してその心配も消え、彼は元気に話すようになった。

2週間を経た現在、歩行の練習を始め、帰阪するのも近いものと思われる。

Ⅲ. 遭難以後の処置

高橋・田村は、24日夕方垣内の父母を大町駅に迎え、25日警察その他へお礼の挨拶に廻った。25日夜、高橋は大町を出発、26日帰阪、学長以下に事故を報告し、お詫びした。田村は大町の高橋宅で休養。

11月26日夜、菅生・広瀬は現場に残置された荷を撤収するため離阪、大町へ向う。

11月26日、西前は神戸市の垣内宅を訪ね、前日帰神された父君に会う。

11月27日、田村・菅生・広瀬、大町より大冷沢西俣出合まで入山。

11月28日、田村・菅生・広瀬、撤収。

11月29日、田村・菅生・広瀬、垣内を見舞い、大町を去る。

11月30日、田村、学長以下に報告。

12月1日、高橋・田村、神戸に垣内の父君にお会いする。

費用：救援に要した費用はすべて垣内氏が負担する旨確認。

山岳部としては、救援を手伝って頂いた他のパーティー7名と大町警察へ礼状を出す。

Ⅳ. 反省

今度の事故原因は不可抗力とされる落石であるが、それでもやはり全然ミスがなかったとは云い難い。それは：

1) トップの高橋が落石を認め“Care”とどなったのを田村は聞いて、これをやりすごしながら同じく“Care”とどなったのであるが、垣内はそのどちらも耳にとめなかったのは、垣内のミスであり、彼の気構えに不十分な点があった。

2) ダイレクト尾根の登攀は技術的にさして困難なものではないが、「垣内にとっては」やや困難であり、過度に緊張するというスポーツマンとしての精神的欠陥をもった彼を同伴したというリーダーの判断の誤ち、等である。

富士山

期 間 11月21 — 23日

メンバー 奥田 橋本

11月21日 御殿場（5：25）— 吉田（9：00）— 5合目（17：00）

馬返し手前より雨となり、テント設営中は氷雨であった。

11月22日 テント（7：00）— 頂上（12：20）— 帰幕（15：00）

6合目より前夜の新雪があり膝の下までのラッセル。ルートは吉田大沢をとる。5合目のテントの周辺は雪がなく飲料水に不便を来たした。富士では雪か雨以外に水なし。例年より雪は少いとのこと。

11月23日 テント（7：00）— 浅間神社前（9：45）— バス乗車（10：10）

冬山合宿 白馬岳楡池

期 間 12月22日 — 1月3日

メンバー L奥田 橋本 田村 竹岡 広瀬 高嶋

- 12月22日 信濃森上より入山。
 12月23日 柵池にベースキャンプ設営。
 12月24日 荷上げを完了。
 12月25日 橋本、田村偵察に出たが強風に阻まれて乗鞍岳より退却した。
 12月26日 雪。 停滞。
 12月27日 奥田、田村天狗原に雪洞を掘り頂上をねらう。
 12月28日 風雪。 停滞。
 12月29日 アタックしたが、風雪はげしく退却。
 12月30日 休養。スキーに精を出す。
 12月31日 奥田、橋本アタックしたが、風雪に阻まれて乗鞍岳より退却。
 1月1日 高島ベース入り。元旦を祝う。
 1月2日 スキー。イグルー試作。
 1月3日 下山。

五竜岳

期 間 2月21日 — 25日
 メンバー 西前 高橋 奥田 鈴木

- 2月21日 奥田、鈴木遠見小屋着。
 2月22日 中遠見着（15：00）雪洞を掘る。鈴木遠見小屋へ引返す。
 2月23日 高橋、西前雪洞着（7：00）五竜東面を偵察。
 2月24日 高橋、西前、奥田出発（2：30）。G5に取り付くも雪の状態悪く引返す（14：00）。帰洞（22：00）。
 2月25日 撤収下山。

春山合宿 立山・剣岳

期 間 3月21日 — 4月8日
 メンバー L西前 奥田 橋本 田村 竹岡 広瀬

- 3月21日 千寿ヶ原よりケーブルで美女平。荷物の一部を雪上車で送り、上の小平上部にキャンプ。
 3月22日 天狗平へボッカ、下りは爽快なスキー。田村が一日おくれてキャンプ入り。
 3月23日 全員天狗平へ広い雪原をのんびりと歩く。

- 3月24日 風雪。 停滞。
3月25日 雷鳥荘へボッカ。
3月26日 風雪。 停滞。カマボコテントが壊れそうなので近くに雪洞を堀ってテント撤収。
3月27日 風雪。 停滞。(体をこわした竹岡、広瀬下山)。
3月28日 別山乗越へボッカ、雷鳥沢のスキーは快適。雷鳥荘付近に雪洞堀り入る。西前の友人2氏(関西登高会)到着。
3月29日 立山登頂。ガスで小雨バラつく。
3月30日 雨のため停滞し、スキー。
3月31日 雨激しく雪洞崩れ始める。夜明けとともに雷鳥荘に避難。関西登高会2氏下山。
4月1日 雪。 停滞。雪洞を堀りなおして再び入る。
4月2日 剣岳登頂、乗越小屋泊り。(橋本身体をこわして天狗平のスキー合宿隊に合流)。
4月3日 源次郎尾根一峰直下で天候悪化のため退却。
4月4日 天狗平のスキー合宿隊に合流。

スキー合宿 立山

期 間 3月31日—4月8日
メンバー L坂田 穂積 木原 鈴木

- 3月31日 美女平より追分小屋。
4月1日 天狗平にベースキャンプ。
4月2日 弥陀ヶ原へ逆ボッカ。
4月3日 雷鳥荘付近にてスキー。
4月4日 天狗平でスキー。(西前、奥田、田村合流)。
4月5日 雷鳥荘へ荷物取りに行く。(西前、坂田下山)。
4月6日 スキー。(木原下山)。
4月7日 天狗平でスキー。
4月8日 撤収して下山。10貫近い荷を背負って、ゆっくり、ゆっくりすべる。ホテルから、雪上車に荷をまかせて、スキーで美女平に下る。

1960 年度

北岳・鳳凰三山

期 間 4月29日—5月4日

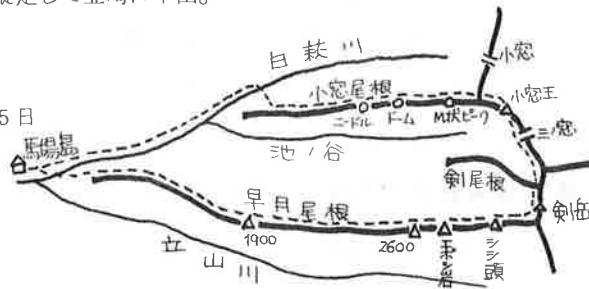
メンバー 橋本 鈴木

- 4月29日 曇。 甲府より夜叉神トンネルを経て吊尾根池山御池小屋手前にキャンプ。
 4月30日 曇後雪。 八本歯手前で雪となりキャンプ。
 5月1日 晴。 北岳に登頂して、池山御池まで下る。
 5月2日 曇。夕立。 荒川小屋へ下り休養。
 5月3日 快晴。 夜叉神峠より南御室小屋。
 5月4日 曇。 鳳凰三山を縦走して葦崎に下山。

剣岳 小窓尾根—早月尾根

期 間 4月29日—5月5日

メンバー 奥田 宮崎



- 4月29日 富山地鉄ストのためタクシーにて稲村部落手前迄。13:10馬場島着。2回渡渉して17:10雷岩小屋着。白萩川は明るい谷であるが、タカノスワリを過ぎると崩壊した両岸に落石の傷跡も生々しく様相は一変する。岩小屋を見つけた時にはホッとした。巨大な岩が前方に高く張り出した解放感のある広い岩小屋。10人は収容出来よう。
 4月30日 5:45発。岩小屋の裏に落ちているガリーにアイゼンをきしませ2ピッチで登り切り小窓尾根に立つ(7:00)。密生した森林帯を抜けて1700地点に出る(8:10)。今冬遭難した立命館がテントを張っていた。ゆるい雪稜をバテバテ12:20にニードルを正面にみる広い尾根に着く。日は未だ高かったが、腐った雪と疲れた身体を考えて、行手に立ちほだかる雪の垂壁は明日の課題として残す。周囲に展開する雄大な光景を楽しみつつ早くも夕食の準備にのんびりと取りかかる。夜時々小雨。
 5月1日 雲の去来激しく出発を見合わせていたが好天のきざし見え6:00出発。木登り、垂直な雪壁。時折コンティニアスを混ぜたが殆んどスタカットで行く。空身なら何でもない所で苦勞する。10時頃昼食を取り、せまい岩稜を渡り10m程の岩壁を登り切るとニードルの上だった。六甲でも容易と思われる程の技術。ドームは岩壁など見えず全くの木登りに過ぎぬ。15:00マッチ箱手前のプラトールに着き設営。

5月2日 風とガス。 昼頃 20 cm積雪。

5月3日 8:00発。4ピッチで60mの岩壁を登り切る(12:00)。ザックのつかえるクラック1箇所と微妙なトラバース1箇所以外、平素六甲でトレーニングに励んでいるものにとって困難はなかった。続くはハイ松のヤセ尾根。2m程の岩は打ち残されたハーケンと小さいホールドにアイゼンのツァッケで立ち左へ廻り込んで急なプッシュ帯に入る。これを越し、極端な岩のナイフエッジを馬乗りで突破しラストを確保。それから、4ピッチで小窓尾根の核心部を切り抜けるとホッと一安心する。小窓王のトラバースは鵬翔のフィックスを借用した。疲れた身体に有難かった。夜がせまっていたが明日の天候を心配して、できる限り前進しようとする。三の窓を後にする。池の谷ガリーでは日はとっぷりと暮れ、ランプの明りを頼りに午後9時前ようやく長次郎のコル着。

5月4日 8:45発。9:10頂上着。「抜きつ抜かれつ」した岡山山岳会の人達と再会。又、丁度居合わせた積水化学の友達としばし談笑。9:25頂上を去る。カニのハサミ、シシ頭も一応アンザイレンするもさほど悪くない。昼過ぎよりピッチを上げることに決め、かけ降りる。17:00馬場島着。小屋の立山川100m上流に岩小屋を見つけ泊り場とする。折から雨がパツキ始め、ぐっしょり濡れたシュラフは心地悪いが、心は満ち足りていた。

穂高岳滝谷第四尾根

期 間 5月31日—6月6日
メンバー 田村 他2名

6月1日 上高地から横尾。
6月2日 横尾から北穂小屋。雨にうたれびしょ濡れになった。
6月3日 他パーティの遭難救援。
6月4日 停滞。
6月5日 田村他1名、第四尾根登攀。
6月6日 下山。

募集登山 穂高岳

期 間 7月17日—20日
ガイド 橋本 坂田

参加者約10名。涸沢より北穂高、奥穂高に登山。

夏山新人縦走合宿 双六岳 — 剣岳

期 間 7月16日 — 22日

メンバー CL西前 SL宮崎 西林 福井 百瀬 林 錦織

- 7月16日 新穂高 — 大沼の雪渓。道を間違え、双六まで行けなかった。熊に出会う。
- 7月17日 大沼雪渓 — 双六池。新人はほとんどバテてしまった。
- 7月18日 双六池 — 三俣蓮華岳 — 黒部五郎岳 — 黒部乗越。
- 7月19日 黒部乗越 — 上ノ岳 — 太郎平 — 薬師峠。なだらかな坂で調子がでてる。
- 7月20日 薬師峠 — 薬師岳 — スゴ乗越。スゴには小さな雪のかたまりがあっただけ。
- 7月21日 スゴ乗越 — 五色ヶ原 — 浄土山 — 一ノ越。今日は快調にとびした。
- 7月22日 一ノ越 — 立山 — 剣沢真砂平。雄山を過ぎたところで、出迎えに来てくれた竹岡に会う。真砂平の定着合宿に合流。

夏山合宿 剣岳真砂平定着

期 間 7月20日 — 31日

メンバー L奥田 笹木 竹岡 田村（22日より新人縦走隊合流）

- 7月20日 弥陀ヶ原 — 雷鳥荘。各人12、3貫かつぎ、残りは預けて出発。
- 7月21日 雷鳥荘 — 真砂平。
- 7月22日 源治郎尾根二峰平蔵谷側ABフェイス（奥田、笹木）、懸垂場コルより長次郎谷を下る。竹岡は縦走隊出迎え。新人縦走隊13時頃キャンプ入り。
- 7月23日 休養。午後、薪集め。平蔵谷へ遊びに行く。
- 7月24日 源治郎尾根一峰平蔵谷側左ルンゼより上半弓形クラック（西前、奥田）へ退却。（8月に入って、西前は関西登高会会員故陶守氏と完登した。）笹木、竹岡は上記パーティの観察。宮崎以下は荷上げに下る。
- 7月25日 笹木、竹岡は昨日上げ忘れた野菜の荷上げ。他は西林を除いて雪上訓練。
- 7月26日 源治郎尾根縦走 — 別山尾根 — 帰幕（奥田、宮崎、錦織、百瀬、福井）。
- 7月27日 長次郎谷 — 池の谷乗越 — 長次郎谷下降、アイゼンの練習（奥田、笹木、竹岡、福井、錦織）。百瀬は広瀬の出迎え、広瀬キャンプ入り。林、西林下山。
- 7月28日 ハッ峰下半縦走（奥田、百瀬）。ハッ峰六峰Aフェイス（笹木、広瀬）。小窓コル（西前、宮崎、錦織、福井。 — 宮崎を除き一泊）。
- 7月29日 休養。宮崎下山。
- 7月30日 ハッ峰上半縦走 — チンネ日嶺ルート — Eクラック（笹木、広瀬、百瀬）。源

治郎二峰長次郎谷側（西前、福井、錦織）。奥田は田村を出迎え、田村キャンプ入り。

7月31日 解散日。池の谷へ荷上げ（田村、奥田）、仙人池を経て阿曾原へ（広瀬、百瀬）、弥陀ケ原へ下山（笹木、福井、錦織）。西前は関西登高会の合宿に参加。

池ノ谷・東大谷

期 間 8月1日—9日

メンバー 奥田 田村

8月1日 真砂平—二俣—三ノ窓。

8月2日 R10より剣尾根主稜を登攀して三ノ窓に帰着。

8月3日 濃いガス。 休養。

8月4日 池ノ谷二俣より右俣に入り、壁状ルンゼよりザッテル、奥壁下部をトラバースしてバットレス沢を登り、長次郎の頭へ出て帰幕。

8月5日 小窓尾根偵察のため小窓のコルへ向ったが、ガスのため偵察できず。

8月6日 剣本峰を越え、別山尾根を経て剣山荘上部でキャンプ。

8月7日 室堂乗越より立山川にて下り、東大谷出合にキャンプ。

8月8日 東大谷二俣を経て左俣に入り、駒草ルンゼ入口より戻る。

8月9日 立山川を下る。トラックに便乗して上市にて下山。

槍ヶ岳—立山温泉縦走

期 間 7月20日—26日

メンバー 橋本 坂田

7月20日 募集登山を横尾で解散し、槍沢を登って殺生小屋の横でキャンプ。

7月21日 殺生—槍ヶ岳—双六と三俣の間まで。

7月22日 双六、三俣の間—三俣蓮華岳—黒部五郎岳—上ノ岳手前。好天で快調のペース。

7月23日 上ノ岳手前—上ノ岳—太郎平—薬師岳—間山（スゴ）。雷鳴轟き夕立となる。

7月24日 間山—スゴ乗越—越中沢岳—五色ケ原。

7月25日 停滞。カメラの活躍舞台。

7月26日 五色ケ原—ザラ峠—立山温泉—千寿ケ原。杉田屋にて汗を流す。

朝日岳 — 白馬岳縦走

期 間 8月3日 — 7日
メンバー 広瀬 笹木 百瀬 他に女子山岳同好会員5名。

- 8月3日 平岩駅に全員集合、ヒワ平から蓮華温泉まで。
8月4日 蓮華温泉 — カモンカ平。五輪尾根の取付で雷雨に会い、森林帯を出た所でキャンプ。
8月5日 カモンカ平 — 朝日岳 — 雪倉岳。お花畑と芝生のジュータンのところよいテント場。
8月6日 雪倉岳 — 鉢ノ木岳 — 白馬岳キャンプ場。
8月7日 大雪溪を下り、猿倉からバスで大町へ。

穂高岳涸沢

期 間 10月15日 — 21日
メンバー L 笹木 広瀬 林 百瀬 福井 他に女子山岳同好会員3名。

- 10月15日 上高地 — 涸沢。涸沢についた時は午後7時頃になっていた。
10月16日 北穂南稜より北穂、涸沢岳をへてザイテングラードより帰幕（笹木、福井）。
10月17日 雨のため停滞。
10月18日 五六の科尔より前穂北尾根、吊尾根を通過して奥穂に立ち、ザイテングラードより帰幕（笹木、福井、林）。夜になって広瀬ら5名テント入り、にぎやかになった。
10月19日 北穂東稜（笹木、広瀬、百瀬）、南稜（福井、林、他女子3名）。北穂頂上で合流、奥穂に登り帰幕。広瀬のみ涸沢科尔より帰幕。
10月20日 前穂北尾根（百瀬、福井）。奥穂 — 前穂往復。前穂にて全員合流。広瀬三四の科尔より前穂へ。笹木、福井吊尾根手前より下る。広瀬他5名奥穂を経て帰る。
10月21日 B Cを撤収。百瀬、福井は西穂を経て上高地へ。他は横尾を経て下山。

槍・穂高山行

期 間 10月21日 — 25日
メンバー 穂積 高島 鈴木 他1名。

- 10月21日 上高地泊り。

- 10月22日 岳沢から天狗のコル、西穂、西穂山荘を経て上高地。
10月23日 上高地—横尾。
10月24日 槍沢をへて槍ヶ岳に登り、帰りは中岳と南岳のコルから槍沢小屋に出て帰暮。
10月25日 涸沢へ遊びに行き、後、上高地へ下山。

剣岳 — 仙人池

期 間 11月1日—5日

メンバー 橋本 他1名。

- 11月1日 阿曾原から仙人の湯手前まで。
11月2日 仙人湯—仙人池—池の平—二俣。小窓の雪渓は雪のブロックがいくつか残っているだけで、数回渡渉をよぎなくされた。
11月3日 午前中雨。 午後剣沢を登って平蔵出合まで見に行く。帰途熊に出合い驚く。
11月4日 二俣—仙人尾根新道を経て仙人池。はじめて晴れたのでカメラに腕をふるう。
11月5日 昨夜来雪となり、仙人池付近も約10cm積った。雪の中を阿曾原へ下山。

11月合宿 穂高岳

期 間 11月21日—27日

メンバー L奥田 西前 橋本 田村 笹木 宮崎 百瀬 林 他に女子山岳同好会員2名。

- 11月21日 沢渡—徳沢。中の湯と上高地の間はトラックに便乗。
11月22日 徳沢—横尾。横尾に荷を置き涸沢へ。田村、宮崎、林、他2名は横尾に下りてBC設営。奥田、橋本、笹木、百瀬は北穂南稜途中まで荷上げしてデポする。正午頃より雪となる。西前、沢渡から一日でとばして来てキャンプ入り。
11月23日 北穂へ（西前、奥田、笹木、宮崎、百瀬）。宮崎、百瀬のみ8時頃帰暮、他は北穂泊り。又白池へ（田村、橋本、他2名）。
11月24日 北穂滝谷第四尾根（西前、奥田、笹木）：不安定な積雪に悩まされ、ツルム頂上にてビバーク。前穂高北尾根（田村、橋本、サポート宮崎、百瀬）：これもまたひざを没する不安定な軟雪に悩まされ、三峰チムニーの上方にてビバーク。
11月25日 北穂隊—豪雨の中をようやく第四尾根を完登して北穂小屋へ、西前のみベースキャンプに戻る。前穂北尾根隊—豪雨のため再びビバーク。翌26日、三四のコルから涸沢に下りた。
11月26日 涸沢にて西前、百瀬、林の出迎えを受け北穂隊、前穂隊合流して、横尾に下る。

みぞれの中をBCを撤収して上高地の木村氏宅泊り。
11月27日 上高地—沢渡。坂巻より沢渡までトラックに便乗。

冬山合宿 穂高岳

期 間 12月22日—1月3日
メンバー L奥田 笹木 百瀬 福井

12月22日 湯川渡—上高地。小梨平にキャンプ。
12月23日 横尾のポッカ中継小屋上方100mの所にBC設営。
12月24日 奥穂へ向う(奥田、笹木、百瀬)。涸沢出合にてスキーをつける。百瀬スキー故障のため戻る。涸沢小屋よりワカン。11時ザイテンの尾根上に立つも、今にも降りそうな空模様。帰途の雪崩が心配になり退却。
12月25日 曇後雪。 停滞。
12月26日 徳沢尾根から大滝山へ向う。2,500mの地点から引き返す。腰を没するラッセル。
12月27日 冬型気圧配置となり雪。岩小屋の対岸でスキー練習。
12月28日 雪。 停滞。こんど晴れたら北尾根へ行こう。
12月29日 雪。 涸沢の積雪状態を偵察に行く。風雪激しく涸沢を少し登って引返す。後スキー。
12月30日 雪。 停滞。ベースキャンプ付近も1mくらい積った。
12月31日 雪。 停滞。テントの周囲に防風壁をつける。
1月1日 朝より快晴。しかしもう遅い。スキーに最後の仕上げをかける。
1月2日 BCを撤収して中の湯泊り。
1月3日 沢渡からバスに乗る。

春山合宿 横尾尾根—槍ヶ岳

メンバー L奥田 宮崎

卒業山行 利尻岳

メンバー 西前 田村

東稜より利尻岳 西前 田村
仙法師稜、西稜 途中まで遊びに行く。
北稜より利尻岳 西前

1961 年度

夏山新人合宿 南アルプス縦走

期 間 7月15日—7月20日

メンバー 奥田(L) 吉永 伊藤 川田 斉藤 保野

7月15日 芦安—夜叉神峠—鷲住山—荒川小屋テント地

7月16日 —(吊尾根)—御池小屋テント地

7月17日 —北岳小屋テント地

7月18日 北岳(往復)—間ノ岳—農鳥小屋付近

7月19日 —農鳥岳—大門沢—奈良田(……甲府)

この後、宇奈月…阿曾原より、池の平を経て定着合宿に合流。

夏山合宿 剣岳二股 (詳細不明)

期 間 7月23日—30日

メンバー C L 広瀬 奥田 穂積 高島 鈴木 竹村 百瀬 福井 吉永 伊藤 河北 川田 斉藤 保野 橋本OB

合宿終了の後、引続いて後立山縦走(……樺平—祖母谷—清水岳—白馬岳。L高島、吉永、伊藤、川田)等が行われた。

立山雷鳥沢スキー行

期 間 11月22日—26日

メンバー 百瀬 福井 斉藤 他一名

11月22日 弥陀ヶ原—天狗小屋

11月23日 —房治荘—雷鳥沢テント地

11月24日 ワカン・スキー練習。

11月25日 —天狗小屋

11月26日 下山。

焼山偵察行

期 間 12月2日 — 5日
メンバー 高島 保野 他一名

12月2日 (梶屋敷……) 笹倉
12月3日 焼山偵察。
12月4日 屋闕山
12月5日 焼山偵察(スキー)。下山。

冬山合宿 焼山(詳細不明)

メンバー C L 広瀬 穂積 鈴木 林 竹村 福井 吉永 伊藤 河北 川田 保野

後半より、一部メンバーを除き、妙高は赤倉に移ってのスキー合宿となる。

1962年度

5月山行 後立山縦走(五竜—鹿島槍)

期 間 4月29日 — 5月5日
メンバー C L 穂積 S L 鈴木 斉藤

4月29日 雪。 下川氏宅発(11:50) — 遠見小屋(17:30)
4月30日 快晴。 穂積、腹痛のため下山。付き添う。遠見小屋(7:10) — 下川氏宅発(10:30) — 遠見小屋(14:30)
5月1日 曇、夜半より吹雪。 小屋発(6:30) — 大遠見(11:00) — 五竜小屋(15:00)
5月2日 快晴。 小屋発(9:30) — 五竜岳ピーク(11:00) — キレット小屋(17:00)
5月3日 晴、一面ガス。 小屋発(8:30) — 鹿島槍北峰(13:00) — 南峰(14:20) — 冷池小屋(15:55)
5月4日 雨。 同発(14:00) — 大冷沢出合(15:35) ピバーク
5月5日 同所より鹿島部落をへて下山。

大峰行

期 間 5月3日—6日

メンバー 川田 保野

- 5月3日 洞川—山上ヶ辻—山上ヶ岳
5月4日 —大普賢岳—行者還岳—弥山
5月5日 停滞。
5月6日 —八経ヶ岳—狼平—川合

残雪の穂高岳

期 間 6月2日—5日

メンバー 広瀬 百瀬 伊藤 川上 絹川 他部外者1名

- 6月2日 “ちくま”で松本着、いつものこと乍ら混雑するバスで上高地へ。天気は悪くなりそうだ。河童橋のベンチで昼食をとって岳沢を登る。西穂よりの雪渓でグリセード練習中のパーティが点々と見える。岳沢ヒュッテの近くのガラ場をならして、テント設営。河原の様なところで、すこぶる居住性が悪い。明日は雨の様だ。夜半、風雨に眠りを妨げられる。
- 6月3日 雨。 あんのじょう、朝から雨。風は弱い。昼食をくって、雨の中を、ジャンダルム辺につき上げている雪渓を登る。雪がくさっていてグリセードも面白くない。時折、ガスの切れ目から明神の稜線が見える。意外に高く見えるものだ。上高地の電灯がチラチラ見える頃、雲行きがよくなった様だ。
- 6月4日 雨後曇。 雨の中を新道を登る。階段の様な急登が続く。前穂が近づくにつれ、風が強まる。視界200m位。前穂の頂上についた時には、急ピッチの登りがたたって皆大部疲れている。ガスが渦巻く吊尾根を奥穂に向かうが、風と疲れで徐行。なんでもない様な雪渓の横断もいささかびびる。そんな時に限ってガスが切れ、岳沢はるか下までずっと切れ落ちているのがシクダ。奥穂よりの岩蔭でテントをかぶって、ジュースを沸かし一息入れる。身体は雨でびしょびしょだ。稜線では雨具も殆んど役に立たない。奥穂についた時は風雨もおさまり、笠や乗鞍が雲の上に浮んでいる。明日こそ晴れるだろうと期待しながら、冬期小屋に入る。
- 6月5日 快晴。 太陽の光がまぶしい。服も乾かしたし、エネルギーも補給した。写真屋はあちこちと忙しい。乾いた岩尾根を辿るのは楽しい。一年も平気で歩く。頼もしい。あれが双六、これが常念とそれぞれ勝手にガイド振りを発揮。北穂まで賑やかな道中だ。計画では槍までだったが、ベトリ雪のついたキレットを前に鳩首会談。雪はくさっているし、アイゼンワークも充分でない。なんだかんだと云うが、全員びびった様だ。あっけなくキレット通過

をあきらめ、北穂沢を降りることにする。全員グリセードで吹っとばす。一年もスワットばかり落ちてくる。湖沢につく頃には、すっかり雪になれ、こんなことならキレットを通過すればよかった等と負け惜しみを云う者も出る始末。下ることにかけては人後に落ちない我々のこと、上高地まで一気にかけ下りる。夕焼の前穂が美しかった。〔広瀬記〕

夏山合宿 剣岳二股定着

期 間 7月21日—8月3日

メンバー L林 笹木 高島 穂積 福井 吉永 斉藤 伊藤 保野 川田 坂東 川上

穂積、林、吉永、坂東、川上は阿曾原より、福井、斉藤は弥陀ヶ原より入山。高島、笹木は一般募集登山引卒後合宿に参加。

7月23日 二股に集結。

7月24日 BC発(5:15) — 五六のCOL(12:00) — 八峰の頭(15:30)
— 長次郎の頭(15:00) — BC(18:00)

長次郎の登りで川上ダウン。笹木がつきそいBCに戻る。熊の岩左側で雪上訓練。昼食後、八ッ峰上半。林、坂東、福井は長次郎の頭より下る。

7月25日 源治郎の予定だが、バテた者が多く、休養とする。トレーニング不足を痛感する。笹木、高島、阿曾原より下山。

7月26日 BC(8:00) — 三の窓(10:00) — 本峰(13:00) — 平蔵のCOL(13:30) — BC(16:20)

全員で三の窓から本峰へ。斉藤は一人で八ッ峰下半。保野、阿曾原より、伊藤、御前より入山。夜、キャンプファイヤー。皆、縦走に出たがる。

7月27日 ビバーク山行の予定も台風接近で取り止め。小雨バラバラ。終日ブラブラ。

7月28日 穂積、福井、坂東の立山隊BC発(一槍。詳細不明)。川上、弥陀ヶ原より下山。吉永、斉藤、伊藤、保野、川田の後立山隊BC発。林はそのまま残留、本峰往復。

(以下は林のみ)

7月29日 BCより別山、立山を経て、雷鳥沢に下山通知を出しに行く。

7月30,31日 風邪と腹下しでドン。

8月1日 BC(6:30) — 三ノ窓(10:30) — 池ノ谷二股(13:15)

ビバークする予定で、荷物をサブザックにつめ、池の谷を覗きに行く。左俣の雪渓をグリセードで二股に着く。昼めしを喰って出かけようとするやと雲行きがおかしくなり、ツェルトにもぐりこんだたたん、機関銃の様な雨と雷。1時間半程で止み、とたんに青空。二股より雪渓を下り、ガラ場についた所で、幻の滝に行くか、右俣をつめて本峰に出るか迷うが、結局右俣をつめることに決め、二股に戻る。

8月2日 池の谷二股(9:00) — 壁状ルンゼ出合(9:45) — 早月尾根稜線(13:00) — 平蔵のコル(16:00) — BC(17:30)

けたたましい小鳥の鳴き声で目がさめる。池ノ谷右俣は雪が硬く、ピッケルでカッティングしながら登る。壁状ルンゼと右俣の出合で雪渓が切れ、早月尾根側の壁をトラバースするも、ザイルなしの単独登攀では無謀なので、早月から出ているインゼルに逃げる。上部はモロい岩ガスってきて、辺りが全くわからず、ただ早月尾根の稜線に向かっていることだけわかる。30分程で雪渓に出、尚も、1時間程登ると稜線に出た。ガスで位置がわからぬが多分、エボシ岩の上部に出たのだろう。平蔵をグリでとばす。

8月3日 美陀ガ原より下山。

夏山合宿 後立山縦走(唐松—種池)

期 間 7月28日—8月3日

メンバー 吉永 伊藤 川田 斉藤 保野

7月28日 二股—池の平—仙人岩小屋

7月29日 —阿曾原=樺平……名剣

7月30日 —祖母谷—餓鬼ノ田圃

7月31日 —大黒銅山跡—唐松小屋テント地

8月1日 —牛首—大黒岳—白岳—五竜テント地

8月2日 —八峰キレット—唐島鎗ヶ岳—布引山—冷池テント地

8月3日 —爺ヶ岳—種池小屋—扇沢

新雪の裏ノ銀縦走

期 間 11月1日—5日

メンバー CL広瀬 SL吉永 伊藤 河北 荒川

11月1日 快晴。 早朝の大町は寒い。七倉行のバスは満員。七倉についてガソリンを買うのを忘れ、大町へ戻る。買って来て見たらガソリンカンに穴があいている。水筒を犠牲にする。我々だけが間抜け面をして11時まで七倉のバスストップにとり残された。おかげで途中から軌道に便乗、濁で昼食。とにかく稜線はずい分と高く見えた。あれをこれから登るのかと思うと、時間のロスが痛い。樺立尾根は垂直に登る。木登りもさせられた。地図では近いのだが、ハンゴダンを登る様な坂だから、遅々として進まない。おまけに水もない。暗くなる頃三角点につく。1ℓの水でジュースらしきものを作って、晩食とする。後は夜道をブラブラ烏帽

子小屋へ。

11月2日 快晴後曇。 三ツ岳が白く輝いている。朝日に映える山は美しい。水晶、五郎のあたりは雪が相当ある。水晶岳は面白そうな山だ。赤牛はマヌケ面と云う所。大天井が一きわそばえる。槍もでっかい。単調な尾根と、暑いので眠くなる。あまりのんびりしすぎて水晶小屋の手前で日が暮れ、今日もベッドのやっかいになる。小屋には3 party 程先についていた。

11月3日 地吹雪後風雨。 昨夜半より風が出て来た様だった。槍の方は朝焼けで不気味だ。予報では寒冷前線の接近を告げている。ともかく動ける中は動けと、三俣まで一気にとばす。ワリモの頭では地吹雪で息がつまる。登っているのか止まっているのか判らない。三俣小屋の辺までくると、今度は雨だ。小屋に入る頃はどしゃ降りとなる。火をおこして衣服を乾かし、昼食をとる。2時間ほど小降りになるのを待って、双六小屋へ。夏道のまき道をとる。雪はあるが、ルートは明瞭だ。まさに1ピッチで双六へ。この道は短い筈であったが、意外に長く感じられた。双六谷から吹きこむ突風でコルの近きを知る。小屋の前では、立っているのがやっとなと云う位のすごい風が吹きまくっていた。先着1 party。

11月4日 風雨。 寒冷前線通過。小屋を出ると風に吹きたおされ、下駄がどこかへとんでしまった。あちこちに散らばっている木ぎれを集めて、終日ストーブ談義に花が咲く。遭難でもある様な天気だ。

11月5日 風雨後小雪。 6月の計画について、今度も槍まで行く筈だったが、メンバーに故障が出来、食料の予備もそれ程ないので、槍をあきらめ、今日、蒲田まで強行する。他の party も槍をあきらめ、一緒に下山する。大沼乗越まで水平道路を快足でとばす。これ位の速さでいつも歩けばいいのに。天気が好転すれば笠往復も考えていたが、相変らず双六谷から吹き上げる風は強く、視界もきかない。温泉の誘惑に負けて、大沼沢をおりる。この道はひどい道だ。障害物レースの様な道ところげ乍ら山葵小屋につく。この頃になると雪がしんしんと降り、1尺位積っていた。蒲田へのパスもないので、新穂高に泊る。ゲルピンなので発電所の合宿所の一室に泊めてもらう。暖房のきいたきれいな室だった。夜空に星がキラキラ輝くのを見ると、槍を放棄したのが残念でならない。まだまだ実力のないのを痛感！ 〔広瀬記〕

御岳山行

期 間 11月21日—23日

メンバー 高島 保野

11月21日 黒沢口—飯盛下小屋

11月22日 — 剣ヶ峰— 人参湯— 湯川小屋

11月23日 — 中小屋— 羽入 (……木曾福島)

11月五竜偵察山行

期 間 11月21日—25日
メンバー C L林 S L福井 川田 斉藤 坂東

- 11月21日 源汲—鹿島部落(8:30—9:50)—芸大ヒュッテ(11:30)
《遠見天狗尾根偵察》ヒュッテ発(14:00)—梁場駅(15:40)—南神城(16:00)—下川又寛家(18:00)
- 11月22日 下川又寛家—遠見小屋
- 11月23日 遠見小屋—五竜小屋
- 11月24日 五竜小屋—(途中、遠見天狗尾根を青木湖が眺められる所まで下る)—遠見小屋
- 11月25日 同所下山。

厳冬の遠見五竜

期 間 12月27日—1月4日
メンバー C L広瀬 S L吉永 斉藤 河北 川田 坂東 絹川

- 12月27日 快晴。 神城—遠見小屋(16:45)
北陸廻りの汽車は遅い。神城の下川さんの家で昼食、西前さんに会う。高校の合宿で西遠見まで行ったとのこと。春の様な日差しの中を遠見小屋へ向う。雪は少なく暑い。小屋には河北が番人をしている。元気だ。天気図は明日も快晴を告げている。
- 12月28日 快晴。 遠見小屋—大遠見(15:15)
小遠見まで行けば後はのん気なもんだ。鹿島槍、白馬が圧巻だ。五竜もワリピンが黒々とその威容を誇っている。神城でも雪の少ないのを云っていたが、上も少ない。中遠見で、出発来元気のなかった絹川が不完全燃焼をおこして小屋へ下りる。代りに河北を上へあげる。大遠見には4 party 位テントをはっていた。西遠見の下にテントをはる。鹿島が真横に見える。カクネ里に影をおとしどっしりとかまえる様はさすがだ。ラッセルもなく西遠見まで楽に來られた。
- 12月29日 晴後雪。 西遠見—白岳(8:50)—五竜小屋(朝食、同発9:30)—五竜岳(10:15)—五竜小屋(11:25)—テント(16:15)
予定では今日白岳へテントをあげるのだが、天気がくずれる気配だ。3日も晴れが続いたのだから大きくくずれそうな気配だ。予定日数も少ないし、ファイトがあるとは云え、冬山には未熟だ。西遠見から五竜往復をやり、あと天気がよければ唐松まで行くことにする。皆すごい馬力だ。白岳まで一気に登る。白岳の登りはどう見ても変だ。雪がしまっているからいいもの

の、一雪あれば危険なルートだ。もっと稜よりにとるべきだろう。コルには2、3 party のテントを見かける。唐松までの稜線も、五竜も夏道が出ている。期待した程のすごみはない。やはり雪が少ない。五竜から見る鹿島は不かつうだ。下から見るのとえらい違いだ。剣がギザギザのスカイラインを見せて美しい。剣の前では、白馬も鹿島も影がうすい。唐松なんてさらさら行く気がしなくなった。皆不平たらたら云う。コルで2時間程昼寝をする。どうせテントへ帰ってもすることはない。てんで勝手にぶらぶら下りる。帰りの方が時間がかかった。夜半風雪強まる。

12月30日 風雪。 よく降る。吹けばとぶよな雪だ。風はまだ弱い。雪が多くなれば唐松への稜線も面白くなるだろう。食料のある限りここでねばろう。ポーカー、紙マージャンで時をすごす。

12月31日 風雪。 昨日の降雪1 m余、テントのまわりに壁が出来る。朝、絹川が単身テントへ上ってくる。ミカンが美味しい。1年はスキーをやりたそうな顔だ。早く下山する坂東と絹川、昼から神城へ下りる。斉藤、小屋までサポート。2人きりのテント。居心地はよい。紅白歌合戦を聞いている中に'62も暮れていく。今日の降雪1 m内外。

1月1日 風雪。 遠見小屋(14:05) — 小遠見(15:00) — テント(16:05)

ラジオは1~3日にかけて山岳地帯の大雪警報を告げている。すごい寒波だ。気温が下り始めた。遠見街道は人影少なし。雪かき、キジ打ち、炊事。夕方、小屋より斉藤、河北、川田上ってくる。なんだかあやしげな食物をもって来る。今日は一食だ。

1月2日 風雪。 よく降る。河北らは今日小屋へ下りねばならないので白岳まで行くとはりきっているが、出てすぐ戻ってくる。この雪ではよした方がよい。早々に小屋に帰る。

1月3日 風雪。 五日目の沈。今日こそはとテントを出るが、視界0。テントは雪面よりはるか下になった。いよいよ食料が乏しくなった。よく食べたものだ。6日位まで持つ筈であったが、なにもしないのによく食う。それによく寝る。天気図は思わせ振りの予報を示してくれる。

1月4日 風雪後曇。 テント発(13:00) — 遠見小屋(16:00 — 17:30) — 下川又寛家(20:00)

9時の天気図で小さな移動高が出来る。今晚はよくなりそうだ。そば3人分では一日も持たない。撤収とする。とにかく下山だけは早い。低温と雪で、ポール(ジュラルミン)があっけなく折れたのはショックだ。テトロンはいいがポールは悪い。これでは縦走に使えん。遠見街道も下山で混雑している。小遠見まで地吹雪になやまされるが、一気にかけ下りる。20人以上は追い越した。この風の中をよちよち歩けるかと快足に物を云わせる。小屋でパンと茶を食って、おぼろ月に鈍く光る遠見尾根を神城へ。シリセードもいいものだ。スキー場の上で、某 party がケガ人を出している。スキーヒュッテまでおろす。下でもやはり大雪だった。

1月5日 吉永、斉藤、川田、八方尾根にてスキー。

好天が続き五竜までは行けたが、後半機動性を欠いて唐松縦走がオジャカになった。予定したメンバーが集まらなかったのも、やむなく遠見尾根に変更したが、二年、一年にファイトのある連中が増えつつあるのだから、もっとバラエティにとんだ山行がなされてもよい。今の二年生位から冬山への本格的な意欲が出て来たようだ。ここ1~2年低迷していた部も、又活動期に向かいそうな気配がうれしい。天気図作成、装備研究、地形研究等基本的な勉強がまだまだ不足だ。

〔広瀬記〕

今年の冬山も又、多数の犠牲者を出して幕をとじた。しかもその大半が大学山岳部であったことは、我々外大山岳部のこれからの活動に多くの教訓と反省をもたらした。大学の山岳部は他の社会団体と異り、一部員についての活動期間は4年間である。それに加えて部員年齢は18~23才である。大学生にとって1年を通じての活動期間は100~150日の多きにわたり、体力もかなりあるだろう。普通の社会人の5~8年分の山行を4年間にやると云う推定もなりたつ。しかし忘れてならないのは、精神面における経験であろう。よく若気のいたりでと云うことを聞くが、大学山岳部にみられる遭難の原因はこの若さにあるのではなからうか。判断力の欠如、沈着冷静さにかけること、これだけでも遭難の原因としては最大の要素となりうる。自己の体力や技術に対する過信は恐ろしい結果となる。若さにものを云わせて少々の危険を冒して行動することは、それが無事に終われば貴重な体験となり、経験に大きなプラスとなろうが、不幸にして事故を起こした場合、最早とり返しがつかないのである。特に積雪期の山行については、慎重の上にも慎重にありたい。1週間や10日の沈澱が沈着に出来ない様な者は、冬山に行くべきでないだろう。積雪期の山行と云うものは、最早たんなる趣味やスポーツの域ではない。熟練した経験と、強い精神力のある限られた者のみの舞台ではなからうか。登山ブームによって猫もしゃくしも冬山へ出かける現今、これは決してハイカーや、神風登山者に対する警告ではない。我々も又、自己の能力や、部の力と云うことについて、改めて反省しなければならない。冬山への意欲に燃える部員に水をさす訳ではない。それよりも、部の活動が積雪期に於いても積極的に行われるために、考えてみたいのである。現在部員数は22名であるが、十人十色、実に様々の部員がいる。云わく、スキー派、ワンゲル派、ハイキング派、クライミング派、アルピニスト派等々。別に部員の資格に制限がある訳ではないからこれでいいだろう。しかし組織を動かしていくには一つの方針と云うものがある。各自勝手に動いていたのではまとまりと云うものがない。少なくとも我々の部では「四季を通じてのオールラウンドな山行」をその方針として来た。今後も変わらないだろう。又個性の尊重と云う意味から、個人山行も幅広く認められている。上級生による強制的な指導もない。大学山岳部ではすこぶるユニークな、しかしあたりまえの方針なのである。しかし困ったことに、この意味が判らない人達がいることである。自由と云うことをはき違えて、能力以上の山行を計画したり、参加するのである。例えば、部の精鋭的なメンバーによって冬山の計画が作られる。計画が出来てから参加する者が出て来る。意欲があるのはたのもしい。しかしその意欲に体力や技術がついていないのである。日頃の山行活動は余りやらない。トレーニングもや

らない。急に冬山へ行きたくなったと云うのである。出来る限り部員の多数参加は望ましい。しかしこれでは余りに無責任な態度ではないか。他人の力に頼りすぎる様な山行だけは止したいものだ。別に排他的でもなんでも無い。チームワークのうまくとれない者、トレーニング不足による能力の欠いた者等、山行以前の問題である。今年の冬山山行では、いままでのルーズな人員構成や計画を排して、目標は小さいが、調和のとれた山行が出来た。いかなる登山においても能力（体力や技術等）に応じた、そして調和のとれた計画こそ最も楽しく意義深いものではなからうか。スキーにしる、ハイキングにしる、本格的な縦走にしる、その内容にこそ意義を見出すべきである。又、より高度な計画を実行するためにも、各自の自主的なトレーニングが必要なのである。能力以上の計画によって事故を起しても、それは自分の責任において処理してもらいたい。積雪期に遭難すれば、救助隊は外部に求めねばならないのが現状である。自分達の足で登り、自分達の足で帰って来なければならぬことを銘記すべきである。

間もなく春山のシーズンに入る。志賀高原へツァーに行く者、北アルプスの雪山に挑む者、いろいろ計画がねられているが、目標にこだわらず、有意義な山行をしたいものだ！〔広瀬記〕

※

※

大学山岳部のある年の一年間の部活動の一般的特長、ないし、活動状況は、その部の伝統、部員数、経済状態、前々年度、前年度の部活動の実績、部員間のチーム・ワーク、部リーダーの手腕等々の諸条件、ないしは諸制約、即ち、部の置かれているその年の状況によって自ずと定まって行くものであり、突然にそれまでと変わったことが出来るものではなく、前年度の部活動に批判反省を加え、長所を存続させ、足らざるを補い、何らかのものをプラスして、次年度に引き渡していかなるべきものである。

その意味で部員20余名は山岳部創設以来の大世帯の年であった。それだけに色々と個性のある部員を含んでおり、全員一致で部の運営を図ることが非常に困難な年であった。従って、合宿型体と個人山行型体の兼ね合せの点で合宿型体の山行を最小必要限に止め、三、四回生部員を中心に各自の創意で自由な個人山行を行なえる余地を多くし、一年を通じて部員全員が何らかの型で山行を行なうと共に、前年度の冬山合宿の完全な失敗（トレーニング不足、装備不足の条件下で十余人の大部隊で出発し、登攀第一日目に半日の行程の所から下山し、温泉宿で全員寝ころんでいたという破天荒な山行）に鑑み、冬山合宿を何らかの形で成功させ、厳冬期の北アルプスの稜線歩きの出来る部員、特に一、二回生部員を増やすことにより部の一般的水準を上げることを最終の目標とした。

そのために、第一に、トレーニングの絶対量の不足を補正すること。常日頃、トレーニングを十分やっていたらいくつ大きな山行をやっても計画を完遂出来るものである。トレーニング不足は各部員の個人的理由によるトレーニング不参加によって起る場合もあるが、連絡の不徹底による場合も相当あるので、四月始めに夏山までのトレーニング計画表を作成し、トレーニングを行う場所・日時・責任者・性質を明記し連絡を徹底すると共に必ず、いずれの場合にも参加し、一、

二回生のトレーニング状況をチェックすることを部のリーダーの責任とした。第二に、部員間の連絡その他雑用、雑談のため、定例部会を週一度日を決めて持つこととした。第三に、部規約をそれまでのリーダーの自由裁量の余地を過分に残した簡単なものに手を加え、山岳部設立以来五年余の期間に部内で定着しつつある貫行を明文化した新しい規約を作り、部運営を新規約に近づけることにより従来ともすれば上級生部員のその場その場の気まぐれに傾きがちな部活動を排除し、一・二回生がその意欲さえあれば十分に活動出来るようにした。第四に、経済的な面で、部員の年間部費納入額 2,500 円×20 余名 = 5 万余×0.8 = 4 万円余 + 自治会よりの援助金 5,500 円、合計 5 万円余を機動性のある四・五人用冬期高所用テロンウインパー型冬テント購入に全額当てることにした。従って従来部費より支出していた連絡費、夏用装備の補充、補修は一切行わず前年度のものを使用することとなった。第五に、今さら「たゞきなおし」のきかない三・四回生リーダ会員は、各自の判断により部活動を行なうこととし、トレーニング参加、個人山行、合宿参加は各自の自由とし、何んら義務的なことは行なわなくてもよいこととすると共に、会計、装備、ガリ版刷その他雑多な部の雑用は一・二回生部員が行なうこととした。以上が部の運営の基本となった。

実際の活動面では、トレーニングは計画表の通り部のリーダーの責任で完全に遂行したこと、また遠出の山行については、五月、新人参加による比良山全山縦走、三・四回生部員を中心とした後立山山行、穂高山行、夏山一般募集登山、合宿は七・八月にかけて例年通り剣岳で行なわれたが、こゝ三年来の二回生が夏山定着合宿不参加という悪習から抜け出ることが出来ず、ロック・クライミングに見るべき成果がなかったが分散合宿では立山連峰・後立山連峰の縦走が行なわれた。九月の穂高周辺山行、東北個人山行、十一月後立冬山合宿偵察山行、御岳個人山行、十二月後立冬山合宿、三月穂高山行などが部に届出られたものであった。なお届出なしに裏銀散歩、山小屋でのバイト等々の山行が可成りあったと聞いている。全山行に共通して言えることは、一・二回生部員のサポート専門部員、テント・キーパー専門部員、買出専門部員等下級生を消耗部員と見做して切捨ることなく、また下級生部員を私用に使うようなことを一切しなかったことが大きな特色であった。大体日本の山ではそのような登山形式は不用である。また山行参加者はいつも全員で行動をしたことである。それは部の一般の実力が低下していたことにもよるが、部員の全てが大学入学後登山を始めた者ばかりであったことにもよる。

その他、山岳部は部長が居ないから誰れか部長をという部長問題、及び関西山岳連盟加入の件は他大学から個人的に話があったり、OBの方からも個人的に話があったが加入費の目算が立たなかった為見合わせたこと、及び共同装備の点でナイロンザイル、トランシーバー、新入生貸出用のアイゼン、ピッケル等主な個人装備の不足などまだ部の過渡期的色彩を持つ問題は次年度に持ち越した。

以上、六二年度の年間活動を概括すれば、冬天購入により翌年よりの冬山山行がやりやすくなったこと、部員間により高度な山行意欲が見られる様になったこと、及び一度低下した部の力が向上する時起りがちな一・二回生の遭難を起さなかったこと、部に不満を持った退部者を出さな

かったこと、が特長として上げられる。

〔林記〕

1963 年度

5 月合宿 表銀座縦走

期 間 4 月 27 日 — 5 月 2 日

メンバー C L 斉藤 S L 河北 吉永 保野 荒川

4 月 27 日 晴。 中房温泉 — 燕山荘
 4 月 28 日 晴。 — (喜作新道) — 赤岩岳
 4 月 29 日 晴。 — 西岳 — 水俣乗越
 4 月 30 日 曇。 — 東鎌尾根 — 殺生小屋 — 槍ヶ岳テント地
 5 月 1 日 雪後雨。 停滞。
 5 月 2 日 晴。 — 槍ヶ岳 (往復) — 槍沢 — 横尾 (泊)

夏山合宿 剣岳二股定着 (詳細不明)

期 間 7 月 23 日 — 31 日

メンバー C L 斉藤 伊藤 河北 坂東 村上 高瀬 百瀬 保野

本隊は弥陀ヶ原より入山。百瀬・保野は一般登山 (7 月 18 日 — 20 日、穂高岳。福井・川田を含む) 終了後、次のルートを探って 28 日に合流：槍ヶ岳 — 水晶 — 東沢下降 — 黒四 — 一の越 (福井下山) — B C。

夏山合宿 縦走 (詳細不明)

百瀬・村上 : 二股 — 薬師岳 — 槍ヶ岳 — 西穂高岳
 河北・斉藤 : 雷鳥 — 刈安峠 — 東沢出合 — 読売新道 — 赤牛岳 — 笠ヶ岳
 伊藤・保野 : 雷鳥 — 薬師岳

秋山合宿 笠ヶ岳

期 間 11 月 8 日 — 12 日

メンバー C L 斉藤 S L 坂東 保野 村上

- 11月8日 新穂高温泉 — 穴毛小屋 — 穴毛本谷 — 杓子平 — (新道) — 穴毛小屋
11月9日 停滞。村上は本谷散策。
11月10日 二ノ沢岩壁。夕、村上下山。
11月11日 穴毛小屋 — 四ノ沢左股 — 笠ヶ岳小屋
11月12日 — 二ノ沢 — 穴毛小屋 — 新穂高温泉

冬山合宿 焼山

期 間 12月25日 — 1月2日

メンバー 百瀬 保野 栃原 坂東 村上

- 12月25日 糸魚川駅にて百瀬合流。音坂・湯川内經由により笹倉。
12月26日 笹倉とさいの河原(ボッカ)
12月27日 停滞。スキー訓練。
12月28日 笹倉(栃原、残留) — 焼の鼻 — さいの河原
12月29日 B C 設営。村上下山。
12月30日 ルート工作。
12月31日 停滞。
1月1日 B C 二焼山山頂
1月2日 — 笹倉(泊)

1964年度

5月合宿 後立山縦走

期 間 5月1日 — 8日

メンバー C L 坂東 S L 村上 河北 伊藤 阪本

- 5月1日 信濃四ッ谷 — 大雪溪 — 白馬岳
5月2日 白馬 — 天狗
5月3日 天狗 — 不帰嶮、不帰二峰で村上遭難。連絡に細野へ下る。
5月4日 村上を唐松小屋に収容するも、小屋にて息をひきとる。
5月5日 八方尾根より下山。
(詳細は別項「村上泉君・坂東寛彦君追悼」参照)

早月尾根——剣岳——室堂（詳細不明）

期 間 5月
メンバー 斉藤 保野 栃原

追悼山行

期 間 6月20日—24日
メンバー A隊：CL坂東 SL百瀬 斉藤 河北 伊藤 正国 保野
B隊：阪本 高瀬

6月20日 A：八方尾根——唐松
B：宇奈月——祖母谷——大黒鉾山跡
6月21日 A：唐松——不帰二峰——唐松 伊藤下山。
B：大黒鉾山跡——唐松
6月22日 A：停滞。
B：唐松——不帰二峰——唐松
6月23日 八方尾根より下山、塩尻へ。

附記 事故に対する反省と自粛の意味から、外部に対しては外大山岳部の名を用いなかった。あくまで追悼の意を表わすもので、有志の集まりのパーティーであり、部外者も含んでいる。

7～8月 自粛の建前から合宿は行なわず個人山行となる。部員の個人山行を参考のため記すことにする。

坂東、阪本——柵池——白馬——不帰——唐松、五竜——鹿島槍——針ノ木
坂東、河北、伊藤、広瀬OB、穂積OB——有峰——太郎平——雲の平——高天ガ原——三俣蓮華——双六
斉藤——利尻富士
高瀬——白馬——不帰——五竜

9月 この時も個人山行の形をとる。上高地より槍ヶ岳（保野、伊藤、吉永OB）。

杓子岳双子尾根偵察

期 間 10月30日—11月3日

メンバー L坂東 百瀬 阪本

- 10月30日 信濃四ツ谷 — 猿倉 — 小日向コル
10月31日 小日向コル — 双子尾根 — 杓子岳 — 鑓ヶ岳 — 鑓温泉 — 小日向コル
11月1日 小日向コル、鑓温泉間往復。
11月2日 小日向コル — 大雪溪 — 白馬岳 — 大雪溪 — 小日向コル
11月3日 小日向コル — 猿倉 — 信濃四ツ谷 — 松本

杓子岳双子尾根偵察及びOB会結成準備登山

期 間 11月21日 — 23日

メンバー C L坂東 S L百瀬 河北 斉藤 高橋 (洵) OB 坂田OB 田村OB

- 11月21日 大町にてOBと合流。信濃四ツ谷 — 細野 — 猿倉 — 猿倉台地
11月22日 猿倉台地 — 小日向コル — 双子尾根 — 小日向コル — 猿倉台地
11月23日 猿倉台地 — 猿倉 — 四ツ谷 — 塩尻

杓子岳双子尾根冬期山行

期 間 12月28日 — 1月5日

メンバー C L坂東 S L百瀬 斉藤 阪本 原 中尾 日野 (部外者)

- 12月28日 信濃四ツ谷 — 猿倉山荘 — 小日向コル (BC)
12月29日 BC — 樺平 — BC、荷揚げ (斉藤、坂東)。BC — 猿倉 — BC、逆ボツカ (百瀬、阪本、原、中尾、日野)。BC完成。
12月30日 BC — 樺平 — 杓子岳 — 樺平 — BC
樺平にACを完成し、その日のうちに全員杓子岳頂上に立つ。ACに百瀬、斉藤、中尾残り、坂東、阪本、原、日野はBCに帰る。
12月31日 ACのパーティは停滞。BCのパーティは小日向山へスキーに行く。全員休養の日。夜、ACの中尾に代わり坂東、日野の2人ACに登り、中尾はBCに帰る。
1月1日 AC隊 : AC — 杓子岳 — 白馬岳 — 杓子岳 — AC
BC隊 : 停滞。
アタック隊、杓子岳及び白馬岳を狙うも風雪強く、白馬に向う途中より撤退。
1月2日 停滞。阪本、原、中尾、BC — AC。
1月3日 樺平 (AC撤収) — BC。午後、BC周辺でスキー訓練。

- 1月4日 停滞、BC周辺でスキー訓練。
1月5日 小日向コル（BC撤収）— 猿倉 — 信濃四ッ谷

五竜岳春山山行

期 間 3月28日 — 4月3日
メンバー L坂東 塩川 宮崎OB

- 3月28日 神城— 遠見小屋
3月29日 遠見小屋— 小遠見— 中遠見（BC）
3月30日 BC — 大遠見 — BC
3月31日 BC — 白岳 — 五竜岳 — 白岳 — BC
4月1日 BC — 西遠見 — BC
4月2日 中遠見（BC撤収）— 小遠見 — 遠見小屋
4月3日 遠見小屋 — 神城 — 塩尻

1965年度

5月合宿 白馬岳遠見尾根

期 間 4月29日 — 5月5日
メンバー 白馬隊 : 齊藤 百瀬 坂東 保野OB
遠見隊 : 阪本 塩川 高橋（俊） 宮崎OB

白馬隊 :

- 4月29日 信濃四ッ谷— 猿倉 — 白馬尻
4月30日 白馬尻 — 大雪溪 — 白馬岳 — 杓子岳 — 天狗小屋
5月1日-3日 全員雪盲のため停滞。
5月4日 天狗小屋 — 不帰岳 — 唐松小屋（遠見隊と合流）。

遠見隊 :

- 4月29日 神城— 遠見小屋
4月30日 遠見小屋 — 西遠見
5月1日 西遠見 — 五竜小屋 — 唐松小屋（設営）
5月2日 宮崎、阪本、不帰三峰まで往復、さらに、連絡のため八方尾根第二休憩所まで往復。

- 5月3日 宮崎、阪本、塩川、大黒岳まで往復。午後、テント潰され、唐松小屋へ避難。
5月4日 停滞、テントの発掘。白馬隊と合流。
5月5日 宮崎、齊藤、保野は八方尾根を、他の5名は白岳より遠見小屋を下る。

夏山合宿 剣岳二股 (詳細不明)

メンバー 坂東 阪本 井村 高橋(俊) 齊藤 原 田村OB 宮崎OB 吉永OB 保野OB 河北OB

夏山縦走

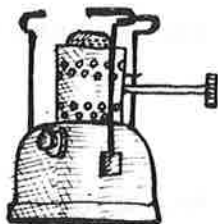
- A : 坂東 阪本 井村 高橋(俊)
B : 吉永 保野 齊藤 (下の廊下)

11月山行

- 遠見尾根—天狗—鑓温泉 : 阪本 宮崎OB
燕岳—常念岳 : 阪本 百瀬 広瀬OB 吉永OB
穂高岳(涸沢—奥徳—北徳—南稜) : 井村 高橋(俊)

冬山合宿 中央アルプス駒ヶ岳 (詳細不明)

メンバー 坂東 阪本 井村 保野OB



1966 年度

五月合宿 表銀座縦走

期 間 4月29日—5月3日

メンバー L阪本 井村 高橋(俊)

4月29日 晴。 有明発(8:05) — 中房温泉(9:00) — 第二ベンチ(11:20) — 合戦小屋(14:05) — 阪本、燕山荘先着(16:50) — 井村、高橋、山荘着(19:25)

有明よりハイヤーをチャーターするが、中房温泉寸前(徒歩で10分位)の所で下車させられる。車の調子がおかしいとか、折よくバスが来て便乗する。他に2、3のパーティが居た。雪は最初の登りから散見しており、雪の浅くない事が察知された。空はカラッと晴れていて気持ちよかったが、3人共昨夜一睡もしていないので相当に苦しかった。合戦小屋に着く頃は3人共バテバテで、燕山荘に全員が到着したのは、5時半頃であった。先着パーティのテントが2張りあり、他にも冬季小屋に登山客があった。テントの周囲に防風壁を作ったので風が吹いても安心できた。夜は7時頃より黒雲が流れ出し、月の色が不気味で、明日の天気を心配させた。

4月30日 ガス後晴一時吹雪。 燕山荘(8:40) — 大天井ヒュッテ(15:50)

外はガスっており、月はなかった。朝食をとりパッキングを始める頃にはガスも晴れだし、槍側が見えだしたが、信州側はガスっており、気温は高い位でアイゼンはつけないこととした。大天井直前までは、なかなかいいピッチであったが、トラバース道に入るとベースはガタ落ち、他のパーティ(TEECAC)は大天井を直登したが、我々は右を大きくまくトラバースを強いられた。結局直登した方が時間的にいって早かったように思う。大天井最後の下りの辺りで急に天候がくずれ、吹雪だしたが、テントを張るころには、すっかり止み、晴れ出してきた。ヒュッテは雪にうずまり見えない。ただ便所だけが屋根を見せており、誰かがガラスを割ってビバークした跡があった。気温は氷点下に下がり、テント内はホエーブスを消すと氷だらけになった。高橋特製のライスカレーは大変おいしかった。おいしいことにはめしがまなかった。

5月1日 晴。 大天井ヒュッテ(7:05) — 赤石岳頂上(10:40) — 西岳頂上(13:15) — 水俣乗越(15:15)

外は晴れて槍、常念方面がきれいに見えた。雪はかたくしまり全員アイゼン着用。赤岩岳附近のガラ場と雪渓に気分の悪い思いをした。赤岩岳から西岳まで思いの外遠いように感じた。西岳の小屋がハッキリ望見され、いよいよ西岳の下りに入る。頂上附近はガラ場とハイマツの連続で、後半は急な雪の斜面の下降となり、夏道は時折つかえた。右(天井沢側)の急な(殆んど65度位ある斜面)雪渓を下降すれば時間的に助かったのだが、楽な方へ選んだつもりが

大変な遠まわりとなった。最後の槍沢側に切れ落ちたような雪渓をトラバースすると、50 m 位でやっと西岳の下りを完了した。天上沢の乗越しには TEECAC のテントが張っており、我我はその下の樺の木の傍（槍沢側）の斜面をけずりとしてテントを設営した。槍が目の前に立ちはだかり東鎌尾根はそのうすい背中をくねくねと槍の頂上にのばしている。空は晴れており明日の好天気を約束してくれる。

5月2日 晴後ミゾレ。 水俣乗越（8：30）——ヒュッテ大槍（12：45）——槍ヶ岳山荘（13：45——14：30）——一ノ俣出合（16：55）

高橋が風邪気味の頭痛とのことで下山させてほしいと言う。ここまで来たのだから東鎌尾根は絶対に越せたいと思い、阪本、井村だけで続行することにして高橋を下山させる。ツェルト、不要な食料、昼食などを持たせた。水俣乗越の槍沢側の斜面（たいして急なものでない。上方だけが急であるが、槍沢よりのサポートには十分使えると思う）を阪本は途中まで見送る。アイゼンをはかせておいた。阪本、井村はテントを撤収、アイゼンを着用して急なナイフリッジを登り始めた。雪は一面にかぶさっており雪庇も相当はりだしていた。トラバースと急斜面の登攀に終始し、神経の張り通しだった。今朝、高橋を見送った時に槍沢側から登って来たパーティは早くも頂上を踏んで下山してきた。アンザイレンしていた。殺生小屋を過ぎると槍の基部の岩道をしばらく登り、最後の雪渓のトラバースとなる。クレバスが何本も走っておりヒヤヒヤした。殺生小屋附近から空はガスミゾレとなり荷は重くなり通しであった。槍ヶ岳山荘附近になると雨に変わり、風で体にしみこむ。槍の頂上は踏まずに、小倉山岳会パーティと一緒に槍沢を下る。雪渓は雪のためにぬかりアイゼンが邪魔になる程である。雨はやまず全身ビショぬれになり、ガタガタとなって一ノ俣小屋附近にテントを張った。はじめて地面に張ったテントだが、雨がしみ込みひどい思いをする。夕食のワンタンメンは山行中で一番おいしかった。シュラフに入るが寒さのため眠れなかった。雪の方が余程ましだ。

5月3日 晴。 一ノ俣（5：25）——横尾（6：07）——徳沢（7：10）——上高地バス停（8：25）

朝食をとらずにパッキングを済ませ小雨の中を出発する。横尾山荘にて高橋の伝言を受け上高地へ向う。雨も止み晴れ間が見えだし、やっとの思いで上高地バス停にたどりついた。

〔阪本記〕

夏山合宿 剣岳真砂

期 間 7月24日——31日

メンバー CL阪本 SL高橋（俊） 松下 光 小阪 吉村

7月23日 大阪発。坂東、中尾、吉永、保野、広瀬各氏の見送りをうける。車内は割合すいていた。

7月24日 晴。 室堂(10:00) — 雷鳥(12:45) — 剣御前小屋(14:45)
— 真砂テント場(17:45)

雷鳥で縦走用食料デポ。阪本、光、真砂先着。テント場に雪渓はりだし、場所捜し一苦勞。結局、大小テントを別々にする。

7月25日 晴時々曇。 BC(10:15) — 長次郎出合い(10:40) — 雪渓訓練(13:00) — BC(16:00)

昨年とそう変わらない程の雪渓量。

7月26日 晴。 BC(6:20) — 八ッ峰縦走(7:35) — 五六の科尔(12:30) — 上半縦走 — BC(17:45)

昨年と同様容易にとりついた。四峰の下りには、横にはり出したザイルに摩滅した木をピンに懸垂する。容易に科尔に出る。吉村、右足カッケ気味にて、高橋と下山。岩稜を忠実に本峰へ向かう。長次郎の頭で時間おそく、長次郎より下山。

7月27日 晴。 BC(8:18) — 平蔵出合い(8:50) — A1取り付点(11:30) — 12:20 — 本峰(15:15 — 16:06) — BC(17:36)

南壁、迫力なく、浮石多く終始不愉快な登攀をする。が、意外に時間をくう。西面はガスっており、眺望がきかず。時々姿をみせてくれるが、頂上でくだらん話に花が咲く。楽しい。昼食まずい！

高橋、吉村、小阪は剣沢を二股まで。

7月28日 晴。 BC(7:00) — 二股(7:35) — 三ノ窓(10:40) — ジャンダルム登攀終了(14:10) — 三ノ窓(14:30) — 二股(16:40) — BC(17:50)

阪本、松下、光、小阪、三ノ窓へ。阪本、小阪、ジャンダルムの三本クラック登攀。今日はひどい目にあった！ 昼食のスキムミルクで、三ノ窓で全員下痢！ ジャンダルム登攀中、阪本は小阪の頭上にて、数度はげしく空砲をうつ。小阪、チッ息黄面する。〔スカンク顔負け！〕ジャンは浮き石多く2倍も時間をくった。浮石処理に20分近くかかっている。帰路は、仙人を回ろうとするが時間なく、三ノ窓を下る。4人共痛む腹をおさえつつBCに帰る。痛いばかりじゃない、よおーく立ったよ！ 食料改善要求！

7月29日 曇。 BC(8:00) — 六峰Aフェイス登攀開始(12:15) — 同終了(13:38) — BC(18:25)

阪本、松下、六峰Aフェイスへ。光、小阪、残留。楽しい登攀だった。六峰下部の島につき、先行パーティ見物中、ラストがガラガランとばかりにおちてきた。カラビナはあんぐりひろがってしまい、ザイルには血がついていた。浮石多く、ホールドも小さく、こまかいバランスを要したが、大変おもしろかった。なお白い岩脈ルートとこのフェイスとの連続登攀は時間切れ。

7月30日 晴後曇。 BC(8:30) — 二股(9:00) — 小窓乗越(11:20) — 三ノ窓(13:45 — 14:30) — 二股(15:15) — BC(16:12)

阪本、光、松下、小阪、三ノ窓へ。仙人を通過して三ノ窓へ入り、田村OBに会う予定で出発。雪渓をどこまでもとばかりつめて行くと、知らぬ間に小窓雪渓に出てしまい、そのまま三ノ窓へ行く。乗越から小窓ノ王附近への道ははなはだ悪く、気分悪し。三ノ窓では、OB見あたらず。1時間休憩。三ノ窓を下る。二股でスタイルのいい女性に会う。阪本、光、松下、三名目つきかわる。

7月31日 雨後晴。 BC撤収、出発(9:45) — 御前小屋(12:15) — 雷鳥(13:23)

合宿最後の日として、のんびりシュラフにでも — と思っているとすごい雨。昨夜から風が強く、今朝になり大雨。待っていても仕方なく、雷鳥へ向う(阪本、松下、光、小阪)。剣沢の雪渓は、雨と低温で何度もたおれそうになる。夕方になって晴れて来た。雷鳥荘でデポしておいた縦走用食料をもらう。デポ代はタダにしてくれた。いよいよ明日から縦走だ! 松下、体の調子が悪く、食欲殆んどなし。

剣御前よりの路で、日のさした雷鳥沢が見えた時は、思わず心がはずんだ。ツカミ難キハ、コレ山登り。 [小阪記]

夏山縦走 剣岳 — 薬師岳 — 穂高岳

期 間 8月1日 — 7日

メンバー L阪本 松下 光 小阪

8月1日 晴。 雷鳥(8:20) — ノ越(9:55) — ザラ峠(12:40) — 五色ヶ原(15:20)

松下は体の具合悪く、ノ越にて荷をへらす、大変しんどそうであった。昨日の風雨でまいったのだろう(テントではカユをたべた)。光、小阪は調子よくホイホイ進む。雲海がきれい。女性がきれい。剣がだんだん遠くなる。サヨナラー。

8月2日 晴後曇。 五色ヶ原(9:00) — 鷲山(10:19) — 越中沢岳(12:34) — スゴ小屋(15:40)

松下は以前よりよくなる。朝食も軽くすませ、体調を整えるため、出発を大巾にずらす。荷はサブザック程度の重さにしておく。鷲山につく前にルートを誤り、時間ロス。スゴ小屋付近にテントを張っていると、営林署員が立ちのき要求。姿見えなくなって、又ぞろ張出す。他に2パーティあり。阪学大の人に会う。テント場は、ここより1時間半。

8月3日 晴後曇後雨、ガス。 スゴ小屋(7:15) — 間山(8:20) — 薬師岳(11:00) — 太郎小屋(13:25)

松下回復。雨ドシャ降り。薬師付近になると風もまじり、大変寒い。頂上より太郎へ下る時ルート誤り、逆戻りし、頂上にて道標を知る。登り切って安心したせい、そのまま道らしき

ものを下ったが失敗。頂上で阪学大の人に会う。ガス濃く寒い。30分下ると新しい小屋がある。愛知大ケルンに黙禱。太郎兵衛平はうるさい。雨もあがる。

8月4日 曇時々晴。 太郎兵衛平(8:10) — 太郎小屋(8:28) — 上ノ岳(10:35) — 黒部五郎岳(14:10) — 黒部乗越小屋(16:10)

ズル寝で、4時起床が6時。湿地であるきにくく、雨なければ口笛がでるとこさ。乗越小屋は風情ある。掘立てだが、コーヒーもある。ここより見る笠はきれい。スゲ笠のよう。夕映えに美しく、全員ウツトリ。同志社女子大のパーティあり。

8月5日 晴。 黒部乗越小屋(7:00) — 三俣蓮華岳(8:30) — 双六小屋(10:10) — 樫沢岳(11:06) — 槍ヶ岳(15:10) — 小槍登攀(17:00) — 17:30 — 孫槍・曾孫槍登攀(17:40 — 18:10)

三俣蓮華で昨日の同志社女子大に会う。樫沢岳より見る北鎌尾根は異様。阪本、光は槍にて小槍・孫槍・曾孫槍登攀。気分よい所。(ステキダワ! 女性のため息。)懸垂用すて繩が5重位はさまっていた。今夜は星空。小阪、山荘より水をかすめる。水ききんだそうな。風がウルサイ! テント、バタバタ!

8月6日 晴後曇後晴。 槍ヶ岳(8:20) — 大喰岳(8:50) — 中岳(9:15) — 南岳(10:15) — キレット通過(10:53) — 北穂小屋(13:05) — 洞沢岳(15:45) — 穂高小屋(15:55)

縦走も後半となるとバテ気味になる。穂高とあって慎重。北穂に入る頃よりガスり始め、待望の滝谷は霧の中。ピトンの音がこだまする。北穂小屋の名物オヤジの顔を見る。岩道岩道、石ころ道の連続で、食傷気味。穂高小屋にテントを張った頃、霧で半分かくれたジャンダルムが姿を見せる。縦走最後の夜は盛大に、と思いが、食料カンはくだらんものがあるのみ。

8月7日 晴。 穂高小屋(7:12) — 奥穂(7:55) — 岳沢ヒュッテ(11:32) — 河童橋(13:30)

下山につき、中華メン、トーフその他と食塩を小屋で交換。昼食のおにぎり用。奥穂頂上は、人とアキカンで興味半減。しかし眺望よく、上高地が目の下に見える。里のにおい、人のにおい。河童橋付近は、大阪駅前のよう。人、人、人、きたない山姿がはずかしい。週末で、バスは満員。3時間程待つ。暗くなって島々へ。塩尻の村上さん宅で一泊。村上さん宅でのもてなしに感激。食欲、満足感。言うことなし。

遭難碑建立山行

(詳細は別項「村上泉君・坂東寛彦君追悼」の章参照)

鹿島槍ヶ岳偵察山行

期 間 10月29日 — 11月6日
メンバー L阪本 松下 光

- 10月29日 大谷原(8:15) — 大川沢取入口、BC(10:25) — BC発(13:30) — 北稜手前(15:10) — BC(16:17)
- 10月30日 BC(7:40) — 奥壁末端(10:15) — 天狗の鼻、ビバーク(17:00)。天狗の鼻に突上げるルンゼを登る。
- 10月31日 天狗の鼻(6:53) — 小舎岩(9:30) — 荒沢頭(12:13) — 北峰(12:40) — 南峰(13:30) — 冷池小屋、ビバーク(15:22)
- 11月1日 冷池小屋(7:20) — 中岩沢尾根を下る。尾根末端の岩場の上でビバーク(18:20)
- 11月2日 ビバーク地(6:20) — 中岩沢雪渓(7:50) — 西俣出合 — 大谷原(10:15) — BC(11:00)
- 11月3日 BC(13:00) — 大谷原(13:40) — 東尾根末端取付点(14:10) — P2003.9直下(15:30) — BC(15:50)
- 11月4日 BC(10:15) — 天狗尾根末端取付点(10:20) — 天狗の鼻直下(14:00) — BC(16:20)
- 11月5日 BC(10:10) — 西俣出合(11:40) — 高千穂平(14:00) — 西俣出合(15:40) — BC(17:10)
- 11月6日 BC撤収、発(13:30) — 大谷原(14:00) — 鹿島バス停(15:00)

まずビバーク用食料を1日半しか持っていかなかったために予定外のビバークを2日余計にすることになり、最後の日にはアメ玉1人ずつ7個しかなく、水もなかったので、本当にしんどかった。テントに戻ってからの食欲はすさまじいもので、目をそむけたくなる程であった。

冬山合宿 鹿島槍ヶ岳

期 間 12月27日 — 1月9日
メンバー L阪本 松下 高橋(洵)OB 田村OB 宮崎OB

- 12月26日 阪本、松下、宮崎、先発。
- 12月27日 大谷原BC、天狗尾根偵察に向かう(14:00) — 荒沢出合(15:00) — BC(16:00)

- 12月28日 BC (9:30) — 天狗尾根取付点 (11:00) — 尾根稜線上 (13:20) — 第一クロール、ビバーク (17:30)
- 12月29日 ビバーク地 (6:30) — 天狗の鼻、ビバーク (10:30)
- 12月30日 阪本、松下、北峰に向かうも風雪強く、あらためてビバーク地発 (7:40) — 荒沢の頭 (11:40) — 北峰 (12:30) — 天狗の鼻 (14:10) — BC (19:40)
- 12月31日 高橋、田村両OB入山 (12:00頃) — 両OB、阪本、BC発 (13:00) — 西俣出合 (14:00) — 中岩沢出合 (15:00) — BC (16:40)
- 1月1日 BC (9:00) — 西俣出合 (10:10) — 高千穂平 (13:00) — 冷池小屋、ビバーク (16:15)
- 1月2日 冷池小屋 (9:00) — 高千穂平 (10:50) — 西俣出合 (12:00) — BC (13:00)
- 1月3日 阪本を除く全員下山。
- 1月4~7日 雪。 停滞。
- 1月8日 雪。 無人小屋に引越し、中に冬テント張るも寒さ変わらず。
- 1月9日 下山。

幸い30日のみ奇蹟的に快晴となり、北峰に登ることができた。特に29日のビバークは苦しかった。28日もそうだった。雪洞を掘れず半身を風雪にさらすことに相なった次第。ツェルトが3人にはせまいため身動きがとれず、おかしなこっこうでビバークした。3日から8日までの間は連日の雪で、結局シュラフにもぐりっぱなし。なにすることもできず下山した。

春山合宿 鹿島槍ヶ岳

期 間 3月6日 — 17日
 メンバー CL阪本 SL高橋(俊) 光 吉村

- 3月5日 光先発。
- 3月6日 阪本出発 (ガソリン買えなかったの)。
- 3月7日 大谷原無人小屋着、先の2人はすでに小屋にテントを張ってある。
- 3月8日 BH (5:50) — P1003.9 (9:40) — 第一岩峰上の急斜面に雪洞 (18:40)
- 3月9日 ビバーク地 (7:30) — 荒沢の頭 (10:45) — 北峰 (12:00) — 南峰 (13:45) — 冷池小屋 (15:20) — 赤岩尾根下降、高千穂平前で雪洞ビバーク (22:40)

- 3月10日 ビパーク地(8:30) — 高千穂平(8:50) — 西俣出合(10:50)
— BC(12:00)
- 3月11日 スキー。
- 3月12日 BC(9:30) — 冷池尾根に向う、P1171の手前のピーク(13:30)
— 小沢を下降 — BC(16:00)
- 3月13日 吉村入山。スキー。
- 3月14日 スキー。
- 3月15日 BC(5:00) — 五竜の縦走、遠見天狗尾根P1665.2(13:00) 雪が
降り視界ゼロのためテントを張る。
- 3月16日 出発(7:30) — 五竜小屋(9:30) — 五竜岳(11:10) — 五竜
小屋(13:00) — 小遠見
- 3月17日 小遠見(12:00) — 遠見小屋(13:40) — 神城スキー場(15:
20) — 神城駅(16:00)

なにせ雪が降ったのは、それも部分的だが、9日と15日だけ。あとは快晴に続く快晴で、特
に五竜よりの眺望はすばらしかった。

〔高橋記〕

1967年度

穂高岳残雪山行

期 間 4月29日 — 5月7日
メンバー L阪本 松下 高橋(洵)OB

- 4月28日 大阪発、多数見送り。全然すわれず立ちっぱなし。
- 4月29日 松本駅で高橋OBにバッテリー、田村OBは入山できぬとのこと。 上高地(12:
05) — 徳沢園(15:05) — 横尾テント場(17:30)
- 4月30日 BC(7:25) — 濁沢(9:50) アソブ。BC(14:30)
- 5月2日 BC(5:00) 北尾根に向かう。濁沢(7:15) — 六元のコル(8:50)
— 一峰(9:30) — 四峰(10:40) — 三四のコル(11:00) 休ケイー時間。
三峰(13:55) — 二峰(13:48) — 前穂頂上(14:00) — 奥穂頂上(16:45)
— 穂高小屋(17:25) コル下る。濁沢(18:10) — BC(19:20)
- 5月3日 ドン。
- 5月4日 BC(6:25) — 濁沢(9:20) — 白出コル(13:10) 1時間の犬

休けい。涸沢岳頂上（14：40）——北穂頂上（17：20）小屋の傍に雪洞を掘る。ピバーク。

5月5日 ゆっくりしすぎクランク尾根は不可能になり、北穂のチムニーに向うも、取付点まで大変な時間を食いあきらめる。雪洞撤収（11：10）北穂沢を涸沢へ下る（11：53）BC（13：20）

5月6日 松下、上高地よりバスで下山、阪本、徳本峠越え。横尾（12：00）——白沢出合——徳本峠（17：40）雨降り出す。

5月7日 昨夜よりの雨止まず。荷物重く、面倒とばかり昨日きた道を上高地へ行く。徳本峠（7：00）——白沢出合（8：30）——上高地（9：20）あとは機械にまかせて松本へついた。

この山行はOB会の初山行と現役とを合わせた山行にする計画だったが、OB現役合わせて3名のみという山行になった。どちらも積極的に参加してほしかった。

徳本峠の小屋は風情のある小屋で、昔風なたた住いが気に入った。ここの飼犬とハンバーグを半分わけて食べた。例の如く、残った食料全部かついで来たので、重かった。上高地美人がゾロゾロ、ウヨウヨ。

〔阪本記〕

夏山合宿 剣岳

期 間 7月24日——8月5日

メンバー L阪本 光 大西

7月24日 真砂にBC。

7月25日 BC←→雷鳥沢 逆ボッカ。

7月26日 長次郎にて雪渓訓練。夜、宮崎OBが女性同伴にてテントに来訪。

7月27日 ハッ峰全峰縦走。BC（7：45）——（16：15終了）——BC（17：30）

7月28日 源次郎尾根——本峰。BC（7：00）——本峰（14：30）——平蔵——BC（17：00）

7月29日 南壁登攀（12：00～13：55）——本峰（14：42）——御前小屋（18：00）——BC（19：20）。小屋で宮崎OBの食料回収。

7月30日 六峰Cフェース（光、大西、阪本 14：20——15：45）

7月31日 光、縦走出発（剣——針ノ木岳——遠見尾根下山）。大西・阪本六峰Bフェース、Aフェース連続登攀。Bフェース（12：50——15：00）。Aフェース（15：35——16：43）。Aフェースは中大ルート。

8月1日 大西、阪本Dフェース登攀（14：20——18：30）

8月2日 二股へテント移動。

- 8月3日 チンネ日嶺ルート。aバンドc,dクラック(11:50—14:32)
8月4日 チンネ 左方カンテ—上部左稜線(11:15—16:32)
8月5日 一日中休息、附近の食料あさをやる。

夏山縦走 剣岳 — ババ谷 — 白馬岳 — 針ノ木岳

期 間 8月6日—15日
メンバー 阪本 大西

- 8月15日 針ノ木雪溪下山。大町でルンペン。
8月16日 阪本は八方往復、唐松小屋のデボを回収、これより北鎌尾根へ出発。大西は自宅へ。
8月17日 湯俣温泉にテント。
8月18日 北鎌のコルまで往復。
8月19日 湯俣(6:15)—独標(12:12)—槍ヶ岳(13:57)—宮田新道—湯俣(17:35)
8月20日 ドン、一日中テントですごす。
8月21日 湯俣(6:50)—北鎌沢—コル—北鎌尾根末端(13:42)—湯俣(14:56)
8月22日 硫黄尾根を調べるつもりで取付点を少し登るが、いやになりやめにして戻る。テントへ戻ってからズボン、シャツを洗たく。
8月23日 下山(6:50)—くず温泉(10:38)

夏合宿に於いては、松下が雷鳥沢で足をくじき参加不可能となって下山のやむなきに至ったのは、とてもショッキングであった。しかし3人であっても、ある程度巾広くやれたことは幸いだと思っている。

とにかくBC出発が他のパーティが出発して1時間程してからゆっくり出かけるのが常であった。

全体的にのんびりムードで、合宿を済ませたことをありがたく思っている。

二股のBCとしての条件はとてすぐれていると思う。

北鎌尾根

期 間 11月11日—18日
メンバー L阪本 大西

- 11月11日 湯俣小屋横の冬期小屋。
11月12日 雨プラスアラレのためドン。
11月13日 雪がつもっていた。小屋(5:45)——千天出合(8:10)——尾根末端(8:50)——一峰の頂上でツェルト(14:00)
11月14日 テント発(6:20)——一峰直下のクロアールでアンザイレン。ラッセル腰まであり。北鎌のコル(16:45)
11月15日 テント出発(7:20)——猛吹雪、視界5m内外。独標直下(14:00)
11月16日 テント出発(6:45)——独標(11:05)——大槍の手前(16:30)——笠ヶ岳のアーベントロートの美しさ。
11月17日 テント出発(8:30)——大槍(12:40)——槍沢へ出る。槍沢小屋。
11月18日 小屋(18:20)——横尾——徳沢園——白沢出合——徳本峠(13:20)——島々(17:30)

初めの計画としては、北鎌と穂高をむすんで、西穂下山であったが、予想以上の雪で、事実上冬山となってしまう尾根P1から、雪が深くてアイゼンは、はきっぱなし。しかもアンザイレンしっぱなしであった。大西にアイゼン訓練をさせないで連れていったから、尾根に入ってから大槍ピークまで毎日カッティングの連続で、少々グロッキー気味だった。しかも、荷物はコルでビバークのさいに穂高への縦走をあきらめ、食料の不要分を処理したとはいえ2人共23.4kgを背負ってのカッティングは苦しかった。

スコップを忘れたので、雪洞掘れず、ピッケルとコフェルでのツェルト用の半雪洞掘りは時間がかかった。独標直下でのビバークはともしんどかった。よくあれだけの深さの穴をピッケルとヘルメットで掘れたものと今になって考えて感心する。しかし、独標ピークにとびでると目の前に迫ってくる大槍と小槍の姿は今だ忘れ難い姿となっている。荒々しさと雄大さと笠のアーベントロート、東鎌の残照、すべて忘れ難い思い出となっている。〔阪本記〕

冬山合宿 爺ヶ岳東尾根

期 間 12月24日——1月6日
メンバー L阪本 高橋(俊) 松下 光

- 12月24日 大町——鹿島スキー場——大谷原無人小屋にBC。
12月25日 松下、カゼで出発を26日に延ばす。3人は明日のためのラッセルを丸山ピークまでやる。
12月26日 松下がカゼで下山。光、カゼでBC残留。阪本、高橋のみにて、東尾根をすることにする。大谷原(12:40)——JP・1376.6のコルの中間(15:35)

- 12月27日 BC (7:25) — JP (11:00) — 白沢JPコル (14:00)
12月28日 BC (8:00) — 白沢JP、猛吹雪。冷池小屋 (15:15)
12月29日 BC (11:00) — 西俣 (14:20) — 大谷原 (15:30) 光はず
で下山していた。
12月30日 ドン。
12月31日 高橋カゼ。阪本、北俣本谷へ散歩。
1月1日 ドン。
1月2日 高橋下山。阪本、北俣本谷をつめ、鎌尾根末端取付きまでゆく。
1月3日 冷尾根偵察。
1月4日 高千穂平からダイレクト尾根を偵察するつもりで高千穂平までゆくが降雪のため
視界きかず、小屋にきたら、百瀬、保野両OBが来ていた。
1月5日 3人で鹿島スキー場でスキーを楽しむ。
1月6日 下山、大町へ。

春山合宿 烏帽子岳 — 槍ヶ岳

期 間 2月25日 — 3月4日
メンバー L阪本 松下

- 2月25日 第一橋手前。
2月26日 にごり温泉。
2月27日 ブナ立尾根末端上部 200 m 位のところ。
2月28日 昨日のBCとP 2208.5 の中間地点。
2月29日 P 2208.5 (三角点)
3月1日 烏帽子小屋。
3月2日 野口五郎ピークアタック。
3月3日 烏帽子のピークを踏んでブナ立尾根をにごり温泉に向けて下山。
3月4日 小屋 (8:00) — ぐず温泉

計画は烏帽子 — 槍 — 横尾尾根であった。しかし時間的に言って、春山には中途半端な時であり、積雪状態も雪が全然しまっておらず、アイゼン、ワカンをつけても腰までのラッセルのブナ立尾根登攀は苦しかった。おまけにブナ立尾根取付点をまちがえて時間をロスすること4時間あまり、結局最後までこのロスがたたった。しかも好天続きだと思いと歯をキリキリさせたい程のもどかしさがあった。4日かかって登ったブナ立尾根を下るのには3時間半でこと足りたのはあきれ果てた。にごり近く来ると春のそよ風が気持ちよく、雪がしまっていた。一週間近くでこうもちがうものなのか。結局ブナ立尾根に時間を取りすぎたので野口五郎岳アタックに切り換え

た。この時2人という小数に泣いてしまいたい位に情けなかった。

平均積雪2m、特にP2208.5は3m近く積っていたから立派な雪洞が掘れた。中でツェルトに入ると大変あたたかであった。

センギリの消化の良さにはひどい目にあった。

槍ヶ岳北鎌尾根

期 間 3月27日 — 4月2日

メンバー 阪本

3月26日 大阪発、ちくま。川田、保野両OB及び吉村見送り。保野OB、ドアの閉じる時「バカヤロウ、キサマ。」「すみません。行かせて下さい。」

3月27日 雨後曇。 葛温泉(8:45) — 濁小屋(13:18)

くたくたになり、小屋に入りメンを喰い、電気つけっぱなしでシュラフに入った。風のためガラス戸がガタガタとあまり気持ちよくない夜である。

3月28日 小屋(10:30) — 湯俣小屋(17:00)

小屋横の冬期小屋にもぐり込む。あのズブズと入り込む表面クラストした雪には全く泣かされた。30分ピッチが15分ピッチになってしまった。背の重荷が辛い。食料豊富ゆえ、へらすのにつとめる。晴。途中ちらちら見える硫黄尾根にムラムラと闘志がわいて来た。

3月29日 10時にゆっくりと起床。小屋発(12:00)。唐谷をつめて乗越から北鎌尾根を偵察しようと思い、行って見たが、眺望がきかず。水俣川にそい、尾根へのアプローチを途中まで行き小屋に戻る。快晴。晴嵐荘になにか獲物ないかと捜す。あさまし!!

3月30日 3時20分起床。5時小屋発。アタックザックに4日間行動可能な食料、装備、非常食をつめる。順調なピッチにて進む。小屋からアイゼン着用。千天出合にて3人パーティのビバークしているのに出合う。日大尾根末端に取付き、適当にしまった雪の斜面を登る。途中カモシカが目の前を走り抜けた。疲れていることゆえ、ちらっと視線を向けたのみで登行を続ける。燕から西岳に至る稜線との高度をちぢめつづけて独標ピーク直下のブッシュの生えた雪面にたて穴を堀り、ツェルトを張り、もぐり込む。13時である。雲行きがあやしくなり、ツェルトに入ると同時に雪が降り出す。13時20分頃から吹雪となり、それがミズレと変わり、ついに夜半より雨となる。

3月31日 昨夜よりの雨が降りつづく。10時に退却決定。ビバーク地をアイゼン、ワカンをつけて出たのが10時30分。末端に着いたのが12時15分。千天出合(14:00)。小屋(16:40)。雨はあがり曇り。小屋には硫黄尾根に行くという2人パーティがいた。

4月1日 曇。 残りのホエーブスをガバガバとつかってやった。2人パーティは曇りゆえ、硫黄尾根は断念するとのことで今からすぐ下山するという。

4月2日 晴。 小屋(7:00) — 濁(9:40) — 葛温泉(12:10)

尾根末端へのアプローチに時間を食いすぎた。尾根末端付近でビバークしていたらもう少し時間を有効に使えていたように思える。尾根を退却するさいには雨にたたかれてホーホーの態でにげて来た。3月も下旬になればこんなところかと思うような沢がドンドンとデブリを押し出していた。ワカンのまま水俣川をザブザブと歩いたりしてふらふらと湯俣に戻ったわけである。葛温泉にやって来たらそこはもう春らんまんの観光客がドテラ姿で私のきたない姿をジロジロながめていた。帰りのバスは私一人だけの乗客をのせて大町に向った。餓鬼岳の見える安曇野平野は水田の仕事をする人を加えて、信州の好きな私をうっとりさせてくれた。

〔阪本記〕

1968年度

5月合宿 白馬岳 — 針ノ木岳縦走

期 間 4月28日 — 5月4日

メンバー 阪本 松下

- 4月28日 白馬大雪渓は入山禁止で、双子尾根より杓子岳に入ることにする。
- 4月29日 吹雪。 コル(5:40) — 樺平(7:15) — 杓子岳(13:10) — 白馬鑓頂上直下でビバーク。
- 4月30日 ガス。 BS(8:00) — 天狗避難小屋。
- 5月1日 快晴。 小屋(5:20) — 天狗の頭(6:12) — 遭難碑(8:53) — 唐松小屋(11:20) — 五竜小屋(14:50)
- 5月2日 晴。 小屋(5:10) — 五竜岳(6:30) — キレット小屋(10:20) — 鹿島槍北峰(15:20) — 南峰(16:04) — 冷池小屋(17:20)
- 5月3日 晴後ガス。 小屋(7:10) — 種池(10:22) — 岩小屋沢岳(14:20) — 新越乗越(14:50)
- 5月4日 ガス。 TS(6:50) — 鳴沢岳(8:00) — 赤沢岳(8:50) — スバリ岳(11:40) — 針ノ木岳(13:00) — 針ノ木小屋(14:20) — 大沢小屋(15:10)

雨と吹雪とガスとナダレと大変変化の多い縦走だった。残雪の多さにおどろく。双子尾根のJP上部の傾斜の強い雪の斜面は足元から小さなナダレが発生してヒヤヒヤした。杓子沢と大雪渓方面でナダレヒンパツ。30日は視界が全くきかず天狗小屋を見つけだすのには一苦労した。2時間半かかってやっと小屋のありかを見出した時は内心ほっとした。キレットでの順番待ちには頭に来た。爺岳南峰での食料あさは楽しかったね、松下君。我々のフランスパンは即廃棄、

新しい食料と入れ替える。重い覚悟で拾った食料をザックにしまう。ケルンは雪の中だった。

〔阪本記〕

夏山合宿 剣沢二股

- 期 間 7月26日 — 8月3日
- メンバー 阪本 松下 小阪 広瀬 夏井 北田 高木
- 7月26日 真砂、二股間にテント設営(17:15)
- 7月27日 晴後小雨。 BC(8:00) — 雪上訓練(9:50 —) — BC(15:00)
- 長次郎谷ハッ峰一二峰間ルンゼ雪渓付近で雪渓訓練。帰幕するとテントに営林署の立のき要求が白ボクで書いてあった。無視することにする。
- 7月28日 雨。 BC(6:15) — 真砂沢2,600メートル付近(9:45) — BC(11:00)
- 源治郎尾根に向うも強雨のため真砂沢をつめることにする。2,600メートル付近で雨強くテントへ引き返す。
- 7月29日 雨。
- 昼過ぎに営林署から即刻立ちのき命令あり。ゴネてみたがダメ。パッキングして二股に移動。
- 7月30日 小雨。 源治郎一峰(10:25) — 剣本峰(12:45) — 武蔵コル(14:10)
- 源治郎尾根から別山尾根を下る。武蔵谷を下りBC。
- 7月31日 曇時々小雨。 ハッ峰二三峰間ルンゼ取付(9:00) — 五六のコル(11:50) — 三ノ窓(14:07) — BC(15:23)
- 8月1日 六峰Aフェイス(阪本 広瀬 小阪)
- 六峰Cフェイス(松下 夏井)
- 8月2日 仙人散歩(夏井 北田 高木)
- チンネ左稜線(阪本 広瀬、9:50 — 15:50)
- 北条新村 — aバンドbクラック(松下 小阪、9:40 — 13:20)
- 8月3日 BC(6:45)
- 松下、夏井、高木、広瀬、北田は槍ヶ岳まで縦走に出発。阪本、小阪下山。

御在所岳藤内壁

- 期 間 11月18日 — 23日
- メンバー 阪本 高橋(俊)

—100—

- 11月18日 北谷小屋まで。
11月19日 快晴。 藤内沢出合(10:45) — 前尾根取付(11:30) — 前尾根の頭(15:15) — テント(16:00)
11月20日 一の壁クラックルート(12:20 — 13:30) — 中尾根パットレス(14:10 — 18:20) — 終了後、御在所岳頂上をへてテントへ帰る(20:40)。
11月21日 停滞。
11月22日 一の壁最左ルート(12:40 — 13:08) — 一の壁中央ルート(13:20 — 15:50) — ジャンダルム(16:20 — 17:20) — テント(17:50)
11月23日 下山。

冬山合宿 白馬岳主稜

期 間 12月25日 — 1月1日
メンバー 阪本 松下 夏井

- 12月25日 猿倉小屋上部にテント(17:35)
12月26日 晴後雪。 TS(10:35) — 白馬尻(14:00) — TS(15:40)
主稜末端取付点へ食料デポに向う。膝までのラッセル。
12月27日 TS(7:20) — 白馬尻(9:25) — 八峰下部尾根上部にテント(12:00) — デポ回収(13:10 — 14:55)
12月28日 TS(8:13) — 八峰直下にテント(12:00) — 昨日のテント地に逆ポッカ。テント着(15:20)
12月29日 吹雪。 悪天にてアタックできず、偵察に出る(8:45) — 六峰(11:00) — TS(11:50)
12月30日 吹雪。 テント半分埋没、停滞。
12月31日 風雪。 下山と決定。八峰直下の雪壁を80mフィックスで下る。胸までもぐるラッセルにいささかグロッキー気味。末端尾根中腹にてビバーク(17:30) 雪やまず。
1月1日 吹雪。 ラッセルはげし。白馬尻をややすぎてトレールに入りほっとする。猿倉小屋(13:00) — 細野(17:00) 吹雪やまず、下はミゾレ気味の重い雪だった。

春山合宿 南岳 — 北穂

期 間 3月6日 — 16日

メンバー 阪本 松下 夏井

- 3月6日 大正池休憩所の前にツェルト(16:00)
- 3月7日 河童橋(8:33) — 横尾避難小屋(16:45)
- 3月8日 横尾(7:16) — 涸沢出合付近に雪洞(11:25)
- 3月9日 晴後曇。 SH(5:10) — 涸沢出合(6:55) — 横尾尾根上天狗の
コル左(14:18) — 雪洞。
- 3月10日 吹雪。 沈澱。
- 3月11日 晴、風強し。 SH(6:17) — 南岳(8:05) — キレット通過(11
:55) — 北穂直下A沢のコル手前にビバーク(18:30)
16時頃より天候悪化。ツェルトにもぐり込み、飛驒側の突風をまともに受け、えらいかっ
こうにて辛抱した。
- 3月12日 風雪。 停滞。視界10数m。夏井、足の痛みを訴えるので足指をマッサージ
させる。白くなっている。阪本も痛みを感じ、足を調べると、さして異常を認めず、ほってお
く。ツェルトがすぐうずまるので、雪をかき込んで、その上にツェルトをかぶり直すこと4度。
- 3月13日 風雪。 これ以上のビバークは不要と見て、吹雪の中出発(7:05) — 北
穂小屋(11:17) — 南稜下降(12:30)。視界50mそこそこだが、信州側はさす
がに風雪のいきおいおとろえ、ホッとする。22:25南稜中間地点の急斜面に3人分のプラト
ーをけずりとり、不自由なビバークを強いられた。18時頃には夕焼と星がチラチラ見え出し
たが、夜間に入り、風雪はげしくなった。
- 3月14日 ガスのため南稜の下降ルートがなかなかつかめず時間を食う。12時頃より視界
3,40mの大雪。12時半松下涸沢小屋上部尾根の急なルンゼを約100m近くスリップ、無
事だった。涸沢小屋上部尾根の末端の急な稜上に3人分のプラトーをけずりビバーク。上部か
らの表層雪崩がこわく、新雪が積もる一方であった。ガソリンがなくなった。3人共4日間シ
ュラフに入らず、全く睡眠をとっていぬので、寒くてもうつらうつらして時間を過した。幻聴
と幻覚に悩まされる。まさに末期的状態であった。
- 3月15日 晴。 BP(6:00)。涸沢ヒュッテ下部に着いたのが7:46。胸までのラ
ッセルにグローッキー気味。横尾本谷出合(10:00) — 横尾避難小屋(14:45)
- 3月16日 横尾(6:10) — 上高地(10:27) — 沢渡(15:45)。夏井雪盲
でボロボロ涙。

阪本：左右両足指全指凍傷、入院加療。

夏井：左右両足親指、左足小指凍傷、通院加療。

1969 年度

夏山合宿 剣岳定着

期 間 8月3日 — 9日

メンバー 阪本 夏井 山田 船井

8月4日 快晴後雨。 雷鳥沢(11:55 — 12:05) — 御前乗越(14:18 — 38) — 真砂(16:40 — 17:00) — 剣沢二股(18:23)

雷鳥沢の登りにさしかかるとガスが湧いて今までの快晴が嘘のように雨が落ちはじめ。入部してはじめての合宿である。鬼の上級生も、小羊のような新人もない4人でのささやかな合宿である。しかし4人は闘志満々である。尻のひびから全身が二つに割れてしまうのではないかと思う程の重荷。キスリングは肩に背に腰に食い込み、叱咤はないが、沈黙の激励に引きずられ進む。「もう駄目です。」ということばが咽まで出掛る。しかし、言ってはならない、山岳部という非情の部へ好き好んで入った以上は。上級生が鬼に見え出す前に、御前乗越に着いた。もう登りはない。しかし、この安心はあっけなく吹き飛ばされてしまった。眼前に迫る剣岳の勇姿は圧倒的であった。今まで見たこともない大きな岩のかたまりが腰を据えている。今まで知っていた山とは全然違う。木が一本もない。夏だと言うのに沢山の雪。「こらえらい所へ来た。」と極地に連れて来られた様な気がした。そして次には二股までの長い長い下りが待っていた。腰と膝がくだけてしまいそうな気がした。雪渓の上で何度も尻もちをついた。やっとこさで二股にたどり着く。

8月5日 雨後曇。 停滞。

8月6日 曇時々雨。 BC(5:46) — 長次郎出合(7:15 — 25) — 雪上訓練(8:55 — 12:40) — BC(14:25)

長次郎谷で雪上訓練。時々雨が降り、すこぶる寒い。しかし、雪上訓練は続く。大学の山岳部はこんなものかと覚悟を決める。この日は一日中雪と格闘奮戦。

8月7日 雨後曇。 BC(13:38) — 池の平(15:30) — BC(16:40)

朝起きると雨が降っている。停滞と喜んだのも束の間、10時頃雨上がり、仙人へ行く。池の平をまわって帰るが、よい運動になった。夜、猛烈な雨。

8月8日 — 阪本氏の記録より — 5:00頃、突如としてテント内に水あふれ出し、大あわてで逃げ出す。食料、ピッケル、サイフ、靴、ザック等々流される。被害甚大なり。8:00頃、中島地帯で高校生6人、日大パーティー3人にて救助をもとめているのを見つけ、助け出す。二股一帯のあの大水のすさまじさ。大岩がゴロンゴロンと流されていくあのいやな音。12:10 マサゴ。靴を流されたものは小屋でスリッパをもらい、なわでしばって、15:

30に御前小屋、16:15 室堂。

〔船井記〕

秋山合宿 裏銀座

期 間 11月30日 — 12月7日

メンバー 阪本 夏井 山田 船井 高田

11月30日 雪。 七倉(9:10) — 濁(11:50) — ぶな立尾根取付(12:45)

この合宿は何も知らない1年生3名を完全に欺いた合宿であった。名こそ秋山合宿であるが、山は完全な冬。この年は冬山を2度やったと同じであった。この時、11月であると言うのに大町の街中に積雪があり、濁までは足首までの雪であった。

12月1日 雪後晴。 TS(5:00) — 三角点直下(14:40)

ぶな立尾根の登りで夏道の付いた尾根を一本取り違え、ひどい登り。膝下のラッセルはブッシュの急登、小岩峰の登りなどを苦しくさせる。

12月2日 晴。 TS(6:45) — 2,208メートル三角点(10:00) — 2,370メートルTS(15:00)

はじめてアイゼンを着用する。期待と不安。しかし、現実には重荷とラッセルの苦しみのみ。

12月3日 雪。 停滞。

12月4日 風雪。 停滞。

12月5日 快晴。 TS(6:30) — 烏帽子小屋(7:30) — 烏帽子岳(9:20) — 烏帽子小屋(11:00) — 三ッ岳(12:50) — 野口五郎岳(15:10) — TS(19:00)

2日間テントにとじ込められ、3日目待望の快晴。稜線に立てば真白な立山・剣。感激。烏帽子岳、野口五郎を往復。疲れ果てテントに戻る。

12月6日 快晴。 TS(11:15) — 2,208メートル(12:40) — 濁沢(16:05)

撤収。真白山々が頭に焼き付いて離れない。冬山の素晴らしさを知る。

12月7日 雨。 TS(10:15) — 七倉(12:00) — 葛温泉(12:25) 笹平(13:10)

下山。雨の中をトボトボ歩く。山々の白さは強烈だった。

〔船井記〕

冬山合宿 爺ヶ岳

期 間 1月7日 — 11日

メンバー 阪本 山田 船井

1月7日 鹿島(8:30) 1,766メートル(15:15)

爺岳東尾根へのささやかな合宿。時期はずれで誰もいない静かな雪山。1,766メートル付近にBC。我々だけの別天地。

1月8日 雪。 BC(7:40) — 鹿島館(8:50 — 9:30) — BC(13:05)

シンシンと雪の降る中を3人でデポ回収、荷上げ。ただ黙々と登る。

1月9日 雪後晴。 BC(6:40) — 2,200メートル(10:50) — BC(12:05)

ワカンを着け、偵察を兼ねて道をつけに出る。

1月10日 晴後吹雪。 BC(4:30) — 白沢天狗JP(9:00) — 爺ヶ岳主峰(10:40 — 11:00) — BC(13:30)

満天の星。そして鹿島槍、爺に輝くモルゲンローテ。冬山の美しさを知る。しかし程なく猛烈な地吹雪。目も開けられる。突風にバランスを失う。冬山の厳しさを知る。アイゼンのきしむ音に祝福されつつ、ピークに立つ。

1月11日 曇後晴。 BC(12:30) — 鹿島(16:20)

一目散の下山。帰る喜びを知る。

〔船井記〕

春山合宿 前穂高岳北尾根

期 間 4月7日 — 15日

メンバー L阪本 夏井 山田

4月7日 曇時々小雨。 山吹トンネル(7:10) — 中の湯(9:30) — 大正池(11:10 — 11:50) — 上高地バス停(13:20)

新島々からタクシーで山吹隧道付近まではいり、そこから、入山の苦しみを背負って上高地へ。上高地のバス停の建物の屋根の雪が落ちて高く積っているのを利用して雪洞を掘る。

4月8日 晴。 バス停(7:00) — 明神橋(9:35 — 10:00) — 徳沢出合付近(13:15)

眼前に輝き聳える穂高にファイトをかき立てられ、真白い上高地をあとにする。河童橋を渡り、梓川右岸を歩く。樹林帯の中はプレイカブルクラストで膝以上もぐり、歩きにくいことおびただしい。徳沢出合付近の河原に半イグルーの雪洞を造る。水滴が激しく落ち、きわめて不愉快である。

4月9日 快晴。 徳沢(4:15) — 新村橋跡(5:50) — 慶応尾根取り付き(7:15) — 慶応尾根1,750m付近(8:20 — 9:05) — 2,100m付近(11:50)

昨日と同様、ぬかりながら奥又白の沢にはいると踏み跡があり、大助かり。慶応尾根に取り

付くと腰までのラッセルに苦しむが、主稜上に出ると再び踏み跡が現われた。2,400m のピーク直下に雪洞。昨夜ビショ濡れになったシュラフなどを乾かし、快適な一夜を過ごす。

4月10日 曇。 2,100m 付近 (7:10) — 北尾根八峰 (13:20)

P 2,470 直下から雪がクラストしてアイゼンがよく利き快適。北尾根八峰では雪がサラサラで雪洞が掘りにくいが、3時間かかって立派な雪洞を完成した。夜から雪。

4月11日 雪。 停滞。ホエブス不調。

4月12日 曇。 八峰 (7:00) — 七峰 (10:50 — 11:40) — 六七のゴル (14:00)

アンザイレンにて出発。湿気が多い新雪が積もり、雪ダンゴがついて最悪の条件。涸沢側のガスの中から雪崩の音が頻繁に聞こえる。六七のゴルは雪が少なく、雪洞は掘りづらい。山田の両足に軽度の凍傷の兆候が現われ、阪本の靴ずれが激しく歩行困難となり、北尾根を断念する。

4月13日 吹雪後晴。 六七のゴル (8:20) — 七峰 (10:10) — 八峰 (14:00)

吹き荒れているが、待っていても好転しそうにないので風雪をついて退却する。八峰の我々の雪洞は入口が雪に埋まっていただけで、中はそのまま使えた。夜になって天気は完全に回復し、月がまっ白な涸沢カールを皓々と照らしている。

4月14日 快晴。 八峰 (6:30) — P 2,470 (8:00) — 慶応尾根末端 (13:25 — 13:40) — 新村橋跡 (14:20 — 14:40) — 徳沢園 (15:00 — 15:20) — 上高地バス停 (17:30)

慶応尾根を慎重に下降する。途中、2回アブザイレン。奥又白側にはもの凄いデブリが出ている。徳沢から上高地までが長い長い。バス停では、入山の時に造った雪洞が残っていたので少し手を加えて使用。

4月15日 快晴。 上高地 (9:40) — 大正池 (10:40 — 10:50) — 釜トンネル (11:45)

殆ど雪の消えた道をトボトボと歩き、釜トンネルの中で涸沢ヒュッテの自動車に乗せて貰う。地獄に仏とはこのことかと思われた。 (山田記)

1970 年度

5 月山行 穂高岳涸沢

期 間 5月2日 — 6日

メンバー 阪本OB 榎野

5月2日 晴、夜一時雨。 上高地(8:45) — 横尾(15:00)

チクマの中で、差し入れのウィスキーを阪本が飲みすぎ、バスの中で必死にシリの穴を押える。上高地では小1時間トイレに入り、榎野は心配になってのぞきに行く。横尾まで1ピッチごとに30分以上の大キジブレイク。新人しらけきり、ふてくさる。横尾では初めてツェルトに寝かせてもらうが、夜、雨が降り、ピシヨピシヨ。

5月3日 晴。 横尾(6:50) — 涸沢(10:20)

2人が充分入れる広さの堅穴を堀る。1時間程北尾根の斜面を利用して、雪上訓練をするが、雪が腐っていて練習にならず早々に打ち切る。

5月4日 曇、稜線はガス。 BC(4:15) — 白出コル(7:05) — 涸沢岳(8:00) — 北穂(10:50) — BC(11:40)

暗いうちにBCをあとにする。1ピッチ目で阪本又もキジを打つ。ザイテンの朝焼けが美しく、しばし見とれる。気温が高く雪がぬかって歩きにくく、こたえる。稜線はガスが下から吹き上げてきて、とても寒い。北穂まではルートがややこしく、おまけに部分的に岩場がいくつも出てくるので、非常に神経を使う。阪本にどなられ通し。北穂の登りはフラフラ。頂上で少し休んでから、北穂沢のざんごうの中を下る。榎野は雪崩が起こるのではないかと思ひビクビクして下る。テント場近くなったら一目散に走り出す。よくもあれでナダレないものだというのが新人の感想。午後は奥穂のナダレ見物をしながらFMを聞いて、日光浴としゃれ込む。

5月5日 BC(4:10) — 北尾根最低コル(5:40) — 八峰(6:32) — 五六のコル(8:30) — 三四のコル(10:40) — 前穂頂上(12:45) — 奥穂頂上(15:16) — 白出コル(16:18) — BC(17:15)

気温が多少下っているものの、最低コルまで少しラッセルを強いられる。尾根筋は所々夏道が出ているが、右も左もスッパリ、ナイフリッジ、雪壁、岩場と連続して現われ、ちょっとしたミスも許されない。阪本のガミガミはここで最高頂となりガミガミガミガミ……こちらはビクビクビク、オドオドオド。高校時代のあの苦しいけれど平和だった山行に比べて、この北尾根のなんと厳しいことか。ヒマラヤの写真に出て来るような奥又白側の急峻な尾根を見るにつけ、ついにアルピニストの世界に足を踏み入れてしまったという後悔の念が私を支配した。剣から槍へかけての稜線や、南アルプスなどちがって、ここではなだらかな高原などはない。全てギスギスしている。人間も山と敵対関係にある。早く帰りたい。といっても登るしかなく、ガミガミのあとにオドオドついていく。東壁では何パーティも取りついている。三峰は雪の半分程つまったチムニーを登る。アイゼンで岩登りをするのは初めてだが何とか登る。あとは知らないうちに前穂のテッペンについていた。緊張から急に解放されたためか、吊り尾根ではフラフラになる。岩肌を伝い落ちていく雪どけ水をすすっていると目の前をらいちょうが横ぎっていく。真白な体、赤い尻尾、きれい。雪壁を登りきると奥穂のピーク。下りは飛騨側へ入り込み、ガスがはれるまで待つ。

5月6日 曇後雨。 BC(9:00) — 横尾(10:42) — 徳本峠分岐(13:

00) 阪本は峠を経て、翌日下山。

予定では西穂までだったが、昨日の北尾根がこたえたか、腰の痛みがまた出てきた。下山に決定。ぬかる雪道がかえってクッションになり、腰にはひびかない。わずか3日間いただけなのに雪の量が全然ちがっているのに驚く。白沢出合で峠を越える阪本と別れ、一人でドロップをかじりながら、ブラブラと上高地へ下る。明神あたりからポツポツ降りだした雨が、バス停についたとたん本降りとなる。これで初めての山行が終った。しんどかったが、雪と太陽光でどきげんだった。こわい思いをしたことなど忘れてしまった。〔榎野記〕

屏風岩東壁雲稜会ルート

期 間 6月23日—25日

メンバー L夏井 山田 船井 阪本OB

1年の時に1本も岩登りが出来なかったせいもあって、2年になりトレーニングをすればするほどイライラしてきた。もうしんぼうたまらんと言うので山田と2人で滝谷へ行く計画を立て、その帰りに屏風岩へでもと言う大胆な計画をたずさえ意気揚々と部会へ行ったものの待ちかまえていたのは阪本氏のカミナリであった。氏は6月下旬の天候ほど悪いものはないし、岩もゆるんでいるから絶対にダメだ、と言うのである。今から考えてみると、まさに梅雨の最中、しかしはやる心はおさえ難かった。どうしても行きたかった。氏は頼むからやめてくれ、とも言った。こちらも一歩も引かなかった。そうこうしている内、数日後に屏風岩ならばよいということになってきた。「どうしても行くと言うんだな。」「はい、どうしても行きます。」「それじゃ俺も一緒に行く。」ということで夏井氏をリーダーとする4人パーティーができた。

6月23日 晴。 上高地(8:05) — 横尾岩小舎(12:20) — 同発(13:10)
— T4尾根取付(14:00) — 横尾岩小舎(14:50)

上高地からの道も時期はずれのためにひっそりとしている。途中数人の人間に出会っただけで静かな道をせせと横尾へ向って歩く。明神も徳沢も夏の人はまるで嘘のようである。徳沢あたりから1人の女性と抜きつ抜かれつしているうちに親しくなる。阪本氏などは特に女性に親切で色々世話をする。下心のないのが氏の偉いところである。岩小舎へ着くと荷をおいて4人でT4バットレスの取付まで偵察がたら散歩に行き、その夜は早や目に寝た。

6月24日 晴。 岩小舎(4:30) — T4尾根(5:30) — T4(6:50) —
扇岩テラス(9:30) — 外傾テラス(12:50) — 終了点(14:30) — 屏風の
頭(16:30 — 18:30) — 岩小舎(22:20)

運命の女神がほほえんだ。どういうわけか今日も晴れている。喜び勇んでールンゼの押し出しを登りつめて、T4尾根取付まで行く。夏井・船井、阪本・山田の2パーティーになり、まず船井から取り付く。2ピッチ登り、コンティニューアスでT4へ達した。すばらしい眺めであ

る。横尾のあたりが箱庭のように見え、頭上には東壁がおおいかぶさっている。雲稜会ルート
の凹角へ意を決して取り付く。2ピッチ目凹角の出口で背の低い夏井氏が奮闘している。大
ピナクルから一気に扇岩テラスまでザイルをのばす。扇岩テラスからはボルトが一直線にハン
グ下までのびている。不動岩より大きな岩を登ったことのない自分としては、先程から心なし
か奥歯が合いづらい。自分から言い出したものやはりえらい所へ来たもんだと内心思う。扇
岩から2ピッチ目はハングを2つ越して、レッジを越えると右斜上にボルトが外傾テラス目が
けてズラリとならんでいる。ハングの上へ出るとこれまたすごい高度感である。こんな高い所
へ登ったのは中学校時代に修学旅行の時、東京タワーに登って以来である。何とも余り気持の
良いものではない。しかもカラビナをかけすぎたためかザイルが思うように出て来ない。外傾
テラスへ着いた時はホッとしたもんだ。外傾テラスから東壁ルンゼに入り3ピッチ目終了点の
看板が上がっている、もうあとちょっとそこに見えている所で、今度は足をすべらして5mほ
どずり落ちた。一旦夏井氏に自分のいる所まで上がってもらい、コノヤローとばかりに再度挑
戦、ポッカーと登攀終了点に出た。屏風の頭で同じ雲稜ルートを後から登った阪本・山田パー
ティーを2時間待ち最低コルから岩小舎へもどった。

6月25日 雨。 岩小舎(13:05) — 白沢出合(15:00) — 徳本峠(16:
45) — 岩魚留(18:05) — 発電所(19:40)

朝起きるとひどく雨が降っている。どうしようかとぐずぐず言っているうちに昼になってし
まった。ええいっ、もう帰ろうということになって昼すぎ岩小舎を出発して徳本峠に向う。雨
は情容赦なく降ってくる。岩魚留の小屋に着いた頃はあたりは薄暗くなっていたが今日中に松
本まで下ろうと必死で雨の中を急ぐ。途中でそれまで車のわだちさえあった道がブツリと切
れてしまっている。狐にでもつままれた気持ちで道をさがすが一向にわからない。仕方がない
のでひき返し営林署の合宿所で道を尋ねる。そうすると夜も遅いからまあ泊って行けやと言
うことなのでその夜は合宿所に泊ってもらい、濡れたものなど全部かわかして、寝る。翌日は道
をきき、お礼を言って早々に島々へと向った。 (船井記)

大峰奥駈 吉野 — 前鬼

期 間 6月27日 — 30日

メンバー 槇野 高田 吉田(悟) 井坂

6月26日 大阪発。高田宅で泊まる。

6月27日 下市 — 金峰神社 — 山上岳避難小屋

6月28日 山上岳 — 行者還 — 一ノ峠

6月29日 一ノ峠 — 弥山 — 仏経岳 — 太古の辻 — 前鬼

6月30日 前鬼 — ダム ^{バス} 上市

夏山合宿 剣岳真砂定着

期 間 8月2日—10日

メンバー CL夏井 SL山田 船井 榎野 高田 井坂 吉田(悟) 阪本OB

8月2日 雨後曇。 室堂(12:00—13:25)—剣沢(17:00)—真砂(19:00)

全員元気にBC入り。

8月3日 晴後ガス。 熊の岩の左手で雪上訓練。体のあちこちにアザヤコブを作りBCへ戻る(15:55)。

8月4日 曇一時雨。 BC(5:35)—平蔵谷(6:15—9:10)—剣本峰(10:00)—小窓雪溪(16:40)—二股(18:05)—BC(19:10)

平蔵谷からガス。池の谷乗越辺りからドシャ降り。三の窓から小窓まで道がわからず苦戦し、やっとの思いで、小窓雪溪に降り立つ。北方稜線はルート不明確。

8月5日 晴後曇。 BC(7:05)—源治郎尾根一峰(10:25)—二峰(11:00)—本峰(12:55—13:30)—武蔵コル(14:55—16:10)—BC(19:45)

源治郎尾根に向かう。末端ルンゼ左のハイ松帯を行く。快適な尾根歩き。帰りは、武蔵をグりで下るが途中から下れなくなり、又登りなおす。全員ブツブツ。

8月6日 曇一時雨。 うっとおしい天気の中を入っ峰に向かう。船井は雪上訓練で足を痛め途中より戻る。一、二峰間ルンゼより登る。雨で岩がぬれ、いやな感じ。景色も見えずおもしろくない。三の窓を下ったら二股は晴れていた。本日が行程としては一番楽であった。

8月7日 雨後晴。 雨で停滞。15時頃より日が照りはじめ、皆で日光浴を楽しむ。

8月8日 晴。 本日より岩登りである。

船井、井坂：Dフェイス下部久留米上部富山大より本峰北壁L2

山田、榎野：Dフェイス富山大より北壁L4

夏井、高田：Cフェイスリッジより本峰北壁Aバットレス

阪本、吉田：A、Bフェイスより源治郎二峰白い岩脈ルート、源治郎尾根を下降。

8月9日 晴。 昨日と同じオーダーでチンネに向かう。

阪本、吉田：ベルニナより左方カンテ

夏井、高田：北条、新村よりc、dクラック

山田、榎野：左稜線上下

船井、井坂：中央チムニーより左方カンテ

阪本パーティが時間を喰い、暗い中をBCに戻る。

短い期間であったが、全員フルに動いた小気味よい合宿であった。事故もなし。

8月10日 晴。 縦走パーティは雷鳥でデポ回収。阪本、船井は池の谷に向かう。

〔槇野記〕

夏山合宿 剣岳 — 槍ヶ岳縦走

期 間 8月10日 — 15日

メンバー CL夏井 SL山田 槇野 高田 井坂 吉田(悟)

8月10日 晴。 真砂 — 別山乗越 — 雷鳥、デポ回収

8月11日 晴。 雷鳥 — 五色ヶ原

8月12日 晴。 五色ヶ原 — スゴ — 間山

8月13日 曇一時雨。 間山 — 薬師岳 — 黒部五郎カール

8月14日 曇一時雨。 黒部五郎 — 三俣蓮華 — 槍ヶ岳 — 横尾

8月15日 雨。 横尾 — 上高地

(台風接近のため穂高縦走は断念)。

池ノ谷 二峰南壁 — 中央壁

期 間 8月10日 — 13日

メンバー 阪本OB 船井

8月10日 晴。 真砂(12:10) — 二股(12:55 — 13:20) — 三ノ窓(17:35)

定着合宿を終え、阪本氏と共に池の谷へ入るべく三ノ窓へテントをあげる。キスリングの荷はやけに重い。ヒューヒュー言いながら三ノ窓の雪渓を登る。長い長い登行の時間であった。

8月11日 晴後曇。 三ノ窓(5:00) — 池の谷二股(6:07 — 20) — 二峰南壁取付(8:30) — 南壁の頭(15:50) — BP(17:15)

なにしろ2人共池の谷に入るのははじめてである。池の谷左股というのはすぐにわかった。三ノ窓からまっすぐに下ればよいだけである。左股を下って行くと池の谷二股と言うのもすぐにわかった。そこから右股に入って行った。右股のどんづまりに見えている白い壁をドーム壁だと思った。ところが実は、これは右股奥壁であった。右股奥壁はドーム然とした立派な壁だ。大体においてこの辺名前の付け方がまずい。ドームらしくないのをドームと言ってみたり、ドームから派生してもいないのにドーム稜であるとか。外国語に優れる我々が聞けば、“ドーム”……ハハアーン、丸いピークを持っているんだなど直感的にひらめくから無理もない。剣尾根の頭をドームと間違えた。しかし、こんなことは先ず大勢には変りなかった。目指す二峰南壁

は一目瞭然、これだとわかった。黒々とした圧倒的な壁であった。一見するとわかったけれども、なるべく見ないで雪渓を登った。またまじまじと見ている余裕もなく、ビッケルにすがりついて雪とにらめっこをしながら歩いた。程なく二峰南壁の対岸の島にたどりついた。登る準備——心の準備のことである——をして取付く。取付から2ピッチはトラバースである。1ピッチ目はセカンドで登ったので外傾していたけれどそんなにむずかしいとは思わなかった。ところがである。2ピッチ目は最初なんでもなかったバンドが進むにつれオーバーハンクに押えられてくる。それと共に体は段々と低くしなければならなくなる。そして仕舞にはバンドの上に四つん這いになって、泣きそうな顔して、こんな所にルートをつけた初登攀者に敬意を表しながらも、それ以上に憎悪に燃えて進むのである。3ピッチ目はセカンドだったので空間の高度を楽しみながら登る。4ピッチ目は恐ろしい高度である。眼下の雪渓までスッパリと切れ落ち、暗いラントクルフトが大きな口を開けている。なんでこんな所に来ているのだろうかと思う。5ピッチ目で快適なテラスに入る。6ピッチ目はセカンドだったのでいやなトラバースも気楽にやり過ぎて落ちそうになる。7ピッチ目は岩を一段登ると草付に出る。ただの草付ではない。草壁というか、草原を傾けたやつというか。一面の草である。草の下は泥である。ここでは全て不安定である。冷汗をかきつつ一本のカンパの木を目掛けて登る。あとは草と岩とハイ松で、概してトップの時はイヤイヤ、セカンドの時は楽しく登った。11ピッチ目でコンテに移り、ハイ松を分けて終了点の南壁の頭に出た。そして剣尾根の主稜へ出るやビバークを決め込んだ。

8月12日 快晴。 BP(6:35) — コルC(6:55) — ドーム(9:28) — コルB(9:45) — 中央壁取付(12:55) — BP(18:00)

コルCまでは一投足だった。ここからドームの登りにかかる。全くルート図のとおりでドームの上に出る。ここからは三ノ窓が見え、小さいながら人の動いているのもわかる。昨日から阪本氏と2人きり、まだ誰とも会っていない。静かなものである。ドームからコルBへ、そしてコルBからαルンゼを下る。中央壁の取付もすぐにわかった、つもりでいた。そして取付いた。ここまでは事も非常に順調に進んでいたし、これからも順調にいく予定であった。ところが1ピッチも登らぬうちに自分の登っているルートが登ろうと考えていたルートと違うのに気付いた。ルート図は左トラバースとなっているにもかかわらず、右へトラバースしなくてはならない。ルート図にないオーバーハンクを越えなければならない。頭の中は混沌とし、壁のどの辺にいるのか全くわからない。いくら頭上を見ても見える範囲は知れている。わかっていることはただ自分達の今登っているところも既成ルートであるということだけである。人が登ったところなら登れる、登れなくてはならないとして上へ向う。しかし、我々は登りながら考え過ぎた。時間はどんどん過ぎ、4ピッチ目にはもう辺は薄暗くなっていた。今日中に完登できる見通しは全くない。それではビバークの心配をしなくてはならない。ルートも判然としない。阪本氏は一歩も引き下がろうとしない。二人の立っている所は小さ過ぎる。片方の足は岩の上もう片方はアブミの上である。こんなところでビバークか。嘆息のもれる余裕もなかった。こだまするジャンピングの音も心細かった。長い時間がたち、我々が今夜一晚身を託するピンが

でき上がった。思い思い楽な様に態勢を整え、ツェルトをかぶる。

8月13日 晴とガス。 BP (7:00) — 中央壁終了点 (11:05) — コルB (12:00 — 13:20) — 三ノ窓 (14:20)

昨夜はアブミの上でどんな姿勢をしても長くは続かず、一晩中ゴソゴソ動いていた。それでも阪本氏の歌を子守り歌にウトウトした。明るくなって動き出す。昨日は日没時でルートもよく判らなかったが、今日は判る。4ピッチも登るとコンテで行ける様になった。そして最後の凹角をぬけると剣尾根の上にあっけなく出た。帰りは2ピッチの下降でコルBに出、やっと一息つき、ボヤーとしながら登攀具を片付ける。誰も待ってはいぬが、テントに帰れる嬉しさと狂喜する。R2を下り人のいる三ノ窓へ戻る。〔船井記〕

槍ヶ岳北鎌尾根

期 間 8月16日 — 20日

メンバー 船井 他2名

高校時代の山仲間とのこの山行は実にのんびりしたものであった。記録というものにはほどとおいものであるが、夏山合宿終了後の整理体操的気分で臨んだためか、楽しい山行であった。

8月15日 雨。 台風何号かの影響で激しい雨であるが、大町でAとTとにおちあいタクシーで七倉へ入る。

8月16日 曇時々晴。 七倉 (7:20) — 濁 (8:45) — 湯俣 (13:30)

朝起きると雨は降っていない。台風が来ているのにおかしいなと言いながらも、早速出発する。3人でまるで競歩をしているかのように歩き、30分ほど歩いては20分ほどの休憩をとる。東沢出合の発電所の調整池の芝生では陽が照りはじめ、実に気持が良い。しばらく横になる。浪人3年目のTはすでに靴ずれをおこし、歩き慣れていないせいも、かなり疲れている。湯俣に近づいた頃には、足をひきずり、ガタガタである。まだ昼すぎであるけれど、Tの不調を良いことに、もうここで寝ようということにして、テント場を支谷に求める。暗くなってから温泉に入ろうということになり地獄谷へ温泉を求めて入ってゆく。すると川のそばから温泉がゴボゴボと湧いている。川の水とこの湯を混ぜて露天風呂を作ろうと思い立ち河原の石を積む。手を入れてみるとちょうど良い湯加減である。早速服を脱ぎかけると、まずいことに女性ハイカーが通りかかって変な顔をして見てゆく。通り過ぎるのを見はからって、最後のものを脱ぎ捨て、飛び込むが、入ってみて飛びあがった。水と湯が混っていないのだ。あついは首ばかりで肩から下は全く川の流れの中なのである。3人でブツブツ文句を言いながらテントにもどって、フテ寝する。

8月17日 曇。 湯俣 (10:45) — 千天出合 (13:00) — 北鎌沢出合 (15

: 45) — 右俣左俣出合 (17:00)

まあそうあわてることはないじゃないか、と言うので、湯俣からぐうたらぐうたら歩いて北鎌沢の出合まで行く。どこかにテントの張れるところはないかいなと捜し、左俣との出合にテントを張って、流木を集めてポッポ燃やしながら夕食を食べて、早々に寝る。

8月18日 晴後雨。 左俣出合 (6:50) — 北鎌沢のコル (8:33)

今日こそは北鎌尾根を越えるぞと、3人気負っていつもより数時間も早く起きて、右俣を詰めてゆくが、北鎌沢のコルに着くなり雨がポツポツと降りはじめた。どうしようかなあ、と考えるが、Aと2人でTの顔をチラッと見るや、パーティー編成に問題があると言うことで停滞することにする。ただTだけが行きたがっている。

8月19日 晴一時ガス。 北鎌コル (6:15) — 天狗の腰掛 (7:45) — 独標 (8:55) — 大槍 (13:35 — 14:05) — 旧槍沢小屋跡

ハイマツの中につけられた踏跡を行くが、いわゆる悪場はなかなか出てこない。わずかに切れているところもあるけれど、目のくらむような高さではない。クサリ場も出てこないし、踏跡と言うよりは道がずっと上まで続いている。知らぬ間に大槍の基部まで来てしまった。なるほど北鎌平から見た限りではこんなのどこから登るのだろうかと言う威圧的な姿ではあるけれど、いざ取っついてみると、これまた知らぬ間に大槍の上へポツカリと出た。槍の頂上には多勢の登山者が下りの順番待ちをしていた。さすがにTは参ったらしく、槍沢小屋跡の河原までしかもたなかった。

8月20日 バスのこまないうちに上高地へ下ろうと言うことで、8時頃出発し、昼には上高地へ着いた。Tは曲りなりにも彼の初めてのアルプス登山を成功させたのであった。彼は今では某大学の山岳部員として活躍中である。 [船井記]

谷川岳一ノ倉沢 衝立岩正面壁

期 間 9月3日 — 6日

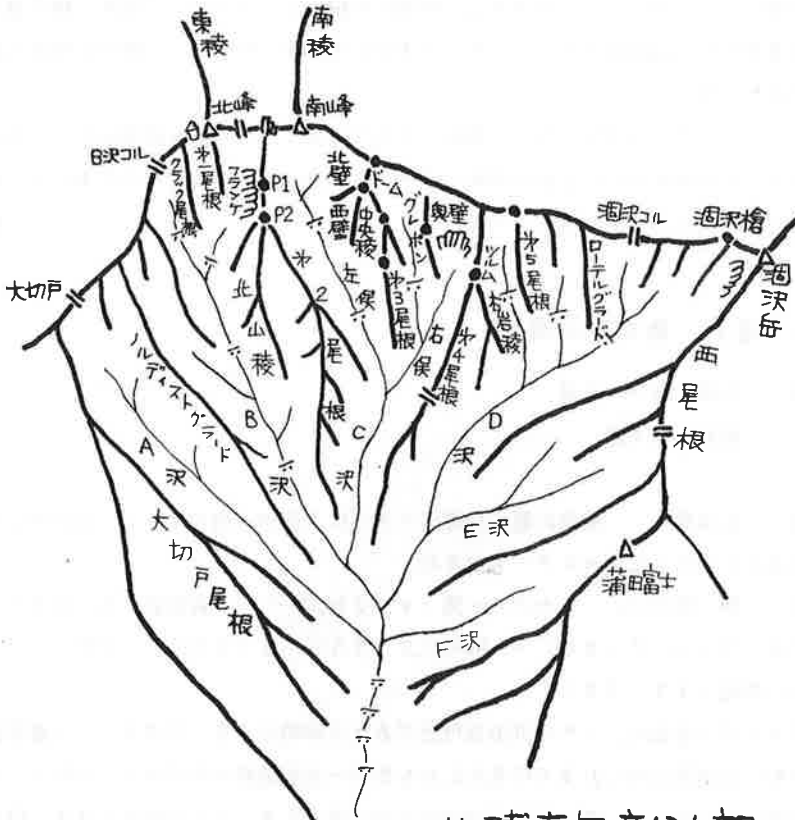
メンバー 船井 他1名

9月3日 雨後曇。 昼前に登山指導センターに入るが、雨が降っているため、明日に一ノ倉沢に入ることにして同センターで泊まる。

9月4日 晴一時ガス。 センター発 (4:20) — 一ノ倉出合 (5:02) — 中央稜基部 (6:32 — 7:20) — 取付 (7:35 — 8:50) — ボサテラス (16:30) — 洞穴 (17:30)

4人でセンターを出る。マチガ沢出合付近であたりが明るくなってきた。一ノ倉沢出合に着くと、そこには威圧的なこれまでに見たこともない大岩壁群がそそり立っていた。いよいよ一ノ倉の中へ入っていく。衝立岩は近づけば近づくほど大きくなるのしかかってきた。ほどなく中

中央稜テールリッジに取付く。テールリッジ上を中央稜基部まであえぎながら登っていく。中央稜の基部で休んでいると下から登ってきた3人パーティにまんまと先を越され、衝立岩のそれも自分達と同じ雲稜会ルートの取付点に行ってしまった。あわてて烏帽子奥壁へ行く2人と別れて取付点に急行するが、東京の連中は要領がよく、我々関西の田舎者がマゴマゴしている間にトップが取り付いてしまった。仕方なく取付点のアンザイレンテラスで1時間以上も待たされたあげく、2P目の第一ハング下でもまたもや追いついて不安定なスタンスで30分以上も待たされる。第一ハングはハーケンで越しているのであるが、そのハーケンにことごとくシュリングが通してある。ハング下にシュリングがぶら下がっているのもあまり気持ちのよいものではない。第一ハングを越しどんどんピッチをのびしていく。ピッチはのびているけれど、距離は一向にのびない。というのも、二人で競い合って短かくピッチを切っていたからである。各ピッチごとに大小さまざまなハングがしつこく出てきたからで、ちょっとしたレッジにでもあしんど、とばかりにピッチを区切ったからであった。そんな訳で第三ハングを越してボサテラスではじめて坐ってビレイできた時は実にホッとした気持であった。その次の10P目で洞穴に入った時は午後の5時すぎであった。どうしようか、ええい、ここでビパークしてしまえと言うことになった。



北穂高岳滝谷上部

9月5日 晴。 起床(5:25) — 発(6:45) — 終了(7:40) — コップの広場(10:00) — テールリッジ(13:40) — 南稜テラス(15:30)

洞穴からはビレイピンにつかまり顔を出して、右側の壁にアブミをかける。トップの様子は全く見えないが、やがて洞穴の上で足をブラブラやっているのが見えるようになる。洞穴ハングを越すと簡単なフリークライムでブッシュ帯の中の踏み跡に入る。早速コップ状岩壁に向い、衝立の頭を過ぎた所から2回の懸垂でコップの広場に降り立つ。コップの広場は岩盤の広場である。実に静かなこの広場を横切り、緑ルートの取り付き点でのどがかわいたといいつつ休んでいると、稜線から人の呼ぶ声がして、奥壁へ行った二人の遭難を伝えてくる。奥壁上部で立往生しているとのこと。すぐさまコップを断念して、コップのスラブを下降し南稜テラスまで登った。奥壁の2人はパートナーZ氏と同会であるため、Z氏は連絡のため下にくだっていき、その夜は連絡員として南稜テラスで1人ビバーク。

9月6日 晴一時雨。 都岳連遭難救助隊20名が出動し、あざやかに、その日のうちに負傷者をひきおろし、病院に収容した。 (船井記)

穂高岳 滝谷・奥又白登攀

期 間 9月30日 — 10月9日

メンバー 阪本OB 夏井

9月29日 あわただしく準備して、思いのほか重くなったキスリングをかついで、大阪駅へ行く。さすがにシーズンはずすと人は少ない。差し入れのウィスキーをチビリながら雑談するが、いつものことながら夜行は眠れない。

9月30日 雨後曇。 上高地(8:30) — 横尾(13:05 — 13:45) — 涸沢(20:00)

上高地は冬のような静寂さと厳粛さはないが、いつきても良い所である。夜行で疲れた体はいやいや重いキスをつぐ。横尾まではほぼ順調に行く。横尾谷をそっていくと屏風の圧倒的な壁が目の前にのしかかってくる。涸沢へ登っていくあたりで、ついにバテル。薄着で休むと寒さが身にしみてくる。涸沢テント場の下で、ひとまず阪本が先発していくことにする。あたりが暗くなってきたので、食料を少しデポして歩き出す。途中で阪本に会い、阪本はデポを回収して、何とか涸沢のテントに入る。

10月1日 曇一時曇。 BC(8:55) — 北穂小屋(11:00 — 11:30) — クラック尾根登攀開始(12:30) — 同終了(15:52) — 北穂(16:20) — BC(17:25)

昨日のこともあり少々遅く起きる。雑煮の朝食をすませ、南稜を登り、途中少し道に迷ったりしたが、2時間で北穂小屋へ着く。昨夜から少し雪が降り、滝谷から雪まじりの風が吹き上げる。ヤッケとオーバースボンをつけ、B沢のコルにあり、三ツ道具をつけて、B沢を慎重に下る。風が強い。トラバース地点がわからず、適当な所から、クラック尾根に移る。1ピッチでメガネのコルについてしまった。大分上の方からとりついたことになる。雪が少しのっていて、いやらしい。ジャンケンクラックは快適だが、強い風の中でじっとトップに登るのを待っているのは、どうもいただけない。ジャンケンクラックから上は凹角とトラバースをし、どんどん登ってゆくと、北穂小屋の少し上のところに出た。小屋で着がえ、さっさと南稜を下る。

10月2日 晴。 BC (5:45) — 五六のコル (6:35 — 7:00) — 四峰正面壁登攀開始 (8:40) — 同終了 (12:20) — 五六のコル (14:45 — 15:00) — BC (15:35)

北穂が白くなっているので、今日は四峰正面をアタックする。五六のコルから奥又白にあり、北条・新村ルートの取付に到る。ハイマツテラスまでは簡単だが、岩が少々もろい。ここで少し休んでから、ハンクに挑む。大ハンクは切れ目の側面を登っており、いやらしい。ハンクで腕力を消耗してからのトラバースはとまどう。ピナクルでザイルを解く。ガラガラした道を歩き、前穂高の東壁の見渡せる四峰の肩で昼食をとる。時間が遅いので五六のコルから潤沢のBCへと急ぐ。

10月3日 曇。 BC (5:10) — 北穂 (7:40) — 第一尾根登攀開始 (8:35) — 同終了 (12:35 — 14:10) — 白出のコル (15:50 — 16:05) — BC (17:00)

そろそろ飽きがきた雑煮を腹に入れ、BCを出発。北穂にはまだ少し雪が残っている。クラック尾根へトラバースした地点より少し下り、カンのフタのペンキの印のところから第一尾根の取付までトラバースする。クラック尾根の時と違って視界がきくのが嬉しい。順調にT3につく。ここだけは尾根という感じがしてフランケがきれいである。人形岩では背の低いものは苦勞するらしく、さかんに考え、ようやく人形岩の頭に立ち、あとはやさしいバンドをT2まで行く。Aフェースでは雪のため思いの外苦勞させられ、北穂のテッペンに着く。昼食をとり四尾根をあきらめて白出のコルへと行き、ザイテンをゆっくり雑談しながらBCへ帰る。

10月4日 曇後雨。 BC (7:30) — 松濤岩 (9:30 — 9:55) — ドーム西壁登攀開始 (11:35) — 同終了 (14:15) — 北穂小屋 (15:15) — BC (6:40)

通いなれた南稜を登って北穂へ。C沢の下降では下りすぎて、手間どり、ドーム西壁の取付点につく。先行パーティーがあり、ボヤッと取付点で待つ。笠がきれいに見える。まずBフェースは雪のつまった凹角を何とか登り、ガラ場を通過して大テラスに出る。人工のピッチではボルトのリングがとれていたりしてヒヤッとする。短いチムニーを登ると、もうドームの頭であった。縦走路で強い三ツ道具をはずし、南稜からBCへ。

10月5日 雨後曇。 雨が降っているので、休養することにする。阪本氏の何回目かの誕生日でもある。

10月6日 快晴。 BC(4:40) — 北穂(7:00) — スノーコル(7:50)
— 第四尾根登攀開始(8:20) — ツルムのコル(10:50) — 同終了(11:35)
— 北穂小屋(12:45 — 13:05) — P2フランケ登攀開始(13:55) — 同
終了(16:25) — 北穂小屋(17:15) — BC(18:15)

昨日の雨がうって変わった様な快晴。南稜を登り、C沢を下り、スノーコルにあがる。天気が良いので快適。A、Bカンテはきれいなカンテで気持が良くなる。ツルム正面壁は圧倒的なスケールでのしかかってくる。ツルムの上までホールドの多い壁を登り、コルに下る。クラックを登りDカンテの下に着くが、カンテらしからぬカンテで岩の重なりのようにである。お互いに背が低いので右にトラバースするのに苦労する。電光形のクラックを登り、縦走路に出て、北穂の小屋に入り昼食をとる。すぐに小屋を出て、B沢を下り、P2フランケまでトラバースして早大ルートの取付へ行く。ここではひと抱えもある大きな岩が自然落石となって落ちてきて、胆をつぶす。凹角をフリーと人工で登り、フェースからバンドを登ると芝工大ルートとの合流点につく。簡単なクラックをひと登りしてP2に出る。空が実にきれいで、滝谷最後の岩登りを楽しむ。

10月7日 晴。 BC(6:40) — 五六のコル(7:30 — 7:45) — 東壁登攀開始(10:10) — 前穂(13:30 — 14:05) — 奥穂(15:15 — 15:30) — 白出のコル(16:00) — BC(17:00)

今日は最後の岩登りを楽しもうと思って、五六のコルへ登り、奥又へおり、C沢を登り、Cフェースの下の適当なところで登攀準備する。Cフェースはどこがどこかさっぱりわからない。右よりにルートをとると、青白いもろい岩で、最悪も最悪でハーケンはあるが、使えそうもない。本当に這いずり上がる。ようやくきり抜け、2人でいやらしいと文句をぶつぶつ言う。Bフェースは凹角を登り、Aフェースはおもしろそうな所をよってこの山行の登りおさめにしようとする。そしてこれを登りきると前穂の頂上である。天気はいいし、昼寝でもしたいところだが時間もないので奥穂へと急ぎ、白出のコルからBCへ帰る。

10月8日 快晴。 涸沢(6:05) — 白出のコル(7:55 — 8:10) — 奥穂(8:45) — 天狗のコル(10:40 — 11:00) — 間ノ岳(11:45) — 西穂(12:35 — 13:00) — 独標(13:45) — 西穂山荘(14:25 — 14:45) — 河童橋(16:40)

涸沢のテント場を下に見ながらザイテンを登り、奥穂へ行く。西穂への道は長くかつ凹凸がはげしい。うんざりしながらも、ジャンダルムの雄姿にひかれる。馬の背を下り、ロバの耳をトラバースし、ジャンダルムも背後となる。どんどん歩きやがて人のいる西穂のピークが近づいてくる。ここから奥穂を見るときほど高い。反対に登るとなると、と思うとゾツとする。西穂の小屋から森林帯を上高地へと下る。上高地に近づくと従って、だんだんと人声が多くな

る。足をひきずりながらも河童橋まで行き、小梨平でキャンプすることにする。

10月9日 晴。朝起きてみると、残り少ない食料がネズミにやられている。無事な食料を拾い集めて簡単に朝食をとり、早々に出発する。徳本峠への登りを黙々と登る。峠からは穂高の稜線が見え、名残り尽きないけれど、島々谷の道をとる。帰りに塩尻の村上さんの家に寄り、その夜の汽車に乗る。〔夏井記〕

北岳バツトレス

期 間 10月8日—10日

メンバー 山田・槇野

10月8日 快晴。 広河原(10:40) — 大樺沢二俣、BC(14:05) — 同発(14:55) — バツトレス沢出合(15:25) — BC(15:50)

久し振りの重荷と寝不足のせいですこぶる不調。二俣にBCを設営し、偵察に出る。バツトレス沢出合まで行って引き返す。陽がかけると急に冷え込む。

10月9日 晴後曇。 BC(6:50) — D下沢(7:25) — Dガリー大滝下(8:10 — 8:40) — 大滝上(9:40 — 9:50) — 第四尾根取付点(11:45) — 同終了(14:50) — 北岳頂上(15:25) — BC(17:20)

D下沢を登って、Dガリー大滝の下で登攀具をつける。1P目、取付きを強引に越えると、あとは容易なルンゼ。2ピッチで広いテラス。3P目、コンティニューアスで20m。4P目、容易なルンゼ。5P目、緩傾斜の草付きを右斜上、コンテ。6P目、テラスの上のスラブをローテルブラットだと勘違いして、第四尾根フランクを登るつもりでグラスバンドを右ヘトラバース。行き詰まって小さなバンドでビレイ。7P目、約20m直上し、第四尾根取付きのテラスに出る。フランクは明日登ることにして、第四尾根を登る。8P目、凹状部のクラックから草付に出てハイ松テラスへ。9P目、容易な草付フェイス。10P目、白い岩から第一コルの少し上まで。11P目、20mで第二コルに達し、垂壁をアブミで越え、緩傾斜の岩稜を快適に登り、マッチ箱ピーク手前のギャップまで、45m。12P目、マッチ箱ピークまで登って、10mのアプザイレンで第三コルに降りる。13P目、急な凹角から稜線上の凹状部を登る。

14P目、容易な草付。15P目、コンテで15m登って登攀終了。頂上まで足を運ぶが、視界悪く、日本第二の高峰という実感は全然ない。八本歯のコルからBCに戻る。

10月10日 晴後雨。 BC(5:10) — Bガリー大滝下(6:30) — 大滝上(7:00) — Dガリー奥壁取付き(7:50) — 登攀終了(12:10) — BC、撤収(14:25 — 15:10) — 広河原(16:35)

夜の明けきらぬうちに出発。バツトレス沢は浮き石だらけで不愉快であるが、Bガリー大滝

は3級程度の階段状フェイスで、快適快適。緩傾斜帯をトラバースしてDガリーに入り、奥壁に取付く。1P、2Pと草付の脆いガリーを登る。3P目、山田が40m登り、残置ハーケンにセルフビレイを取ろうとしている時、ザイルの微かな振動で牛乳ビン大の浮き石が落ち、槇野の右耳の後ろと肩を直撃、外傷はたいしたことはないが、右腕に力はいらないため、中央稜登攀は断念。4P目、ハング下のテラスに達し、後続パーティに先を譲る。5P目、ハングを左から捲いてローテルプラッテの下へ。6P目、ローテルプラッテ下部のハングをエスケープして右のガリーにはいり、約20m登ってローテルプラッテにはいる。7P目、クラックに沿って直上し、ツルツルのスラブを落ちそうになりながら必死の思いで越え、右にバンドをトラバースしてハイ松テラスへ。8P目、ルンゼ状の草付を直上し第四尾根に出る、45m。9P目、第四尾根を40m登って登攀終了。頂上は踏まず、八本歯コルから一気に下り、BCを撤収して下山。雨が降り始め、次第に強くなる。

今回の山行は計画の上では連続登攀形式を取り入れ、我々なりに新しい登攀の方向を摸索しようと意気込んでいたのが、実際には、ルートファインディングの誤りや落石による負傷、そして何よりも我々自身の未熟さのために、竜頭蛇尾の結果に終わってしまった。とりわけ、中央稜を登れなかったのは非常に残念であった。しかし、主食にα米を取り入れた食料計画など満足できる結果を得られたものもあり、我々にとってこの山行が失敗であったとは決して言えないと思う。試行錯誤を繰り返して次第に向上していくものであり、今回の山行も又その一過程であるとするなら、この山行によって得られたものを今後の山行に生かし、より充実した山行を実践することによってこの山行の意義が認められるのである。今後の努力精進の決意を新たにす次第である。

〔山田記〕

前穂北尾根 — 北穂

期 間 11月20日 — 30日

メンバー 阪本OB 高田 井坂

11月19日 どしゃ降りの大阪をあとにして一路松本へ。出発前2日ほど雨の中を傘もささず歩きまわったためか頭が重い。しかし初めての雪山とあっては張り切らざるを得ない。アイゼ

ンワークは大丈夫だろうか。

- 11月20日 朝5時すぎ松本着。新島々からはタクシーをチャーター。中の湯までしか入れぬとのこと。雨はやや小降りとはいえ、曇り空がうらめしい。雨具をつけ、上高地をめざす。30キロを越える荷が肩に痛い。上高地のバスターミナルをすぎるところから晴れ間が見え出し抜群の山なみが目にとび込んでくる。横尾着は4時すぎ。すでに夕闇せまり、紅茶、カレーとあわただしく食事をすませ、7時すぎ寝る。
- 11月21日 4時半起床が3人共見事寝過ごし、6時も近い。どやされながらパッキングをすませ、横尾をあとにし、屏風岩を横に見ながら、涸沢に入る。積雪はヒュッテ付近で1m50、アイゼンをつけ、五六のゴルを目指す。アイゼンが小気味よくきく。かなりの量のデブリ。途中、阪本ヘルメットを落すも、執念深く拾いに行く。17時すぎ五六のゴル着。整地してツェルトを張り、ピーフンチャー。風が強く、時々ガスが出るが、満天の星。
- 11月22日 3人共またも寝坊し、6時すぎ起床。寒気でツェルト、シュラフはバリバリ。ほぼ快晴に恵まれ、困難なピッチの五峰にとりかかる。アンザイレンの登りはつらく、キスリングは行動容易ならしめず、苦しい。風強く、雪を舞い上げホオに痛い。四峰をすぎ、14時、三峰の登りにかかる時、不安定な雪の状態に阪本考え込む。荷上げを断行。三峰の半分付近の小テラスまで荷上げをしたところで夕刻せまり、ガスに包まれたため、行動を断念。テラスを整地してツェルトを張る。3人がやっと坐れる状態でかろうじてとうとうとする。阪本はよくしゃべり、歌い、わめきちらす。腰がやたらいたい。
- 11月23日 ガスと小降りの雪の中、再び荷上げ開始。今度のピッチは困難で、キスリングの行動は機敏性が欠け、しばしば、バランスをくずしてザイルにすがる。井坂タッシュに入れたはずのヘッドランプをなくし、しょげる。吹雪の荒れ狂う中、三峰も終わり、二峰へのリッジもおよび腰ですぎ、午後前穂高頂上へ。のんびりしておられず、荷をまとめ、吊り尾根へ。吊り尾根中央部付近にて、しぶい上りのため、またしても荷上げ。時間をロス、やむをえずピバーク。風強く、夜、星が近い。
- 11月24日 ツェルトが風にあおられ、高田は上半身ツェルトから出ていた。あわただしくパッキングをし、奥穂へ。急斜面のアイゼンワークはつらい。13時すぎ奥穂頂上へ。写真をとりのんびりと休息したいが、風強く、寒い。白出のゴルへの下りにかかるが、阪本、左ヘルートをとりすぎて、途中やばいトラバース。足元に穂高山荘見えながら、前へなかなか進めない。高田途中でビッケルを落すが、幸い発見。16時前、天国のような冬期小屋に着く。紅茶がやたらとうまい。
- 11月25日 10時すぎ、阪本、高田滝谷登攀のため北穂にむけて出発。風も弱く快晴。午後、ガスが出てきたと思ったら、夕刻、吹雪に変わる。
- 11月26日 小屋にいた山形大生、奥穂へ行くとか。ガスは濃く、気温も低い。一人さみしい。
- 11月27日 山形大生、10時すぎ、ザイテンを下って帰る。とうとう一人。夕食もわびしい。18時すぎ、突如阪本の声。北鎌からの京都のパーティーを含め、総勢6人、全身真白で小屋

着。北穂からの途中、雪崩に巻き込まれたとのこと。滝谷も悪天候で断念したらしい。

11月28日 京都のメンバー3人は奥穂までジャンダルムを見に行く。ややガス気味。大正池旅館の冬期番の人が前穂より来る。食糧、燃料不足気味。

11月29日 ガス、やや風強し。ザイテンを強引に下る。トップ阪本で40mザイル3本をつなぎ120mのフィックス。時々雪崩の音。ガスのためルートわからず、阪本大奮闘。ヒュッテ着は夕刻。阪本足の痛み、それでもタフネスを発揮する。横尾着は19時すぎでほとんどまっ暗。大正池旅館に泊めてもらえることになり、上高地をめざす。阪本、足の痛みひどし。10日ぶりの風呂、酒、ごちそう、満足。

11月30日 大正池に別れを告げ、猿渡まで。京都の1人、足の痛みひどし。阪本はやや回復か。猿渡からはバス、電車でネオンの街へもどってきた。夜行で大阪へ。〔井坂記〕

北鎌尾根 — 奥穂

期 間 11月21日 — 30日

メンバー 船井 他3名

岩壁をつないだ変則的な継続登攀よりもむしろ岩稜や尾根の縦走に岩登りを組み入れることは今後の長大なルートへの技術・体力とそれにも増して精神面へのトレーニングとなるのである。この計画も当初よりそういったことを頭に置いて、滝谷登攀を組み入れたものではあったが結果的には縦走のみに終わってしまった。

11月21日 晴。 七倉（8：50）—濁（10：00—10：20）—湯俣（13：45）—千天出合（15：20）

大町からタクシーで七倉へ。濁までは東電が一昨年流された道の工事をやっている。ダムができるという噂もある。湯俣へひたすら歩く。ところが歩けど歩けど雪はなし。期待はずれも甚しい。

11月22日 晴後雪。 千天出合（6：45）—北鎌沢出合（8：45—9：20）—北鎌沢のコル（13：05—14：05）—P8（15：45）

4時前におきて朝食の用意をする。この時はじめて食糧係のYが昨日の夕食に食べた若鶏のカラアゲのガラを大事そうに集めてビニール袋にしまい込んでいたかがわかった。この朝、そのガラでラーメンのスープをとって自慢げに皆の顔を見まわしていた。予想外に積雪量が少ないので北鎌沢から入ることにする。ここは至る所、氷がはり実に歩きづらい。それでも上部には雪がちゃんとあり、膝位まではもぐってくれた。いくら軽量化したとは言え2週間分の食糧と登攀具の入ったザックは肩にこたえる。北鎌沢のコルからナイフリッジを進み、P8ではアイゼンを着けるが、雪が降ってきたため早々にビバークと決めツェルトに入る。

11月23日 晴。 P8 (7:30) — 独標 (11:45 — 12:05) — 北鎌平 (16:15) — 大槍 (17:20) — 肩の小屋 (17:50)

今日は第一のヤマ場である。独標の基部へは難なく到る。独標は最初からトラバースすること決めていたのだが、やはりトラバース出来る状態であったのでトラバースルートに行く。難場はむしろこれからであった。独標を過ぎてからルートが判然とせず、主に千丈沢側を行ったのであるが、不安定な雪壁に登らされたり、ウロウロしながら北鎌平に着いた時にはすでに薄暗くなっていた。しかしもう一ふんばりして大槍のピークに立った。この日はリーダーKの誕生日であり、誕生日と命日が同じ日にならなかったことを喜び、暗闇の槍の穂先でハッピーブーディーを大合唱して、肩の小屋へ入った。

11月24日 晴、強風。 肩の小屋 (7:15) — 小槍 (8:40) — 肩の小屋 (9:30 — 11:30) — 南岳 (14:00)

今日の午前中は小槍登攀の計画である。肩の小屋から空身で登攀具だけをつけて小槍へ行く。とにかく風が強く、寒い。小槍に立っても別段おもしろいことも、くそもない。早々にアップザイレンをして下り、肩の小屋へ帰る。肩の小屋で大休止を取った後、ポツポツ南岳へ向う。中岳の下りは一気に尻セードー。この日は余程寒かったのだろうか、強風なんぞ何でもない。なんのこれしきとイキがって頭をまる出しにして歩いていたら耳に大きな水ぶくれが出来てしまい、皆に笑われた。南岳の小屋は入口がわずかしか明いておらず、中へも雪が吹き込んでいて、すべり込むようにして入った。

11月25日 晴後風雪。 南岳 (8:00) — 北穂冬期小屋 (12:10)

南岳からとろとろと下ってゆくと2つはしご段が出てくる。雪が安定していて問題はない。切れた稜線を上ったり下ったりしてキレットの最低鞍部に着く。滝谷が雪をつけている。北穂の小屋も見えるようになる。もう少しと思うのはまだ早かった。ここから北穂の最後の登りまでさえもかなりあった。ナイフリッジの稜線を右に左にからんでぐねぐねと行く。最後に本谷側へトラバースして雪壁に登り切ると北穂の小屋へ出た。北穂へ着くなり天候悪化のきざしが見え、雲が見る間に広がってきたので滝谷へは明日取り付こうと言うことになり、北穂冬期小屋に入る。外はいよいよ本格的に荒れてきている。その風雪の中、16時半頃に阪本氏と高田が北穂小屋に到着。話がはずんだ。

11月26日 風雪。 こちらは最初から停滞と決め込んでいたが、阪本氏達は最後まで迷ったあげく、もう予備日がないということで滝谷を断念し、奥穂へもどろうとするも、激しい風雪で南峰までも進めず、9時頃出発したにも拘らず、すぐにもどってくる。ラジオで三島事件キャッチ。

11月27日 風雪。 北穂小屋 (7:10) — 瀬沢岳直下のコル (12:40 — 16:10) — 穂高山荘 (17:20)

白出の小屋に1人で居る井坂のことが気がかりだと言うので、この際全員で白出へ向うことにする。一昨日より降り続いた雪は、極めて不安定な状態である。この日もみぞれに近い雪が

横なぐりの風とともに顔にあたる。トップ阪本氏で総勢6名で、稜線沿い、或いは飛驒側をまくようにして進んできたのであるが、涸沢岳登りのクサリ場手前約50mのコルにトップの阪本氏及びそれとアンザイレンした高田が達した時、一瞬ではあったが後続の4名が立ちどまり、次に動こうとした瞬間新雪雪崩を誘発してしまった。わずかの距離ではあったが、不用意にも涸沢側へ足を踏み入れてしまっていたのである。ここまで雪崩を警戒しながら主稜線を進んできたにも拘らず、この最後の悪場で雪壁を涸沢側にトラバースすることに誰一人としてその危険を感じなかったのも、又事実である。その瞬間、にぶい音がしたかと思うと、あたかも映画の画面が揺れるが如くに、大地が傾いてきた。そして雪が足元から崩れ落ちていく。前にいた2人も雪と共にスローモーションフィルムでも見ているかのように落ち込んでゆく。勿論自分の体もバランスを崩しながら落ちて行く。前にのめり数回転し、滑り台をすべるような格好で雪にうまりながら滑り落ちていく。「死ぬ、死ぬ、……ああ俺もおしまいかな。」と思った次の瞬間、内心にんまり笑いたいような衝動にかられる。スピードが弱まり、止るかと思うや、もう一発後からドスンときて今度はゴロゴロと転がりながら落ちて行く。肩からかけたザイルははずれ、ピッケルは右手首にバンドでとまっているとは言えはるかかなた、口へは雪が一抔入ってきて息苦しい。尻や足を容赦なく打つ。「やっぱり、窒息死かな。」と思う。次にスピードが弱まり今度は完全に止った。体は幸いにも雪面から大部分出ている。怪我もしていない。上を見ると、約100mのところには2人の人影があるが、誰であるか、判らない。しかしそれはすぐにKとMであることが判った。3人で慎重に上へ登り出す。やがて上のコルにいる連中とコールをかわす。人数の確認をし、全員無事とわかり安心する。右手の岩稜に取り付き1ピッチ登ったところで上から阪本氏とYが降りて来て合流。Yトップで20mを20ピッチ近く登り、もとのコルへ到着。3時間以上の苦しい苦しい登りであった。涸沢岳を越すと程なく白出の冬期小屋に到着、喜びが湧いてきた。

11月28日 快晴後風雪。 昨日、左足を強く打ったらしく若干痛む。アイゼンが折れ、いじけて停滞。K、Y、Mの3人は奥穂のピークまで出かける。この日大正池旅館の工藤氏が前穂より見えられ、総勢8名。昼前より風雪となる。

11月29日 風雪。 白出コル(6:30) — 涸沢ヒュッテ(12:10) — 横尾(14:50 — 15:30) — 大正池(18:45)

予備日、食料がないので下山を強行する。40mザイル3本をつなぎ、120mのフィックスを張りながらザイテンを下降するも、足元から崩れる新雪は非常に気持悪い。視界が非常に悪く右往左往しながらも岩稜通しに13ピッチでザイテンの末端に達する。ここから涸沢ヒュッテまで一目散に駆ける。本谷橋付近でアイゼンをはずし、とぼとぼと大正池まで歩き、その夜は工藤さんの世話になる。

11月30日 雪。 大正池(11:30) — 中の湯(12:40) — 沢渡(15:15)
大正池から長い長い雪の道を歩き、やっと人間の世界へ戻ってくる。 [船井記]

OB山行 鹿島槍ダイレクト尾根（敗退）

期 間 12月30日 — 1月4日
メンバー 齊藤OB 阪本OB

12月30日 晴後曇、気温下らず。 大谷原（10：25） — 西俣出合（14：25） —
— 布引東尾根末端（17：20）

12月31日 夜半より雪。 6：40出発。気温高く雪重く視界悪い。10：40ダイレクト尾
根末端の小さなナダレが谷いっぱい表層ナダレを起し、2人共ナダレに埋められる。幸いに
末端部であるためすぐに抜けさせた。10：55鎌尾根左稜末端にてドン。ツェルトを張る。附
近を偵察中に2度目の表層ナダレ発生。今度は予想していたのでゆっくりとやりすごす。しか
し本谷自体は、この状態ではとてもあぶなく登行不可能と断を下し、夜になって気温の下るの
を待って17：20撤収。ガスと雪。西俣出合（20：20） — 大谷原無人小屋（21：50）

1月1日 現役パーティと合流、天狗尾根へ。本日は気温が下ると大体予想したものの、前
日丸1日つぶしたのは大きなロスで、やむなく断念した次第である。 [阪本記]

冬山合宿 鹿島槍ヶ岳天狗尾根

事故報告の項参照

春山合宿 遠見尾根より五竜岳

期 間 3月16日 — 21日
メンバー L山田 榎野

3月16日 晴後雪。 神城（9：10） — 遠見小屋（14：05）

下川氏宅で入山届を済ませ、スキー場を横切って遠見尾根に取り付く。立派なトレールがつ
いているが、かなりの急傾斜で重荷がこたえる。どこまで登ってもスキー場の音楽が遠ざかっ
てくれない。遠見小屋が見えた頃から天候が悪化する。小屋の裏に雪洞を掘るが、雪が堅く掘
りづらい。

3月17日 雪後晴。 遠見小屋（7：15） — 小遠見・中遠見のコル（14：25）

吹雪をついて出発するが、トレールは全く消えており、視界もよくない。地蔵の頭を越えて
からは腰以上のラッセルとなり、途中でワカンをつけたがたいした効果はない。行程は遅々とし
てはかどらない。10時過ぎから次第に天候は回復に向かうが、風は依然として強く、休む
と非常に寒い。小遠見の付近まで来て漸く雪がクラストして歩きやすくなり喜んだのも束の間、

ピークを捲いてトラバースするとまたまた腰までもぐってうんざりする。中遠見の斜面を登る元気もなく、手前のコル付近で雪洞を堀る。

3月18日 快晴。 小遠見・中遠見のコル（7：05）——大遠見（10：00——10：15）——西遠見手前のコル（11：55）

寝心地がよすぎて寝過ぎてしまう程よく寝た。天気は快晴。元気一杯、いざ出発。膝から腰ぐらいのラッセルを物ともせず、快調に進む。中遠見を越えた所に雪洞があり、そこからトレールがついているのでワカンをはずす。しかしこのトレールは歩幅が合わないので歩きにくい。人間というのは勝手なもので、トレールが無いと言って文句を言い、有ればまた文句を言う。ピークやその西斜面はクラストしてアイゼンがよくきくので楽しい。大遠見を越えた所に竜谷大WVの大部隊が優雅に日向ぼっこなどして我々の方を注目するので、我々はその視線を意識して黙々と登り、彼らの視界から隠れたとたん急にしんどくなって坐り込んでしまった。西遠見のすぐ手前のコルから8m程シラタケ沢側におりた所に雪洞を堀る。すぐ横に古い雪洞があるのでそれを改造して使用しようかとも考えたが、いやしくも合宿のBCとすべきものを借家で済ませるのはケッタクソ悪いので新たに堀ることにした。

3月19日 吹雪後晴。 停滞。

3月20日 快晴。 BC（4：50）——五竜小屋（6：35——6：45）——五竜岳（8：05——8：25）——五竜小屋（9：30——9：50）——白岳（9：55——10：05）——BC（10：55）

満天の星と月の輝く下を五竜岳に向う。白岳の斜面はあまりにも広すぎ、しかも標識の赤旗があちこちにあるのでどこを登ったら良いのかさっぱりわからず、とにかくまっすぐ登る。膝の上までもぐる。斜面を登り切った所でひとやすみ。ちょうどこの時、地平線から太陽が浮かび上がって、我々を激励してくれた。白岳直下から左にトラバースするトレールに従う。五竜小屋からは雪がクラストしておりアイゼンがよくきいて快適である。快調に飛ばしすぎていささかしんどい。アイゼンが2度もはずれたのには閉口した。ザイルを使うまでもなく、あっさり頂上に着いた。下りは頂上直下の岩場でザイルを使用して1ピッチ下降し、さらに50mコンティニューアスでコルまで行ってザイルを解く。あとは黒部側のクラストした斜面を五竜小屋まで駆けおりる。白岳の頂上からはベタ雪となり、一步ごとに大きな雪団子がくっつき、不愉快この上ない。さんざん悪態をつき、不貞くされたように下るが、いっこうに下が近づかない。うんざりしきってどうしようもなくなった頃、ようやくのことでコルに辿りつき、西遠見を越えてBCに戻った。BCではのんびり日向ぼっこをして、カクネ里やシラタケ沢の支沢の雪崩の観賞などを楽しんだ。

3月21日 快晴。 西遠見（4：40）——小遠見（5：50——6：00）——遠見小屋（6：40——9：50）——神城（11：00）

雪が締まっているうちに降りてしまおうということで、暗いうちに撤収して下山したら、快調に飛ばし過ぎて、あっという間に遠見小屋に着いてしまった。入山の時、小屋から小遠見ま

で一日がかりでラッセルしたことなど嘘のようだ。遠見小屋でポケーッとして暇をつぶし、スキー場まで一気に駆けおきた。
〔山田記〕

1971 年度

屏風岩・涸沢 — 西穂

期 間 6月4日 — 7日

メンバー・ 屏風隊 : 山田 槇野

涸沢隊 : 船井 原

6月4日 雨。 上高地(9:10) — 徳沢(10:20 — 10:45) — 横尾(11:30)

上高地でバスをおりると雨が降っており意気はあがらない。槇野、原と共に横尾まで行くと、先発の船井が避難小屋の前で我々を迎えてくれた。雨は止む気配もないので今日はここまでとする。避難小屋は満員である。

6月5日 晴。 横尾(3:45) — 岩小舎付近、徒渉(4:10 — 5:10) — T4尾根下(5:55 — 6:20) — T2(7:35 — 9:00) — 東稜終了点(17:20 — 18:00) — 屏風の頭(19:00 — 19:10) — ビバーク(19:40)

昨日の雨が嘘のように晴れあがり今日の登攀にファイトが湧く。船井・原の涸沢パーティと別れ屏風岩に向う。横尾谷は昨日の雨で増水し、ザイル確保により冷たい冷たい徒渉をする。第一ルンゼの押し出しを登りT4尾根に取り付き、1ピッチ登ってコンティニューアスでT2へ。先行パーティがあり時間待ちを兼ねて濡れた靴下などを乾かす。1P目トップ山田、垂壁、小ハンクのハーケンはあまりきいていない。約15メートルでバンドに達する。2P目トップ槇野、快適な垂壁の人工登攀、40メートル。3P目トップ山田、草付のバンドから人工で垂壁を直上しバンドに達する。5メートル上のテラスに先行パーティが居るのでここで残置ハーケンをビレイ。後続の槇野がハーケンが抜け1メートル程落ちたが、これは御愛敬。槇野は5メートル上のテラスまで登る。4P目トップ山田、少しかぶり気味の壁の人工登攀から凹角のフリークライムで左側の大テラスへ、約25メートル。5P目トップ槇野、大テラスにはいらず右へバンドをトラバースして凹角を登りピナクルテラスへ。25メートルの容易なフリーのピッチ。6P目トップ山田、垂壁から灌木帯のテラスへ、約30メートル。ブッシュ帯を2ピッチ登って登攀終了。踏み跡を辿って屏風の頭に向ってノロノロと歩く。最低コル付近でビバーク。すでにあたりは暗く、おまけに雨がポツポツと降り出した。

6月6日 雨後晴。 ビバーク地(5:00) — 北尾根八峰(6:15 — 6:25) — 四峰(11:10) — 前穂高岳山頂(13:00 — 13:10) — 奥穂高岳山頂

(16:00 — 16:10) — 白出の科尔 (16:50)

雨が降っているので潤沢へおりようという事に決めて歩き出したら雨がやんだのでやはり北尾根を登る。しかしまたすぐに降り出した。見通しは全然きかない。睡眠不足で足取りは重い。五峰までは無難に越えたが、四峰の登りで奥又白側にはいり込み、ハーケンなどが現われ度肝を抜かれた。何とかそこを脱出したもののピーク直下のケルンからよく確かめもせずに雪渓を下るといやらしいガラ場に出た。これはおかしいと思って磁石で確かめたらまたまた奥又白に向って下降している事がわかった。あわてて引き返してようやく四峰のピークに立った。五峰から四峰までに1時間半もかかってしまった。三峰の登りは、岩が濡れているうえ、ふたりともかなり疲労しているのに念には念を入れてザイルを使う。2ピッチ目のチムニーは快適であった。二峰を登っている時、霧の彼方から「オーガック」のコールが聞こえ応答する。前穂の頂上に辿り着いた時にはほとんど雨はやんでいたが風が強いのでゆっくり休む気にはならない。吊尾根を歩き出すと急に疲労感・空腹感が増し、足どりは愈々重い。次第に天候は回復してジャンダルムなどが望まれるようになり、大休止という事にして坐り込んだ。すると太陽までが我々にほほえみかけてくれたのでありました。サラミヤクラッカーなどで多少の飢えをしのいで歩き出したが、疲労感はどうにもならず、足どりは依然として蟻の如しである。それでもいつかはきっと目的地に着くものと信じてひたすら歩を運ぶ。急な登りをあえぎながら登り、雪稜を渡り、雪壁を登り、さらにノロノロと歩いていくとついに北アルプス最高峰奥穂高岳の頂上に立つことが出来たのでありました。白出の科尔で船井・原パーティとめでたく再会した。白出の科尔は風が強烈に吹きまくり、濡れネズミの我々はただブルブルと震えるばかりである。夜になっても風は依然として強く、気温はぐんぐん下がり、寒さのあまり一晩中ほとんど寝られなかった。

6月7日 晴後曇。 白出の科尔 (5:45) — 奥穂高岳 (6:20 — 6:50) — 天狗の科尔 (9:45 — 10:35) — 西穂高岳 (13:05 — 13:30) — 西穂山荘 (14:45 — 15:25) — 田代橋 (16:35)

快晴、強風の中を奥穂に向う。奥穂でアイゼンをつけ、船井と原はアンザイレン。馬の背の雪稜はアイゼンがよく利く。ロバの耳のルンゼの雪が一部氷化しており、面白い。ジャンダルムをまいた所で船井・原のザイルを解き、少し行った所でアイゼンはずす。タタミ岩尾根の頭をすぎてから、岳沢側に迷い込んだりしながら、天狗の科尔に着いて大休止。水が無いので食物は喉を通らない。西穂の山頂で単独行の女性ハイカーと親しくなり、行動を共にする。独標で少し休んだが、とにかく彼女はタフで我々は彼女に引っぱられるようにしてついて行った。西穂山荘でようやく水分にありついた。 [山田記]

夏山合宿 剣岳定着

期 間 7月15日 — 25日

メンバー C L山田 S L槇野 船井 高田 井坂 原 中西 夏井

7月15日 曇後一時雨。 室堂(10:35) — みくりが池温泉(縦走用食料デポ、11:00 — 12:00) — 雷鳥(12:30 — 13:05) — 別山乗越(15:10 — 15:25) — 別山平(15:55 — 16:25) — 真砂(18:10)

7月16日 雨後曇。 真砂BC(10:30) — 長次郎雪渓にて雪上訓練 — BC(16:50)

7月17日 雨降ったり止んだり。 BC(8:15) — 平蔵雪渓にてカッティングの練習(11:15 — 11:55) — 平蔵コル(12:25 — 13:00) — 本峰(13:20 — 13:40) — 三ノ窓(16:20 — 16:30) — 二股(17:55) — BC(19:00)

7月18日 曇後雨。 停滞、散策。

7月19日 雨。 停滞。

7月20日 快晴。 山田、船井、高田、源治郎尾根一峰平蔵側上部フェイス成城大ルートに登攀せんとするも、1ピッチ目、トップ山田が20m登って転落し、敢えなく敗退。槇野、井坂、原、中西、源治郎尾根 — 本峰 — 別山尾根縦走。夏井、室堂 — 雷鳥 — 別山乗越 — BC入り。

7月21日 晴後雨。 夏井、井坂、原、中西、真砂沢より真砂岳 — 剣沢 — BC。山田は剣沢診療所にて治療を受ける。(槇野、船井同行。)

7月22日 雨。 停滞。

7月23日 曇。 山田、高田を除いて、八ッ峰上半を縦走し、長次郎谷右俣下降。

7月24日 雨。 停滞。

7月25日 晴後雨。 撤収、真砂 — 剣沢 — 別山 — 立山 — 一ノ越 — 室堂 — 雷鳥。

10日間の合宿中、丸1日晴れていたのは、たった1日だけ。あとは動いた日は、必ずビショぬれになって帰ってきた。岩登りは、山田のスリップもあり、1本も登らず。新人にとっては本当にかわいそうな山行であった。 (槇野記)

夏山合宿 後立山縦走

期 間 7月26日 — 30日

メンバー L槇野 井坂 原 中西

7月26日 風雨。 雷鳥沢で停滞。

7月27日 一ノ越 — 五色ヶ原 — 平

7月28日 平——針ノ木谷——針ノ木峠
7月29日 峠——針ノ木岳——スバリ——種池
7月30日 種池より下山。

思い出すのもいやな夏山合宿だった。あんなに雨がふらなければあるいは問題も起こらなかったかも知れないのに。10日間、8人が6人用テントにヒザをかかえて震えていた。何ヶ月にもわたるヒマラヤ遠征では、気の合った仲間どうしても、はしの持ち方一つでもなぐり合いの大喧嘩が起こる様なことをよく聞く。今回もそんな風だった。積み積った不満が縦走でついに爆発した。定着の時にもあったのだが、ここではもっと露骨に表われた。原と中西が井坂にたてついた。「先輩、先輩とエラそうな口を聞くな!」。次の日は、原と中西がテントの中で殴り合いを始めた。ここから帰るといふ中西に、ここで喧嘩別れしたら一生仲直り出来んぞと、とにかく仲直りさせたものの、疲れてしまった。たった4人のパーティさえまとめる事が出来ない自分に腹が立ち、寂しくもなった。又、彼等3人にも腹が立った。子供じゃあるまいし、何という見の狭さなのだろう。もっとも、あれだけの雨では無理もなかったかも知れぬが。とにかく縦走をやり通すと誓い合ったものの、今度は私がボカをした。種池でテントを燃やしてしまったのだ。燃えたテントを前にして、もうこの連中とパーティーを組むこともあるまいと、かえってホッとしたというのが本当のところだ。パーティーを組むことの難かしさ、リーダーの難かしさというものを改めて知らされ、又、自分の非力というものを思い知らされた合宿だった。〔榎野記〕

荒沢尾根より鹿島槍北壁主稜

期 間 9月22日 — 26日
メンバー 阪本OB 榎野

(本山行は1つしかなかった時計を山の店の瀬川さんに貸したため時間がわからない。ただ、朝日が昇る頃から日没手前まで動いたことは確かである。)

9月22日 晴、夜一時雨。 大谷原でタクシーを降り、栗の散乱する中を荒沢に入る。心配していた大滝は右岸にハシゴがかかってあり、何なく上に出る。二股近くより雪溪の上を歩く。奥壁北稜に取り付く予定であったので、北股の二股より大滝に向かうが、どこもかもラントクルフトがすごく、取りつくしまもない。時期を誤まったようだ。やむなく荒沢尾根に向かう。向かって左のルンゼに雪溪より移る。草付と濡れて苔のついた岩のミックスした誠にいやらしいルンゼである。急な斜面をブッシュにつかまりながら登る。高度はグングンかせげることが、何の楽しみもない登りである。第一峰を右から廻り込み、第二峰を越して、第三峰を正面に見た所でツェルトを張る。ここからは荒沢奥壁の全貌がわかる。棺桶状の岩室で寝る。水がなくてやりきれない。

9月23日 晴。 第三峰は、a、b、c峰に分かれ、鋸歯状のピーク。ビバーク地よりアンザイレン。チンネの頂上部を千枚おろしにした様なナイフリッジである。スリップすれば、ザイルは簡単に切断されるだろう。最後のギャップまでアブザイレン。ここが荒沢尾根の事実上の発生点である。東尾根の斜面をなお2ピッチ、ザイルをのばし、あとはコンテでブッシュをこいで東尾根上の踏み跡へ飛び出す。一安心したのも束の間、又、猛烈なブッシュ。東尾根第一岩峰は北尾根の三峰の感じ。ハングに手こずる。第二岩峰も見え目より悪い。上部の斜面は雪がいたら登れるのだろうか？ ジャンクションより北峰へ。水がなくフラフラなので、頂上に散乱している空缶にたまった雨水を飲む。おいしかった。水がないため冷池小屋の近くでツェルトを張る。

9月24日 晴。 昨日の道を引き返し、ジャンクションより天狗尾根を下る。アンザイレンして。ブッシュとガレ場で結構気を使う。最低コル近くは手強いブッシュ。いいかげんいやになり、このまま下ろうかと思ったが、阪本は鼻で休憩さえしないでカクネ里に下る。笹のブッシュを尻制動で下る。尾根がスパッと切れた所より左へトラバース。40mいっばいでルンゼに入る。ルンゼをクライミングダウンとアブザイレン2回でようやく念願のカクネ里に降り立つ。この辺、雪のない時に来る所ではない。

9月25日 晴後曇後風雨。 薄暗いうちに起き、出発の用意をする。雪溪をつめて主稜に向かう。本でのルートは先端の岬部分を避けて右側からコルに上ってそこから始めているが、雪溪がズタズタで取り付けず、岬の先端（即ち主稜の最先端）より取り付く。1P、凹角直上30m。2P、10m右へトラバース。テラス着。3P、ハーケン6本連打（内、3本残置）でハングを越し、4P、垂直のブッシュこぎ。草付部分が悪く、足をおくとズリおちてくる。ハイ松の枝で所々、ランニングビレイを取る。あと2Pハイ松こぎで最低鞍部着。ここまで時間を喰う。左側に黒い涸れ滝をみながらリッジに行く。ブッシュこぎ。主稜上のテラスに着いた頃より大粒の雨。下着を捨て、セーターをじかに着る。忠実にリッジをだどる。垂直のブッシュこぎで所々、岩が出てくる。このたまたま出てくる岩場が誠に手強い。残置ハーケンをすぎる思いで利用する。滝をこすとルンゼになり岩が出るが、雨がひどく、落石の恐れもあるため、なおもリッジをハイ松こぎする。出発以来、何ピッチのばしたかわからない。恐らく20ピッチ近くのばしただろう。ただ黙々とハイ松をこいで。ガスの切れ間からキレットが下に見えるかなり上部にきていることがわかるが、雨もひどく、そろそろ日も暮れるはずなのでビバークに決定。ハイ松と体をザイルで結び、急斜面に尻だけおろせる場所を確保する。食料はチーズ半箱とクラッカー1袋、これで全部である。夜中、下着の中まで水が流れ、2人で肩をだきあって歌をうたい、どなりちらしわめきちらして一夜を過ごす。（下に降りてから聞いたのであるが、本州付近で急に台風が発生して、この晩、中部山岳を通過したとのことであった。初雪が降るかと思うほど寒かった。）

9月26日 曇後晴。 食べる物もなく、ビショ濡れのあわれな格好で登攀開始。一晩中、冷たい水で洗われたため足がつりそうだ。ただ頂上が近いということだけが我々を支える。な

おもブッシュこぎをするが、数ピッチで傾斜がゆるくなる。岩尾根に出て、歩き易くなり、もうすぐ主稜が終るぞと思っていると、目の前に遭難碑が現われた。我々はすでに稜線に出ているのだ。思わず感激の握手をする。「生きて帰れた！」吊り尾根で登攀具をしまい、晴れ間のみえる中を赤岩尾根を経て、鹿島部落へ下る。
〔槇野記〕

秋山合宿 横尾尾根 — 槍ヶ岳

期 間 11月21日—29日

メンバー L船井 山田 槇野 原 吉田(隆) 夏井

11月21日 快晴。 木村小屋(9:30) — 明神(10:30—40) — 徳沢(11:30—50) — 横尾(12:45)

新島々からタクシーに乗るが、電車の中には旗竿を、新島々のタクシー乗場にはひとまとめにした全員のピッケルを置き忘れる。が、要領よくすべて無事回収する。不吉な予感。上高地の木村小屋にて入山届を出す。横尾へ向うが雪なし。ザックのワカンがうらめしい。徳沢園で蝶へ向うという同志社大パーティと別れ、横尾に着く。

11月22日 雪。 横尾(5:40) — 本谷橋(7:05—7:15) — 本谷大岩(9:25—10:00) — 2430m TS (15:50)

昨日とうってかわり雪。昨夜来10cmの積雪。本谷橋より涸沢道と分れ、本谷に入る。新雪の河原は歩きづらい。本谷の大岩上方約200mより横尾尾根に取付く。草付きの急斜面に新雪フワリで、イヤイヤする。カンバの樹林がハイ松に変る辺をテントサイトとする。

11月23日 晴後雪。 TS(7:30) — 横尾尾根上(8:20—8:35) — 横尾の歯(10:05—14:20) — 2600m TS (15:30)

出発時は快晴無風であったが、レンズ雲が現われ、悪天候を告げている。横尾の歯にてフィックス約100m。この頃より小雪が舞い始める。ダブルボッカする。天狗の科尔手前に大きなギャップが現われる。これを越えずに幕営。

11月24日 雪。 TS(10:50) — ギャップの登り(11:05—13:30) — 天狗の科尔(14:10)

風雪のため停滞ムード。トランプをする。9:15の天気図をとる。風が弱まりつつあるので出発。ギャップ登りにて40mフィックス。天狗の科尔にて幕営。

11月25日 風雪。 停滞。終日トランプ。

11月26日 晴後風雪。 天狗の科尔(7:25) — 露岩(10:30) — 稜線直下(14:00—14:15) — 中岳手前科尔(15:15—15:25) — 中岳(16:15) — 大喰岳直下(18:30)

今日は晴れ。しかし、先は見えている。朝焼けとレンズ雲が非常に美しい。天狗の科尔から

ラッセル。2900m付近の露台から主稜線直下までのナイフエッジに、約150mのフィックス。急登のため胸あたりまでくる雪をかきわける。南岳の稜線にはまだ雪庇がそれ程張っておらず、何なく、ポッカリと主稜上へ出る。空模様は、フィックスを張り始めた頃よりすでに風雪。主稜上風強し。夏道どおしに中岳へ。中岳の登りにまたラッセル。下りには日が暮れた。フィックス40mで大喰の科尔。ヘッドランプをたよりになおも北上するが、何分太い尾根筋であるためルートはつきりせず、大喰頂上直下にてダウン。テントを張る。

11月27日 風雪。 TS(10:10) — 肩の小屋(11:35)

風雪の稜線上に長居は無用。テントを撤収。厳しい。テントサイトから1つピークを越えて登り切ると、大喰の頂上であった。飛騨乗越を通り過ぎ、飛騨側の支稜につつまみ、肩の小屋を探しあてるために引き返す。

11月28日 雪。 肩の小屋(9:40) — 槍平(16:45)

昨日薪でシュラフ等をすっかり乾かしたせいもあり、寝過す。中崎尾根を断念し、飛騨沢を下る。2400m付近でアイゼンをワカンに。腰までのラッセルで槍平避難小屋へ入る。

11月29日 雪。 槍平(7:00) — 滝谷出合(9:15 — 9:30) — 白出沢出合(10:50 — 11:20) — 穂高平(11:55 — 12:00) — 新穂高温泉(12:35)

夏道通しに行く。新穂高温泉にて、温泉につかる。

〔船井記〕

入山日はカンカン照りで、稜線の雪も少なく、横尾ではワカンを捨てて行こうかという話も出たぐらいだが、その晩より雪が降り始め、それから丸8日間吹雪かれ通し、槍の肩の小屋についたのは横尾を出てから実に6日目のことであった。今シーズンでは最も冬山らしい天気だった。

新雪の横尾尾根は意外に悪く、ナイフエッジ、岩稜、胸を没するラッセルと非常に厳しかった。ともあれ、全員一丸となって合宿をやり終えたことは、我々に大きな自信を植えつけてくれた。帰ってきて何日かたってから、市大の永田君が早月で遭難したことを知った。

〔槇野記〕

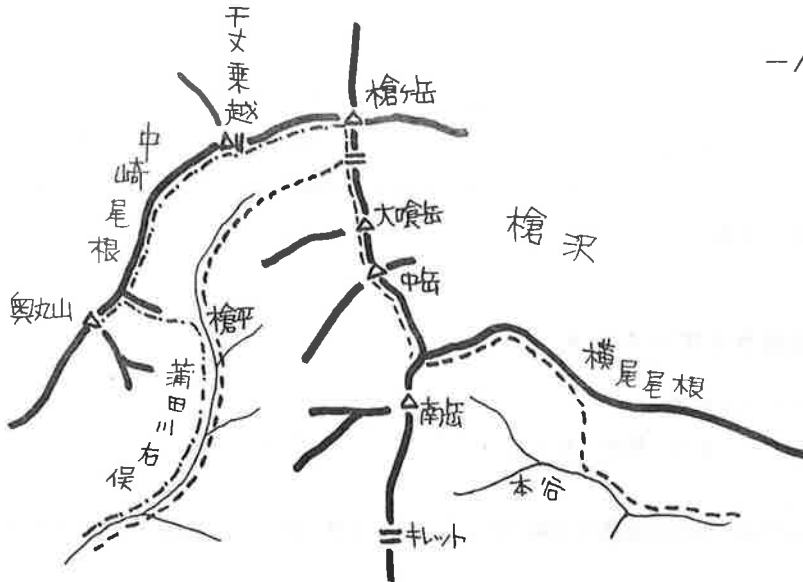
冬山合宿 中崎尾根 — 槍ヶ岳

期 間 1月2日 — 5日

メンバー CL槇野 SL船井 山田 原 中西 吉田(隆)

1月2日 雪後曇。 新穂高温泉(8:45) — 白出沢出合(11:30) — 滝谷出合(13:30 — 13:50) — 槍平(15:10)

神岡からチャーターしたマイクロバスで新穂高温泉へ。そこで入山届を済ませ、朝食をとって、いざ出発。夜行の疲れで足取りは重い道はよく踏まれているので、割にはかどる。槍平はテントやイグルーがたくさん見られる。



1月3日 快晴。 槍平(7:15) — 稜線(9:25) — 奥丸山往復 — 2370m、BC(11:00) — 2500m(13:45 — 14:00) — BC(14:30)、偵察隊BC着(15:50)

槍平からすぐ中崎尾根支稜に取付く。傾斜はきつい立派なトレールがついており、また天気も良いので心は軽い。稜線に出たところに荷を置いて奥丸山まで往復。目の前に滝谷の岩壁が素晴らしい姿を見せている。約2370m地点にBCを建設する。あまり早く着きすぎたので偵察を兼ねて全員で散歩に出る。2500mのピークからは、榎野、船井が千丈乗越まで偵察に行く。

1月4日 晴後曇。 BC(5:20) — 千丈乗越(6:45) — 肩の小屋(8:00 — 8:15) — 大槍(8:35 — 9:00) — 肩の小屋(9:15 — 10:00) — 雪上訓練(11:00 — 13:20) — BC(14:40)

空は晴れて月明りが美しいが、南東の風が吹き、雲が次第に広がり天気が下り坂であることを示している。踏みかためられた雪道はアイゼンがよく利いて快調に進む。千丈乗越に出ると蒲田側からの風が酷しく、ゆっくり休む気にもなれない。西鎌尾根はほとんど雪もつかず歩きやすいが、あまりの烈風にしばしば立ち止まる。肩の小屋にザックを置き、ゼルプストをつけて大槍に向うが、ザイルは使わずに済んだ。大槍の頂上は風は強いが360度の展望に魅了される。速く能登半島まで見えた。西鎌の下りはあっけない。アタックが早く終りすぎたので、右俣谷において雪上訓練、さらに支稜をラッセルして中崎尾根のBCに戻る。天気はどうやら一日もちこたえてくれた。夜から雪が降り出した。

1月5日 雪。 BC撤収(7:20) — 支稜下降点(2400m)(8:40 — 8:45) — 槍平(9:30 — 9:50) — 白出沢出合(12:30) — 新穂高温泉(14:10)

約30cmの新雪、時折強い風が吹き、今合宿で初めて冬山らしい酷しさのある撤収となった。

—134—

トレールを捜しながら歩くが、トレールをはずすと腰までもぐる。支稜にはいってからは快調にはかどる。槍平からもトレールはところどころはつきりせず苦勞する。滝谷出合でヤッケ、オーバーズボンなどを脱ぎ身軽になる。新穂高で温泉に入り、合宿のよごれと疲れを洗い流し、さっぱりする。 (山田記)

小太郎岩ライオンルート

1月9日(前夜発)

メンバー 船井 榎野 他1名

小太郎岩は非常に困難な岩場であるが、もっと登られてよい岩場のひとつである。

御在所岳藤内壁

期間 2月19日—20日

メンバー 榎野 船井 山田 原 中西 吉田 高橋(俊)OB

1972年度(上半期概略)

5月合宿 穂高岳涸沢定着

期間 4月30日—5月7日

メンバー CL 榎野 SL 船井 山田 原 中西 水谷 福田 斉藤OB 阪本OB

- 4月30日 快晴。 涸沢入山。
- 5月1日 雨。 停滞。
- 5月2日 吹雪後曇。 白出コルまで雪上訓練。
- 5月3日 快晴。 北尾根(船井、山田、中西、斉藤、阪本)。雪上訓練(榎野、水谷、福田)。原入山。
- 5月4日 晴後曇。 白出より北穂(榎野、山田、原、中西)。奥穂(船井、福田)。涸沢槍東稜(斉藤、阪本)。
- 5月5日 雨。 停滞。
- 5月6日 快晴。 北尾根(榎野、原)。屏風緑ルート(船井、阪本)—途中ルートを間違え終了点でビバーク。西穂(斉藤)。他は横尾まで撤収。
- 5月7日 快晴。 横尾—上高地、下山。

北鎌尾根 — 西穂高岳

期 間 6月3日 — 8日

メンバー 山田 吉田

- 6月3日 曇。 大町 — 千天出合 — P₂
6月4日 雨後雪。 P₂ — 独標基部
6月5日 ガス後快晴。 独標基部 — 槍の肩
6月6日 快晴。 槍の肩 — 白出コル
6月7日 薄曇。 白出 — 西穂 — 上高地、吉田下山。山田は白沢出合まで。
6月8日 雨。 白沢 — 徳本峠 — 島々

穂高岳滝谷

期 間 6月21日 — 25日

メンバー 阪本OB 山田

- 6月21日 曇後時々雨。 溜沢へ入山。
6月22日 晴。 滝谷第一尾根登攀。
6月23日 快晴。 C沢右俣奥壁登攀。小ピナクルテラスでピバーク。
6月24日 晴。 奥壁登攀後、溜沢より白沢出合へ。
6月25日 晴。 下山。

夏山合宿 剣岳定着

期 間 7月19日 — 31日

メンバー L船井 山田 榎野 原 中西 吉田 水谷 古田 小林 高橋(後)OB 夏井
OB

雪上訓練：平蔵 — 小窓、八ッ峰、源治郎尾根（以上全員）。マイナー — 八ッ峰下半（榎野・原・夏井）。

岩登り：六峰Aフェイス（山田・中西、船井・小林、原・榎野）。Dフェイス久留米大（山田・中西・吉田）富山大（榎野・水谷）。Cフェイス（原・夏井、船井・古田・高橋）。チンネ左下 — 左方カンテ（山田・高橋）。左稜線上下（船井・古田）。中央チムニー — c d（中西・夏井、原・小林）。北条新村 — ab（榎野・吉田・水谷）。剣尾根上下（山田・中西、船井・原）。剣尾根下半 — 池の谷中央壁 — 上半（榎野・夏井）。

ビバーク山行：源治郎—大日、八ッ峰下半—Cフェイス—剣尾根上半—Aフェイス、池の平—大窓—白萩川—池の谷左俣。

散歩：仙人、内蔵ノ助平その他。

夏山合宿 縦走

A 剣岳 — 檜ヶ岳

期 間 8月1日—7日

メンバー L 船井 中西 吉田 小林 水谷

B 剣岳 — 赤牛岳 — 烏帽子岳

期 間 8月1日—6日

メンバー L 榎野 山田 原 夏井

黒部下の廊下

期 間 9月2日—8日

メンバー 船井 榎野

9月2日 樺平—志合谷出合

9月3日 奥鐘山西壁紫岳会直上ルート。10ピッチ目で榎野ザックを落とし、登攀中止。アップザイレン10回で下降。

9月4日 樺平までザック捜し。阿曾原泊り。

9月5日 阿曾原—別山沢出合。大スラブを狙うが雪の状態が悪く、途中より戻る。

9月6日 大ヘツリ左ルンゼ—大タテガビン第一尾根。P3上でビバーク。

9月7日 第一尾根終了後ハンゴ谷乗越を経て内蔵ノ助平へ。

9月8日 丸山南東壁取り付く元気なし。黒四より下山。

この他に、水谷の表銀座縦走、古田の白馬三山縦走、船井と斉藤OBによる滝谷末端からD沢、がある。(9月現在)

事 故 報 告

—— 1970 年度冬山合宿 ——

場 所	鹿島槍ヶ岳天狗尾根	1 月 7 日	下山
期 間	1 月 1 日 — 6 日	1 月 8 日 — 10 日	予備日
メンバー	C L 山田 S L 榎野 高田 井坂 齊藤 O B 阪本 O B	1 月 11 日	最終下山日

天狗の鼻に B C を置いて、鹿島槍北峰アタック。

1 月 1 日 — 2 日 天狗の鼻に B C 設営
1 月 3 日 ルート偵察
1 月 4 日 — 6 日 うち 1 日 頂上アタック

1 月 1 日 晴後雪。 鹿島部落 (8 : 15) — 大谷原 (9 : 25 — 10 : 20) — 1650m 地点 (16 : 25) — 就寝 (22 : 00)

狩野氏宅に計画書を提出し、茶をいただく。大谷原で先発の阪本、齊藤と会ったが準備ができていないので先に行く。道を間違え大冷沢に入り引き返す。単調で急な長い登りと 40kg 近い荷のため全員バテ気味。16 時頃より雪になる。

1 月 2 日 雪後晴、上部は地吹雪。 起床 (5 : 30) — 出発 (8 : 10) — 第一クロアール下 (10 : 25 — 11 : 05) — 第二クロアール下 (12 : 15) — 天狗の鼻 (13 : 20) — 就寝 (23 : 20)

食料、燃料の一部をデポし出発。第一クロアールで時間待ち。食事をとり、フィッ

クスの用意をする。11 ミリザイル 40m いったいのばし、セカンド以下はカラビナを通して登る。バケツのようなステップがあるので特に困難ではないが、雪が不安定なのと急傾斜であるため緊張する。第二クロアールは残置フィックスを利用。

急斜面にピッケルを雪面いっぱいにつち込んで登りきると天狗の鼻。最低コルで事故があり、人員とザイル提供の要請を受ける。阪本、山田は詳細を聞くためコルに行き、残り 4 名で B C 設営。猛烈な地吹雪。阪本、山田は B C に戻り、齊藤を加え 3 名で再び事故現場に向い、齊藤、阪本は救助作業、山田は連絡にあたる。17 時救助を打ちきり、救助隊全員天狗の鼻に戻り、遭難した熊本パーティの雪洞で作戦会議。19 : 30 齊藤、阪本、山田は B C に戻る。熊本パーティの松尾氏を加え 7 人で寝る。

1 月 3 日 快晴、地吹雪。 起床 (3 : 30) — 救助隊出発 (5 : 20) — へり着 (11 : 00) — 齊藤帰幕 (16 : 00) — 阪本帰幕 (19 : 30) — 就寝 (23 : 50)

齊藤、阪本は救助に出发。山田は連絡の

ため最低コル、鼻間を往復。他の3名はBCの補強とヘリポートの整地。ヘリが到着してからは物資をコルまで運搬し、午後からは、救助された負傷者の手当をする。夕方齊藤が負傷者一名と共にBCに戻る。その直後ヘリによって負傷者が大町におろされ、あわただしく時をすごす。暗くなってからカクネ里で重傷者収容にあたっていた阪本が他の救助隊員たちと帰幕。夕食の豚汁を提供。夜は県警の内山氏を加え、ウィスキーを廻しながら談笑。阪本は去年痛め

た右足親指が悪化。相当ひどく凍傷にかかっている。明日は、提供したザイルが返却され次第デポ回収に行くことを決める。

1月4日 雪ふったりやんだり。日没後吹雪。
起床(7:40) — 出発(11:10)
10時にザイルが返却されたがモタモタして出発が遅れる。デポ回収は阪本、榎野、高田、井坂の4名。齊藤は本日下山。山田はキーパー。(以下は事故発生から、救出までの行動記録。)

	荷上げパーティ	BC
11:10	出発。オーダーは榎、井、阪、高、斉の順。第二、第一クロアール共、フィックスにブルージックで下る。	
13:45	デポ地着。	
14:20	下山する齊藤と別れBCへ引き返す。オーダーは榎、井、高、阪。	
16:45	第一クロアール通過。40m 2本でフィックス。	
17:00	第二クロアール取付き。残置フィックスにブルージックで登る。	
17:20	フィックス終了点で井坂がブルージックを解いた直後、スリップし、荒沢側の急なルンゼを一瞬のうちに流れる。(この時、高田と井坂の間は約10m。高田、阪本とも気付かず。榎野は、鼻への急斜面を登っていて、後続への注意を怠っていた。) 直ちに3名は第二クロを下りコルにつく。高田、阪本はビバークの用意をし、ザイル一本を予備に持って、アンザイルンしてコンテでルンゼを下る。下降中コールをかけるが応答なし。ルンゼ中頃で応答確認。ただちに井坂にランプをつけるよう指示。ランプを確認。	
18:15	阪本・高田・井坂	榎野はデポの荷をコルに残し、山田に連絡するためBCに向かう。
19:00頃	2名は井坂の停止地点に到着。	山田・榎野 榎野BC着。事故を山田に知らせ、ビバークの準備をする。
19:35	場所は荒沢尾根末端近辺で、コルより約200	2名はコルに向かうが、この頃

	<p>m下の地点。井坂はデブリ上で自然停止していた。井坂の傷の状態から登行可能と判断。直ちに阪、井、高の順でアンザイレン。コンテで約50m荒沢を下降し、ルンゼ左側の急な雪稜の末端の岩かげで井坂の状態を調べる。荒沢奥壁の方角で雪崩が3度発生。井坂の傷の状態――</p>	<p>より、猛吹雪となる。ヘッドランプの明りをたよりに歩くが、風雪のため視界がきかず下降ルートがわからない。トレースもすぐ消されてしまうため危険と判断、BCへ戻る。</p>
<p>20:15</p>	<p>右額1ヶ所3、4cmの裂傷。頭部3ヶ所裂傷。口唇1ヶ所裂傷。顔全体が異常にはれ上っている。左足1ヶ所裂傷。意識正常。登行可能と判断。とりあえず応急処置（赤チン、ホータイ、セデス）をし、不要な荷を井坂のザックと共に放棄し、阪、井、高の順でアンザイレン。</p>	<p>BC着。テント内を整理し、腹ごしらえ。風が強く、テントのフレームがきしむ。2人で必死になってテントをささえる。</p>
<p>22:00</p>	<p>偵察ののち、脱出ルート为天狗尾根側の急な雪稜に求める。地吹雪で視界きかず。ブッシュ帯をぬける頃から井坂体力が衰えるが、稜線近くで回復。3名は行動中寒気がひどく、強い睡魔におそわれる。</p>	<p>天気図をとるが、気圧配置は完全な西高東低。</p>
<p>20:00頃 1月5日</p>	<p>(時間はすべて後からの推定による。)</p>	<p>夜通し烈風が吹きまくりテント内は真っ白。</p>
<p>3:30頃</p>	<p>天狗尾根に出る。</p>	<p>起床。強風のため、テントが持ちこたえられなくなる恐れがあるため、雪洞に移る準備をする。</p>
<p>4:30頃</p>	<p>第二クロアール下のコル着く。稜線は風が強くはうようにして進む。</p>	
<p>5:00</p>	<p>第二クロアールの中間点までスタカットで登るも地吹雪で目もあけられず、今日中にBCに戻ることを断念。ツェルトをかぶる。ここで初めて時計を見、すでに5日になっているのに驚く。ベンチレーターより外をみると空が白んでいる。</p>	
<p>5:30頃</p>	<p>第二クロアールの中間点までスタカットで登るも地吹雪で目もあけられず、今日中にBCに戻ることを断念。ツェルトをかぶる。ここで初めて時計を見、すでに5日になっているのに驚く。ベンチレーターより外をみると空が白んでいる。</p>	
<p>8:00</p>	<p>体をあたため、眠いのをこらえて出発。</p>	<p>雪洞に移り、朝食をとり、風のおさまるのをまって出発することに決める。</p>
<p>8:15</p>	<p>体をあたため、眠いのをこらえて出発。</p>	
<p>10:10</p>	<p>BC着。途中、地吹雪と疲労のため登行がはかどらなかつた。</p>	<p>出発するため、雪洞から出てアイゼンをはめていると3人が帰幕。</p>

ただちにシュラフに井坂を寝かせる。大きなイビキをかいて寝る。夕食の用意をして、明日の行動を協議するが、このぶんで

は、井坂も何とか下れそうなので、明日全員で下山することにする。就寝22:30。

1月6日 快晴、地吹雪。 起床(6

：00) 出発(11:10) 1900m テント場(16:15) 荒沢(18:05) 大谷原(21:20) 鹿島部落(22:30)

まず4名が朝食をすませ、その後井坂に雑炊を食べさせる。顔のハレは少しひいた様な感じがする。食べ終わってすぐ撤収の用意をするが手間どる。井坂はキスリングに個装のみ。第二クロアールは昨日の雪でフィックスがうまり、ザイルをフィックスして下る。トレールが全然ないため、阪本がトップに行く。井坂、榎野がアンザイレン。途中、トップ阪本の足もとに亀裂が入る。ザイルを投げて脱出。膝上までの非常に重いラッセルが続く。1900mのテント場でザイルを解き、あとは森林帯を交代でラッセルをするが、登り以上に時間がかかる。1650mの我々のテント場跡についた頃には、すでに薄暗くなっていたが、すぐに月がでてきたので、ランプはつけずに行く。井坂は大丈夫の様であるが、目の上に傷をしているため片眼がふさがっている。やっとのことで荒沢に降り立ち、月明りが雪をぼんやりと照らす中を大谷原に向かう。大谷原で阪本、高田は荷物を無人小屋におき、井坂の荷は高田がかつく。鹿島部落により狩野さん宅で事故の報告をし、タクシーを呼んでもらう。井坂、山田、榎野は大町へ向かい、阪本、高田は大谷原へ引き返し、そこで一夜を明かす。大町で診察を受けた結果、頭の内部には異常がないとのこと。ホッとす。額の傷は、十針ぬってもらった。井坂は顔中はれあがっているが、医者の悪口をいうほど回復している。山田、榎野は手配してもらった旅館へ戻り寝る。(7日午前3:00)

Ⅲ. 山行全体の検討

(i) 遭難当日の行動について

(イ) 4日の荷上げの必要性について

熊本パーティの事故のため、我々の食料計画も大幅に狂ってしまった訳だが、さしあたって困るということにはなかった。一方、全員の疲労度ということに関しては、阪本のみ非常に疲れていたが、翌日の活動にさしつかえる程ではなかった。他の4人はむしろ精神的弛緩が見られた位である。従って特に4日を休養日にする理由はなかった。それで4日はザイルが返却され次第、荷上げに向かうということに決まった。しかしこの決定をいま一度検討してみると、まずザイルが返却される時間については大体8時頃には返って来るだろうという希望的観測をしていたこと、更に夜の12時近くまで、ウィスキーを飲んで話していたこと、翌日、出発が11時すぎになったこと等の点を振り返ると、パーティに一体荷上げをする意志があったのかどうか疑わざるを得ない。しかも、冬山の常識から考えて見て、この三点の行為の異常さと、その異常さを誰も認識していなかったというこのパーティの異常さが浮かび上がってくる。この山行全体を通じても言えることであるが、リーダーシップの欠如、部員の日頃の山行のいかげんさが、この4日の決定に表われている。

(ロ) メンバー構成について

井坂をメンバーに入れたのはキーパーに残すより、実際に行動に参加させて経験を積みさせるという意図があったが、本番の山行においては、機能、安全性をより重視させるべきであるといえる。次にリーダーが残ったことについては、サブリーダーが残った所で変わりはないといえる。あくまでも最善のオーダーは、井坂がキーパーをすることであった。このようなメンバー構成から考えて我々は対

象とすべき山を間違ったのではないかという問題がでてくる。

(i) 事故直前の行動について

トップの槇野は、時間的にあせていたのと、クローアルを抜け、悪場は終わったという安心感とで後続に対して注意を払っていない。又、高田にしても、井坂に注意を払うだけの余裕はなく、井坂の後には阪本が当然つくべきであった。しかし「登り」でしかも「帰り道」という安心感で、それまでマンツーマンで注意を払っていた阪本も、ここでは注意を払っていない。つまり誰も井坂の行動を注意していなかった。井坂のスリップを誰も目撃していなかったのがその証拠である。これらの要因と、井坂自身の技術の未熟さ（トレーニングのいかげんさを見よ）、精神的緊張感の欠如が事故を起こした直接原因である。従って、今後この種の事故を起こさないためには、各自の基礎的技術の習得、慎重さと共に、上級者の follow up が重要な要素となってくる。反対に我々がそのことを怠れば、事故は再び起きると断言できる。

(ii) 計画段階での問題点

部会では、2年部員がリーダーシップを握る最初の山行であること、部員の技術、体力、経験、メンバー構成等は問題にはならず、大学山岳部の冬山合宿としては、この辺が適当であろうということで決定した（ハイカーがハイキングコースを選ぶように）。当然、計画の検討などなかった。というより、我々には計画を検討するとは、どういうことかということさえわかっていなかった。個々には、食料計画では、鶴橋のモチ屋の前までいってから計画を練り直したこと。装備においては、テントのフレームが山へ入る直前になって発見できたこと。荷上げにダブルボッカを強い

られたが、こんなことは部会では全く問題にでなかった。従って、もし我々が天狗尾根を遠見尾根や八方尾根に変えた所で（実際には大学山岳部であるというプライドのため、その様な山にはいけなかった）かわりはなかったといえる。即ち冬山に行く力量などもととなかったのだ。

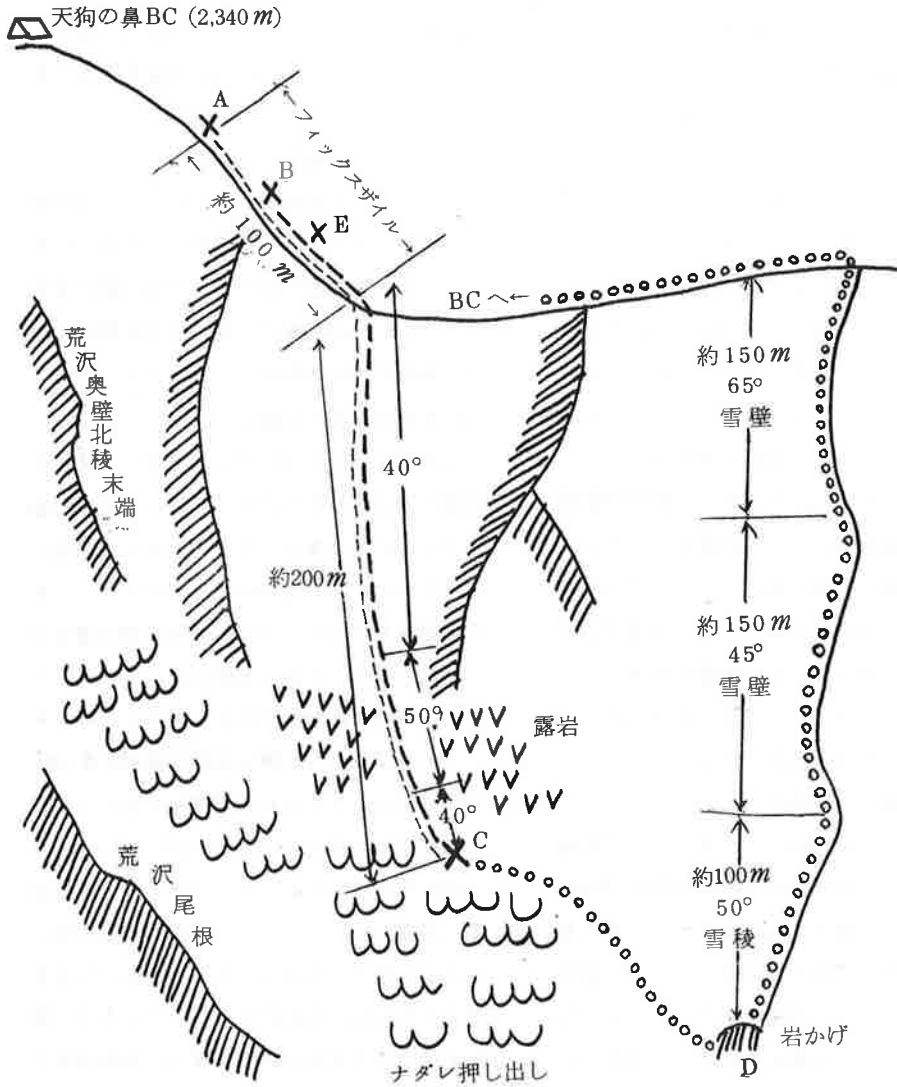
(iii) 技術上の問題点について

上で述べた計画段階でのいかげんさに更に拍車をかけて、井坂を荒沢につき落としたものが我々の技術であろう。各種技術のまずさ、テント内の乱雑さ、規律の欠如等は、今回の事故に大いに貢献したといえる。

(iv) 救出完了後の行動について

前日（5日）の話し合いの結果、全員で大谷原に下山することになったのは、井坂の傷がそんなに悪くなかったため（我々の主観であったが）、井坂を病院に収容すると、B Cの撤収を同時にしようという安易な考えが支配していた。しかし実際には、ホエーブスの不調で食事に時間がかかったのと、パッキングに時間をとられ撤収時間が昼前になった。又、前日の悪天でトレースは全く消え（当時天狗尾根には我々のパーティだけであった。）予想外に時間がかかったことなどで、鹿島部落へ夜遅くたどりついた。そこで実際には、どのような下山方法をとるべきであったかを考えてみたい。井坂のダメージの少なさ（表面上のことであるが）が、我々に負傷者をできるだけ早く下山させるという判断をにぶらせた。（我々が下山は簡単にできると考えていたことにもよる。）常道としては、山田、阪本が井坂について下山すべきであった。そうすれば、出発は大幅に短縮できたはずだし、機動性は大きくなり、井坂の疲労度を可能な限り少なくし得たと思われる。病院への早期

- 井坂の滑落コース
- 阪本、高田の下降ルート
- 3名の脱出ルート



- A 井坂スリップ地点
- B 阪本、高田の下降地点
- C 井坂停止地点
- D 井坂の応急手当地点
- E ビバーク地点

遭難付近の概念図

収容も可能であったはずだ。BCの撤収もその後にするという余裕があったにもかかわらず、遭難ということから来るうろたえと合宿打ち切りの決定から来る里心のため、井坂優先主義はくずれ去った。

(V) 阪本、高田の救援活動報告

事故発生直後の井坂が滑落したルンゼを下降する際に、他の安全な下降路を見つけできなかったかという問題が、部会の討論の中で出てきたが、あの時の私の判断はほぼ次の様であった。まず時刻はすでに17時をすぎており井坂を夜間に発見するためには、落ちた所を忠実に下るのが確実であるということ。さらに、リッジはあるにはあったが、リッジを下ると下部の地形が応々にして複雑になっており、滑落ルートからはずれる（夜間ということを加味しての話であるが）心配があったこと。従って、雪崩を誘発する可能性はあったけれど（実際にラビネンツークは3、4ヶ所あった）、夜間であったこと、気温が低下していたことで、ルンゼを下降した。次に脱出ルートを選択、又、三名がどこか安全な場所でビバークする必要があったか否かの問題については、私は次の如き判断をしていた。まず脱出ルートを選択については、三つの方法を考えていた。一つは下降ルートを登り直すこと。これは時間短縮にはなるが、雪崩の危険が多すぎ止めた。二つめは荒沢自体を下降することであった。しかし、これも、ハーケン、ハンマー等がないため、荒沢の大滝の通過について、見通しがたたないのでやめた。しかも、荒沢を下降し再度BCへ戻るか、鹿島部落へ行く行動は、槇野への指示不足もあり、BCとの間で行動にズレを起こし、危険

な状態に陥る恐れがあった。（又、装備に関しても、事故発生後、BCに戻って、充分な用意をするだけの時間的余裕は、井坂の生死は別としても、雪崩でうめられてしまい恐れがあったため、無かった。つまり時間との競争であった。）

従って、三つめの停止地点の左岸から、尾根にほとんどまっすぐにつきあげているブッシュ混じりの雪壁を強引に登るのが最善のルートと考えた訳である。次にビバークの必要性については、たとえ安全な場所があったとしても、これまた山田、槇野兩名との時間的ズレを起こすこと、又、燃料がメタ2箱しかなかったこと（猛吹雪で気温の低下が著しかった）。

最後には井坂自身が「動ける」状態であったこと等によりビバークの必要性は全くなかったと考える。

付 記

脱出ルートとしては荒沢を少々下降し、天狗尾根下半部につきあげている適当なりッジを見いだす可能性は十分に存在していたことは否定しない。しかし、我々2名が現場に到着し、井坂を岩かけにつれて行き介抱しているうちに奥壁でかなり大きな雪崩が三度発生、現場付近までデブリが押しよせてきたことが気になって早めに荒沢自体を離れようと思っていた。それが三つめのルートを選んだ理由にもなっている。〔この項阪本記〕

(VI) 山田、槇野の5日の行動について

これは事故発生直後の阪本の指示不足ということに関連して来るのであるが、山田、槇野兩名の5日の行動にはいくつかの問題点が指適される。それは兩名共、5日早朝BCを

出て第二クロアールのコルまで下降し、そこで5名のピバークの用意をして、ある程度の捜索をし、もし3名の安否が確認できなければ鹿島部落へ連絡に下るということであったが、この行動予定は兩名の間で確認されていたものではなく、状況によっては危険な行動を起こす可能性は充分にあった。というのは、前日、榎野はBCに向かう途中で井坂のコールを聞いており、彼の生存は確認していたのである。だから5日朝に5名の安否が確認できていなくとも、鹿島部落へ救助を求めに行くのではなく、よく状況を見極めてからその後の行動を起こすべきであった。又、3名の安否確認のためルンゼを下降するといった行動をとっていたなら二重遭難をひき起こすことも、充分考えられた。しかし、結果的には、彼らが、出発しようとしている所へ我々3名が戻ってきたということで、両方の時間的ズレを引き起こすことがなかったというのは、全くの偶然という他はない。いずれにしても、事故発生時の阪本の指示は不徹底なものであったから、その後の行動において不測の事態が起こる可能性は充分にあったといえる。3名からの連絡を待つか、BCで待機するか、更には救助隊要請の件についての時間的打ち合わせをしておくべきであったし、山田、榎野兩名での捜索は絶対にしてはならない旨の指示をすべきであった。いずれにしても、井坂救出のことにのみ頭を使い、その他の重要なことに充分気を使わなかったことは、冷静さを欠いていたことの一例とはいえ、阪本は遭難時のリーダーシップの完全な把握につとめ、十分な指示をすべきであった。

Ⅳ. 結論 — 反省と今後の展望

以上の如く、事故の経過と諸々の問題点とを検討し、かつ分析してきた。そこから我々なりの結論を導きだし、かつ今後の部の在り方と山行のあり方を展望したいと思う。現外大山岳部を振り返る時に、今に至るまでの山岳部のあり方を再検討しなければならない。

まず部員の層の薄さと各自の活動の不活発さ（部運営と山行を含めての）が過去のリーダーのリーダーシップにひずみを生じさせ、部運営をあいまいなものにしていった。このような事情から各々の部員が、その時々々のリーダーに対する依存度を高め、それによって自主的、積極的態度を失って行き、また部運営のあいまいさが個々の部員の「主体的な萌芽」のでるのを妨げることとなった。

この様な事情を背景として今回の冬山合宿においては、2年生リーダーという変則性を生じ、又、合宿参加者は各々の積極的姿勢をなおざりにし、又、リーダーシップのあいまいさから前記の如き多くの問題を生みだした。

ではこれらの諸々のひずみ、問題を解決するにはどうすればよいのか？

結論的に云うならば、部運営及び一つ一つの山行の中で（計画段階から入山中を含めて）各自が主体性を確立していくことをめざし、かつ積極的にとりくんでいくのが最善の道であると考え。つまりは上記の如き問題を具体的に、批判的に解決していく場としての山行、部運営をしていかなければならないと考える。〔文責榎野〕

—「遭難報告」(1971年2月)より抜萃—

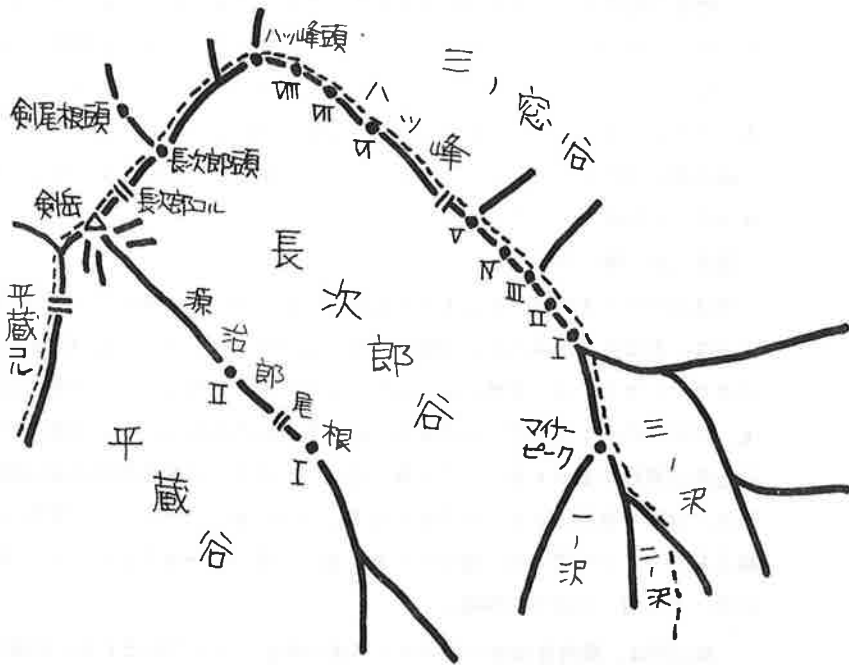
〇 B 山 行

I マイナーピーク——ハツ峰

1963年3月

山根と組んで源治郎尾根一峰の初登に成功した私の意気は盛んであった。総合的な困難さはむしろハツ峰の方が上だろうと前々から云われていた。ルートそのものの長さ、それに伴う食糧、装備と体力の相反する関係にある問題、そして最後に一峰から末端までのルートに関する問題、というよりもこの部分について我々は何も知らなかった。(阪大パーティーによって、マイナーピークを通らずに直接一峰に入る尾根がトレースされたことはあったが、このパーティーも五峰までで退かねばならなかった。)

ハツ峰の全山縦走はもう二年越しの夢であるが、いつもの癖で偵察には極めて不熱心だった——楽しみ分量が減ってしまうから——と。



メンバー 西前四郎 奥田邦治

三月三十一日 晴

四時鶴ヶ御前乗越の雪洞を出る。西前は特大のサブに軽シュラフとガスコンロを、奥田は大型

キスリングに軽シユラフと四泊分の食糧を担いでいる。ビバークは三回の予定だが、荒れたら五・六日は喰いのばすつもりである。剣沢のラッセルは予期以上に深く大腿までもぐった。第一の誤算かと思ってみても、もう仕方がない。剣沢小屋で夜が明ける。七時真砂沢出合到着。マイナーの壁が暖かい陽光を受けて濡れて見える。いやな予感がするが、雪崩は昨日で出つくした筈と胸を押し鎮める。アイゼンに替えて二の沢に入る。雪崩のつけた筋の所だけがカンカンに堅い。十時マイナーの逆層の壁（百米）の左のコルに立つ。取付きの四十米が悪い。ブツシユのある逆層気味の脆い岩に雪がついていて、いつまでたっても調子が出ないのだ。やっとビレー点についたと思うと、ザイルで引き上げようとするザックが重い上に、あちこちに引掛るので、又降りてやらねばならない。この二ピッチに三時間も費したろう。マイナーピーク頂上二時。もたもたした懸垂を混えて次の雪壁の下に立つともう四時になっていた。まだ少し早いがビバークに決めて雪をならす。ここは左に一の沢、右に三の沢支流がつき上げる狭いコルである。懸垂のザイルでツェルトを張った。何か気合の乗らない変な一日。荷物の重さが意外に影響しているらしい。しかもそのことがいつまでも呑み込めないでいる。

四月一日 晴 強風

一峰まではまだ遠い。雪壁や雪稜をフルスピードで通過しているつもりが、結構ラッセルもあり、懸垂の度にザイルがもつれる有様ではスピードは知れている。雪つぶて混じりの強風はビツケルを空に舞わせる程にもなる。殆んど昼食も取らず、一峰の岩場についた時、始めてゆとりらしいものが出て来た。簡単な岩登りで一峰に立つ。四時。もう勝負はついたも同然だった。雲行きはあやしくなったが、我々はこの上もなく山づれしたベアだった。ビバークは二峰。ラヂオが前線通過を告げている。湿った雪がツェルトに積ると、酸欠不足で炊事も出来ず、荒い呼吸をしながら二人共眼り込んでしまった。

四月二日 晴 強風

今日はベースまで帰ってしまおうと急いで出たが、八ツ峰特有の手の切れそうな雪のナイフリッジは、実は足を踏み込むと大腿までもぐるのだった。リッジ上の雪を左右に落としながら半分スタカットでラッセルを続けるという妙な取り合せである。二人の調子は上々。ようやく荷物にも、六十米のナイロンザイルにも八ツ峰にも馴れたらしい。五・六峰のコル十二時。七峰の下り以上には緊張する所もなく、八ツ峰の頭に立った時、真赤な夕陽が富山湾の向うに沈もうとしていた。登攀の喜びよりも、その壮大な美しさが印象的だった。一時間程ツェルトで休んだ後、稜線どおしベースへ帰った。星空の下を、富山の街の灯を見ながらトレースを辿る心は満ち足りていた。BC着 三日午前四時。 [西前記]

本山行は、関西登高会の1963年春山剣岳合宿中に行なわれ、同会「月報」第9号（1963年2月発行）に掲載されたものであるが、西前・奥田両氏とも山岳部OBであり、又、記録的に見ても価値があると思ひ、西前氏の承諾を得て転載させていただいた。尚、西前氏は、この山行の数日前、正確には3月26・7日の両日、やはり登高会の山根氏と組んで、源治郎一峰平蔵側弓形クラックルート（下部左ルンゼ）の初登に成功されている。

II 鹿島槍北壁主稜

1972年1月

期 間 12月31日—1月8日

メンバー 齊藤清雄 阪本公博

12月31日 快晴 東尾根出合(9:45) — 第一クロアール(15:15) — 天狗の鼻(17:20)

避難小屋附近、雪非常に少なく感じる。天狗の鼻にてツエルトを張った頃、残照の影と月の影が入れ変わった感じ。明星が澄んでいた。21:00頃寝る。

1月1日 晴(満月) 10時頃より雪 天狗の鼻(4:30) — カクネ里出合(6:20) — 一末端取付(10:20) — 雪洞(12:30完了13:30)

月明りコウコウの中を天狗の鼻から下降。右手木々伝いに下り直下の沢を下る。雪崩の跡もあるも幾分湿ったしまり方をしている。下るにつれて膝から腰位まで没す。少々あせり気味。カクネの里は膝から股位、塵り雪崩の跡は膝下の所あり。側壁又は沢からの雪崩はカクネの沢真中までは押し出していない様子。末端岩壁の右手に取付き、稜をからんで左に登り(1ピッチ)、稜(直上も可)と雪溪の境を登る。右手の木に向ってトラバース(3-4m) — 2ピッチ。更に左上し細い稜に出、稜通しに(右方)14、5m — 3ピッチ。少々登ると左手からくる細い稜に取り付き登る — 4ピッチ。数m先にてこの稜があいまいになる手前にて雪洞。結晶の大きい雪が降り続き視界悪し。トサカのような所に雪洞を掘ったことになる。両端切れており降雪はたちまちさらさらと流れ落ちる。

1月2日 昨日からの降雪続く 発(8:15) — 終了(12:15)

細い稜から先、雪不安定で、昨夜来からの300m+αの積雪が輪をかける。雪の切れ目を右手の木に向ってトラバース — 1P。木で確保し、真上の雪庇基部を顔つき合わせて左手からからむ。セカンドは雪に没し、トップの切りくずす雪が塵雪崩となって、左手の沢にひんばる。からみ切った所の稜も細く、左手へ続く。草付き及びブッシュを登り(これから後はトップ、ザックを置いてピストン)、太い木で確保、2ピッチ。2人で約4時間。視界悪し。又又、雪稜に雪洞。暖をとっている現在16:00。風弱く細雪降り続く。

1月3日 快晴時々風 出発(8:30) — 鞍部(16:30)

少々曖昧な稜をコギ進む。前方にキノコが立ふさがる。稜が約130度位右へ曲っている為出来た雪庇で、切り登る作業に時間を食う。その上は右が本来の雪庇がかなり張り出し左も少々雪庇を張り出し沢へと切れ落ちている。少し左気味に腰から胸までうまり、不安定な雪をこぐ。左手かすかな稜との出合いで確保、1ピッチ。右からの細い稜との出合いをすぎると張り出し少くない。前方左手に木有り、2ピッチ。岩壁と雪壁の境を左にまき気味に木を目ざす。草付き及びブッシュの稜直上も可能だが急傾斜。木をピンにするも傾斜あり不安定、3ピッチ。更に直上(ブッシュを手がかりに)、稜線に出る。右、雪庇。左側をトラバース気味に15~20m位、突き当たって右へ直上。稜は左方へ続くが切る、4ピッチ。前方右手上方キノコ状の

雪庇。雪庇の右下方のブッシュぞいにトラバース、雪不安定、10~13m。左上ルンゼ草付きを掘りおこして15~20m。適当なスタンスあるも身体立たされ、足下はストーンと下まで一直線。— 思鞍部の手前に小さい木数本あり。その木をピンに2m位左上方へ。この鞍部はキノコ状雪庇から続いており、蝶形岩壁が左下方に見える。5ピッチ。このキノコは稜がやはり130度位曲っている為、大きな岩のテラスに出来た物。右へ稜が続く。左は蝶形岩壁の沢、上部に滝が有り、広い沢を形成。塵雪崩がヒンパン。鞍部になると風に乗った塵をあびる。ザイルフィックスのまま、戻る。

1月4日 晴 夜雪 出発(7:30)

昨夜のビヴァーク、ブッシュの斜面の為座ったまま、寒くてねれず。今日は雪洞掘り、シュラフでねるという希望もはかなく、松の木の根基で2人やっと座ってツェルトをかぶる。鞍部から壁を登る。アブミ2本、ハーケン2本、松の木カンバ3~4本ある手前にて又アブミ、1ピッチ。右へ木をトラバース(2~3m)後、ブッシュと岩混りを直上し、木登りよろしく、35m強急登、2ピッチ。更に上部。岩肌の出ている所までで日没。太い木の所に戻る。たったの2ピッチで日没ノ急斜面の木登り、消耗激しく、キビシイノ朝焼けにも拘らず天気もったが、20時頃より雪。降雪の為、ザックに座ったまま前面に押し出され何度も雪かきする。どっと座っているより、雪かきの方が身体暖まる。ベンチレーターから外を見たり、タバコをすったりしてねるのをあきらめる。

1月5日 雪 食事(7:35) 雪洞(16:15)

1ピッチ、露岩を右からまき稜に出る。ハイ松の雪を払い払いあえぐ。2ピッチ、稜右曲がりの為、雪庇(キノコ)。左手に行く。3ピッチ、露岩を越えブッシュを掘りおこし稜を辿る。4ピッチ、そのまま左へ一寸まき気味にトラバース、2本の木でピレイ。露岩あり。右手雪庇。その先で稜は消えて、5m位右側に稜続く。滝上部の沢が左手。この5m位の間、チリが水のように上からさらさらと流れている。雪洞を掘り、さらに流れている所まで行ってみる。何かしらんが、ピッチ進まず、すぐ日が暮れる感じ。雪のしめりと、昨夜のビヴァークの為、身体ぬれたまま。

1月6日 小雪、但し西空明るい。夜晴れ。 出発(8:30)

昨夜、チリの流れていた所を直上。ひざ上から股までのラッセル。右の稜の木目ざし、水平にトラバース、1ピッチ。9時になると、又、さらさらチリ雪崩流れ出していた。急斜面の為ブッシュ混りで、胸に雪がつかえる。ハイ松にのっている雪に、ソオーとのろうとするがすっぽり抜け、結局、掘りおこしたり、時には木登りしたり、繰り返し繰り返す、8ピッチ。日没まで動く。急斜面木のカブの所に2人ですわりツェルトをかぶる。足下はすっぱり切れている。

食事—カレーライス、カタクリ粉をたべる。毎朝・夜、脱水状態に陥入り、水ガブ飲み感じ。風強し、冷え込みキビシ。星満天。四ツ谷・大町・松本の灯がはっきり見える。明日は晴れか?足をこすったり、膝をさすったり、ねるのをやめている。冷え込み増々、ローソクを燈したまま、時々ベンチをのぞきタバコをすう。今日もすぎ1月7日。AM1:00記。

1月7日 快晴 食事(6:40)

7日ぶりに直接日光をあびる。直接日光に当たると、ポカポカと暖く心豊かになる。キレット・五竜へ続く稜線より上部に居ることがわかり、頂上間近かさを感じる。

出発(8:30) - 天狗稜線(13:45) 頂上(14:00) - 天狗の鼻(17:15)

2ピッチ目から緩斜面になり、9ピッチ繰り返して稜線に着く。頂上より1つ目のコブ下に出る。1ピッチコンテにて頂上。快晴にめぐまれ頂上より360度欲しいまま。立去り難し。下降路、踏み跡の上の積雪の為アイゼンのつめかからず慎重に、要所々々でピレイ。天狗の鼻にて金気等 re-pack ed。夕日没せんとしている。ヘッドランプをつけ第2クロアール探がすも見つからず、阪本氏と少々もめる。結局天狗の鼻迄戻る。投げ捨ててあったガソリン、食糧罐を拾い、イグルーの残骸を直し、ツェルトをはる。食糧・ガソリンともに豊富。食事を取り、コーヒー等を飲み、ストーブをたき続ける。昨夜もウツラだったが、何んとなき坐ったままでほのほをじっと見ている。何度もガソリンを入れ、夜の明けるのをまつ。ねるのが勿体ない気持の為、そのまま過ごす。ともあれ、主稜一本に7日間も要するという事が分かった。

AM 2:30起

1月8日 晴 天狗の鼻(9:10) - 第一クロアール下(10:20) - 小屋(12:50)
- 鹿島部落(13:30)

下山の日。食べたり、のんだり、ゆっくり過ごす。膝までのラッセル続く。下に行くに従い、雪が日光にけ、アイゼンはダンゴ、5歩と歩めず。雪の下の踏み跡、カチカチ、ダンゴアイゼンの為とで、下降に苦勞する。荒沢の出合にて人に会う。

主稜は取付きが勝負であった。幸い満月の中を天狗より下降し、辛じて末端に取つけたが、翌日からは前日からの降雪の為、沢という沢、ルンゼというルンゼは雪崩、その真中にある感さえる程激しいものだった。雪崩によって起きた風によって吹きつける塵雪をあびると、オタオタしそうになる。1月1日に取り付けたという事は幸運という外なし。尚、ルートについてはかなり感覚的な記述の為と、視界悪かった為近視眼的に記している故、多少不明瞭な点有り、御容赦を。

終りにピッチ数と時間を表にしてみた。(次頁)

〔齊藤記〕

	天候	<ピッチ数>	<出発時>	<完了時>	<行動所要時間>
1. 1	(晴・雪)	2P	10:20 (取付)	※ 12:30	2 時間
2	(雪)	2P	8:15	12:15	4 "
3	(快 晴)	5P	8:30	16:30	8 "
4	(晴)	2P	7:30	17:30	10 "
5	(雪)	4P	8:30	16:15	7:45
6	(小 雪)	8P	8:00	18:00	10 時間
7	(快 晴)	9P (+1Pコンテ)	8:30	14:00	5:30
Total: 7日間		33ピッチ			47時間15分

※天狗の鼻一末端取付 6時間30分

